

025309-001-3

839-145

きょうと 一名所と美術の案内-

松山 高吉/著

1冊

M28

ADC-2742



839
2
145

たけなす

名所と美樹の集用

上巻

きやうと目録

第一編

○緒言

○凡例

○京都畧史

○延暦遷都の京城并に大内裡圖

○皇宮沿革小史

○明治維新前の宮城圖

○美術小談

○京都及び近傍明細圖

第二編

京都勝覽第一日 三條大橋より四條大橋
へ出て東部を北へ廻る

○三條大橋

四十三丁 ○三條小橋 高瀬川
木屋町

四十四丁

一

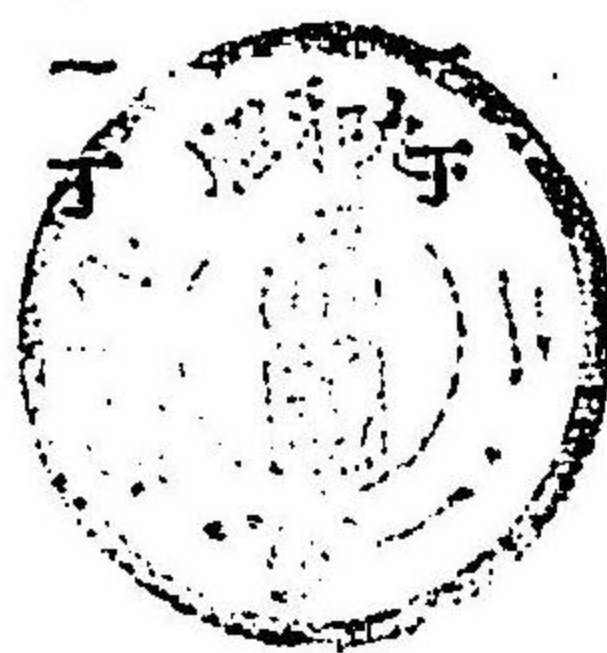
五

九

丁 丁 丁

二十

三十



目録

- 新京極式部、和泉 四十四丁 ○蛸薬師天喜、光 四十五丁
 - 四條大橋園、新地 四十六丁 ○八坂神社祇園 四十八丁
 - 智恩院系櫻、浅黄櫻 五十一丁 ○植髮御影堂青蓮院 五十四丁
 - 粟田神社吉水園 五十五丁 ○粟田陶器附粟田燒史 五十六丁
 - 疏水運河イシクライン 五十九丁 ○南禪寺細川、什寶 六十丁
 - 永觀堂附、岩垣 六十三丁 ○若王子社如忍、輪瀧、手瀧 六十五丁
 - 黒谷、光明寺附、燈懸 六十七丁 ○眞如堂附、什寶 六十九丁
 - 法然院善氣、水安、榮寺、談合 七十丁 ○銀閣寺附、茶室 七十三丁
 - 吉田神社北神樂、岡 七十五丁 ○第三高等學校 七十七丁
 - 百萬遍附、什寶 七十八丁 ○織物會社 七十九丁
- 京都勝覽第二日東部南の方、東福寺に更りに圓山に還る
- 建仁寺附、赤松、圓心の塔、安居庵、忍坂首塚、三輪執齋の塔、 八十丁
 - 六波羅密寺附、什寶 八十五丁 ○五條大橋 八十六丁

- 大佛殿大塚 八十七丁 ○豐國神社豐國山 八十九丁
 - 妙法院附、什寶 九十丁 ○智積院附、什寶 九十二丁
 - 帝國博物館 九十一丁 ○三十三間堂 九十七丁
 - 東福寺附、天橋、月輪殿 九十三丁 ○泉涌寺附、歴朝の帝寶 九十七丁
 - 西大谷鳥邊野、關寺、高倉帝の、小啓の塔 百一丁 ○清水坂陶器附、燒略、清水 百六丁
 - 八坂塔 百九丁 ○高臺寺附、雨茶屋、象茶亭 百十丁
 - 双林寺性昭の塔、西行の塔、西行庵、太雅堂 百十三丁
 - 靈山表忠の銅碑、木戸孝允墓 百十七丁 ○東大谷 百十八丁
 - 圓山鐵泉浴場、長樂寺、頼山陽の墓 百十八丁 ○將軍塚 百二十一丁
- 京都勝覽第三日東部なる大極殿に始まり北部に回り市内を經過して還る
- 大極殿附、大極殿由來 百二十二丁 ○平安神宮 百二十五丁
 - 熊野神社 百二十六丁 ○聖護院 百二十六丁

- 高等女學校 百二十七丁○療病院 百二十七丁
- 梨木神社 百二十八丁○師範學校 百二十八丁
- 下御靈 百二十九丁○美術學校 百三十丁
- 京都博覽會場 百三十一丁○仙洞御所大宮御所 百三十一丁
- 皇宮諸殿、諸門及び御
苑内、白鬘神社 百三十二丁○同志社學校普通學校、理
科學校、政
法學校、神學 百三十三丁○相國寺附
音樓、齒
齋堂 百三十三丁○妙覺寺附
什寶 百三十七丁○妙顯寺附
什寶 百三十七丁○本法寺附
什寶 百三十八丁
- 白峯神社祭神 百三十八丁○同志社病院 百四十丁
- 護王神社祭神 百四十一丁○京都府 百四十二丁
- 盲啞院 百四十二丁○京都市議事堂 百四十三丁
- 本能寺附
什寶 百四十三丁

京都勝覽第四日北部下鴨社より西部
に回り六角堂に終る

- 下加茂神社葵祭、糺の森
御手澤川 百四十四丁○上加茂神社祭神、由來
山、加茂 百四十五丁
 - 今宮神社 百四十七丁○大徳寺附
什寶○眞珠
院、芳春院、庭園 百四十七丁
 - 建勳神社舟岡山
床柱、萩枝の
連棚、衣笠山 百五十丁○金閣寺附
門、遊、鯉、魚、石、夕
住亭、南天、樹の 百五十一丁○平野神社祭神、櫻 百五十一丁
 - 北野神社附
什寶 百五十四丁○釋迦堂 百五十五丁
 - 西陣織物附
物、京都 百六十六丁○二條離宮 百六十丁
 - 神泉苑 百六十一丁○六角堂生花師池の坊 百六十二丁
 - 尊攘堂 百六十三丁
- 京都勝覽第五日市内を經過し西南
部より西に回る
- 佛光寺附
什寶 百六十四丁○因幡藥師 百六十五丁
 - 東本願寺附
什寶 百六十六丁○藪内紹智附
道、起、茶 百六十七丁
 - 本國寺附
什寶 百七十丁○本願寺附
什寶 百七十一丁
 - 興正寺 百七十四丁○六孫王 百七十四丁

- 東寺附 什寶五重塔 百七十五丁 ○島原 百七十九丁
- 壬生寺附 壬生狂言 百七十九丁 ○空也堂 百八十丁

第三編

東北隔遠の名區

- 山端時仙堂、院、離宮 百八十三丁 ○八瀬天神社、辨慶の脊、鏡石、龜の洞、惟 百八十五丁
 - 融通寺、來迎院、音無瀨、圓融院、勝林寺、寶光房、後鳥羽風德二帝の陵、古知谷阿彌陀寺、寂光院、龜の清水、日蓮、雨蓮、風蓮
 - 比叡山東塔、西塔、橫川、無動寺、四明巖 百八十八丁 ○松崎妙泉寺本涌寺、妙圓寺、虎脊山、裏池 百九十一丁
 - 岩倉大雲寺紫雲巖、明神石、座 百九十二丁 ○鞍馬山御杉、脊、鏡石、備正谷、掘み石 百九十三丁
 - 貴船神社天岩、龍、王が瀨 百九十五丁 ○大悲山獅子岩、鏡石、乳石 百九十六丁
- 西方隔遠の名區
- 妙心寺附 什寶○玉鳳院、佐久間象山墓 百九十七丁 ○等持院附 利氏、累代の像 二百丁
 - 龍安寺附 什寶○虎子波 二百一丁 ○仁和寺附 什寶○櫻樹 二百二丁
 - 梅尾高山寺 二百五丁 ○榎尾西明寺 二百六丁

- 高尾神護寺本朝三稻、鐘、護王神社 二百六丁 ○愛宕山月輪寺、龍女水、時雨櫻、安瀬瀨 二百八丁
- 嵯峨釋迦堂小倉山、二尊院、西行法師の庵跡、定家卿の山庄、廣澤池、菊島庭湖石 二百十丁
- 大覺寺 二百十四丁 ○天龍寺 二百十四丁
- 嵐山大堰川、渡月橋、千鳥瀨、大慈湖、鏡泉場、戸難瀨瀨、櫻谷、淺黄櫻 二百十九丁 ○太秦寺太秦形石燈籠、桂宮院、八角堂 二百廿丁
- 法輪寺西行櫻 二百廿一丁 ○梅宮神社 二百廿二丁
- 松尾神社 二百廿二丁
- 桂離宮 二百二十二丁

附 錄

丹 波

- 保津川舟老坂、隱道、田子橋 二百廿四丁 ○龜岡 二百廿六丁
- 琴瀨 二百廿七丁

西南隔遠の名區

- 向日神社 二百廿八丁 ○長岡天神社額岡 二百廿八丁
- 柳谷楊柳、瀨布、楊水、獨鈷水 二百廿九丁 ○粟生光明寺 二百廿九丁

- 善峯寺十輪寺 二百卅丁 ○三鈷寺變嶽 二百卅二丁
- 西岩倉金藏寺 二百卅三丁 ○勝持寺長瀨子開居の遺蹟 上岩、玄寶石、指月池 二百卅三丁
- 大原神社 二百卅五丁 ○天王山寶積寺 二百卅六丁
- 男山神社 二百卅七丁 ○淀町 二百卅九丁
- 安樂壽院冠石、基盤 二百四十丁

南方隔遠の名區

- 鷲峰山金胎寺池多輪、妓樂、船車、及空鉢、餘 二百四十二丁 ○有市炭酸泉 二百四十二丁
- 大智寺八景 二百四十二丁 ○笠置山文殊院、福壽院、笠置石、虚空藏、石、太鼓、石、皇居、遺蹟、千年窟、胎 二百四十三丁
- 明神大瀧内堀、貝吹、岩、千手瀧 二百四十三丁

東南隔遠の名區

- 稻荷神社祭神辨 二百四十六丁 ○石峰寺五百羅漢の石像、名書、土若冲、基 二百五十丁
- 寶塔寺 二百五十一丁 ○瑞光寺元政基、深草里 二百五十一丁

- 藤森神社 二百五十三丁 ○桃山梅、溪、宇治、見、岩 二百五十四丁
- 伏見町 二百五十五丁 ○御香宮 二百五十六丁
- 觀月橋 二百五十六丁 ○巨椋池 二百五十七丁
- 宇治町附、日本茶、史、宇治、橋、橋、姫、史 二百五十七丁 ○平等院附、芝、釣、殿、鐘 二百六十六丁
- 縣神社 二百六十九丁 ○興正寺 二百七十丁
- 朝日山旗尾山 二百七十丁 ○離宮八幡 二百七十一丁
- 黃檗山萬福寺、十二勝景 二百七十二丁 ○御室戸寺喜撰嶽 二百七十二丁
- 醍醐寺下醍醐、上醍醐、三寶院、千疊敷 二百七十四丁 ○勸修寺 二百七十六丁
- 牛尾山音羽瀧、銚子瀧、岩、蛇、ヶ瀧 二百七十六丁 ○山科陵安祥寺 二百七十八丁

附 錄

近 江

- 三保崎疏水口、日岡、逢坂山、輝丸神社 二百八十二丁 ○唐崎の松 二百八十四丁
- 三井寺 二百八十二丁 ○近江八景 二百八十八丁
- 石山寺 二百八十六丁

○美術師人名索引

第四編

美術の葉

○繪畫諸名家畧傳

附 支那畫曆代人名
日支洋年代對照

○彫刻 佛工、金工、木
牙彫工等 妙手傳

○髹漆 蒔繪、螺鈿、堆
朱、沈金等 名工傳

○陶磁器製造名家傳

附 錄

○刺繡

第五編

雜 部

○七條停車場ステーション 氣車賃銀表 三百八十九丁 ○電氣鐵道

○人力車賃銀概界 三百九十丁 ○舟高瀬川、保津川

○客舎ヤカ 三百九十二丁 ○料理店 三百九十三丁

○郵便電信局郵便條例摘要、郵便爲替畧則 三百九十五丁

○通運會社通運賃錢表 四百五丁 ○銀行及び諸會社諸商店 四百六丁

○畫工及び彫利蒔繪師 四百廿七丁 ○病院 四百廿九丁

○醫師 四百卅一丁 ○藥局 四百卅二丁

○看病婦雇規則 四百卅二丁 ○内外尺度比較表 四百卅四丁

○内外衡量比較表 四百卅四丁 ○内外貨幣比較表 四百卅五丁

附 錄

○京都府管内物産 四百卅五丁

きやうと目錄終

目 録

十一

十

きやうと (名所と美術の案内)

第一編 緒言

京都 松山高吉著

わが日本の景勝と美術とは両ながら其名聲噴々として海外諸國に開き、
 山水の秀麗風光の明媚は、このづから人の心匠を藻繪ならしめ、或は文學
 に發し、或は工藝にあらはるゝを以て景勝とともに本邦美術の世に超卓
 せるも亦宜なり

獨國ポーン大學教授ライオン博士曰、それ日本國の天然の美は、則ち
 其美術の良師たり、殊に日本人その本性として、靜かに天然の良師の足
 下に坐し、常に目撃する山川草木の艶麗華美を研究し、而して之をその製
 造する美術品に畫き出すことを好む、故に日本人の製作する花瓶、木盤、屏
 風、縫箔等を見よ、かれらが好みて施さんとする粧飾は、或は壯大なる山嶽
 或は清幽なる溪谷、或は美麗なる河海、樹林、郊野等にして、實際その目撃す

る風景及び眞物をそのまゝ寫し出すにあらざるや、所謂天然は美術の良師なりとの金言は最も能く日本人によりて實踐せられたるを知る、されば世界に卓越せる天然の美中にありて其美術の世界に卓越するは當然の事なるのみ云云

斯て日本は世界の勝地たる如く京都は日本の勝地たり、美術に於る亦然り抑も京都は千七十餘年間の帝都にして、山河風月の幽趣なる、春花秋葉の艶麗なる、實に本邦の最たるなり、この地に帝王の御世を重ねさせ給へること七十餘代の多きに及びたれば、由緒ある名所舊跡少なからず、且梵刹神祠等には許多の珍器什寶を藏せり、この故に本邦の景勝名區を探らんと欲せば、先づ杖を京都に曳ざるべからず、又本邦の美術寶器を見んと欲せば、必ず轍を京都に向けざるべからず、景勝と美術とは實に京都の特色たり、而して京都の特有たる此兩者を案内して京都に遊ぶ内外の人士を便する良書いまだ世にいでず、來遊の客は不便を感ずべく、景勝と美術

とは紹介を失ひて嘆すべし
但し名勝を記せし書には山城名勝志、山州名勝志、雍州府誌などいふ者もあれど、事舊て日新の今日には無用に属するもの多し、且浩翰にして見るに不便、携帶に亦不便なるが上に、美術の事は固よりなし、近來まゝ坊間にて案内記やうの小冊子の目に觸るゝことあれど、鹵莽杜撰のもの多くして、用に足るべきは殆んど稀なり、京都の美術を記せるものに至りては、僅かに諸家什物の名目を掲げたる京都美術のしるべといふ小冊子の他には不完全なる者だになし、頗る缺點といふべし
この故に余その缺點を補ひて、景勝と美術とに富める京都を國の内外にあらはさんと、思ひ準備はせしものから、未だ果さずして、年経しが、當夏偶ま開を得たれば、多年の宿念を遂るはこの時にこそあれど、筆硯を三伏の友として、青梧牖下に涼を納れつゝ、起草にかゝりぬ、此書は京都に來遊する内外人士に、日本勝景の最、東洋美術の府たる京都を紹介し、且案内せん

とするにあれば則ちその名を稱して京都とよばん

明治廿七年の夏

凡例

- 一 本書は緒言にもいへる如く京都の名勝と美術とを弘く世にあらはすを以て目的とすれば名勝を案内すると共に梵刹神祠等に蔵する所の什寶を紹介し天造と人造との兩美を指示説明す
- 一 本書は遊覽者の携帶に便せんとすれば簡易を旨とするが故に名勝美術を指示説明するに當り古書舊記の類参考に備へしもの數百卷われを繁を厭ひて一々書目を掲げず
- 一 本書は名所舊跡のその名存すれどその跡定かならず又はその跡ありとも覽るべき價直なきものは皆省けり然る歴史文學もしくは工藝美術に要ありと認るものは繁を厭はずして之を記載し且古書に徴して細かに辯明を加へたり
- 一 本書はまゝ古人今人の詩歌を掲出して探勝の雅客に一層の興味をそへ又その感を深くし後日もなほ之によりて當日を想起し身再び勝區

に入るが如き娛樂あらしめんとす

一 本書は第四編に美術の榮てふ項を設け什寶美術の年代を詳かにし往々その作者の小傳をかゝげて一は時勢と技藝との係はり一は人の性行と美術との與かる所を知らしめ快樂と實益とを併せ得しめんとす

一 本書は方今歐米諸國に行はるゝガイドボックとは固より其趣きを殊にすれば旅客に便益を予ふる所のその好部分ばかりの書に倣ひて貨幣衡量の比較、涼車、馬車、人力車等の賃銀、旅亭并に宿料、郵便局、銀行、諸會社、病院、看病婦、醫師等おほよそ旅人のために要用と認るものは皆かゝげて第五編なる雜部に出せり

一 本書は名所を記するに強ち方角によらず又郡區をとはず只巡覽の便にしたがひて記し三條大橋を以てその起點とす、三條大橋は昔より諸街道元標のある所にして旅客おほくはこの邊に宿り且三條通りは上下京の中央たればなり

一 本書は目錄に第一日第二日と順次に日を記せしと雖も見るに粗密あり人によりて同じからず殊に什寶等を熟視せんには一個所にて一日を費して尙足ざることあるべし、此はたゞ路順の便にせしまでなれば強ち日子に拘泥すべからず

一 本書は遠隔の名山勝區を別に分ち方角によりて順次に記載す、比叡山鞍馬、大悲山宇治等は一日もしくは二日を要して他の個所とも巡覽するを得ざればなり

一 本書は稀に京都外の勝地名區を記することあり、保津川舟の快を試みんとする人のために丹波龜山城の由來を記し、疏水の洞源を見んとする客のために三井寺、唐崎、石山等をかゝけたる類是なり

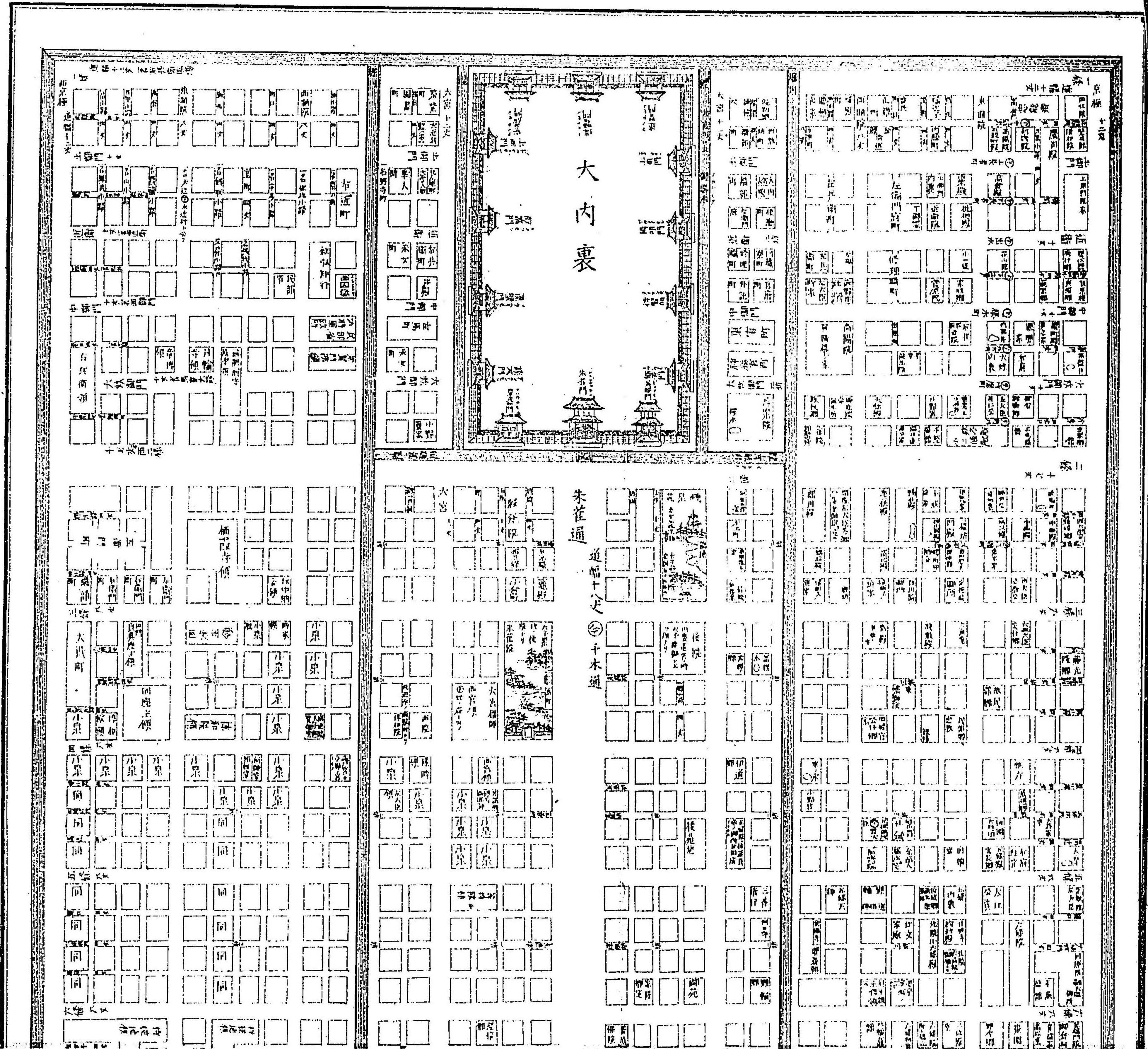
一 本書は内外人に便せんためなれば一は邦語を以てし一は英語を以てす、邦語の方に力を添られしは木村忠彦氏にして、英語の方に専ら勞を執れしはオプアートル、服部他助氏なり、又この書のために注意を加へ

英語の訂正に助力せられしは同志社教授ヨルダン博士なり本書幸ひに
京都遊覽の内外人士に便益を予ふるを得ばその功三氏にあづかる所お
はし茲に鳴謝す

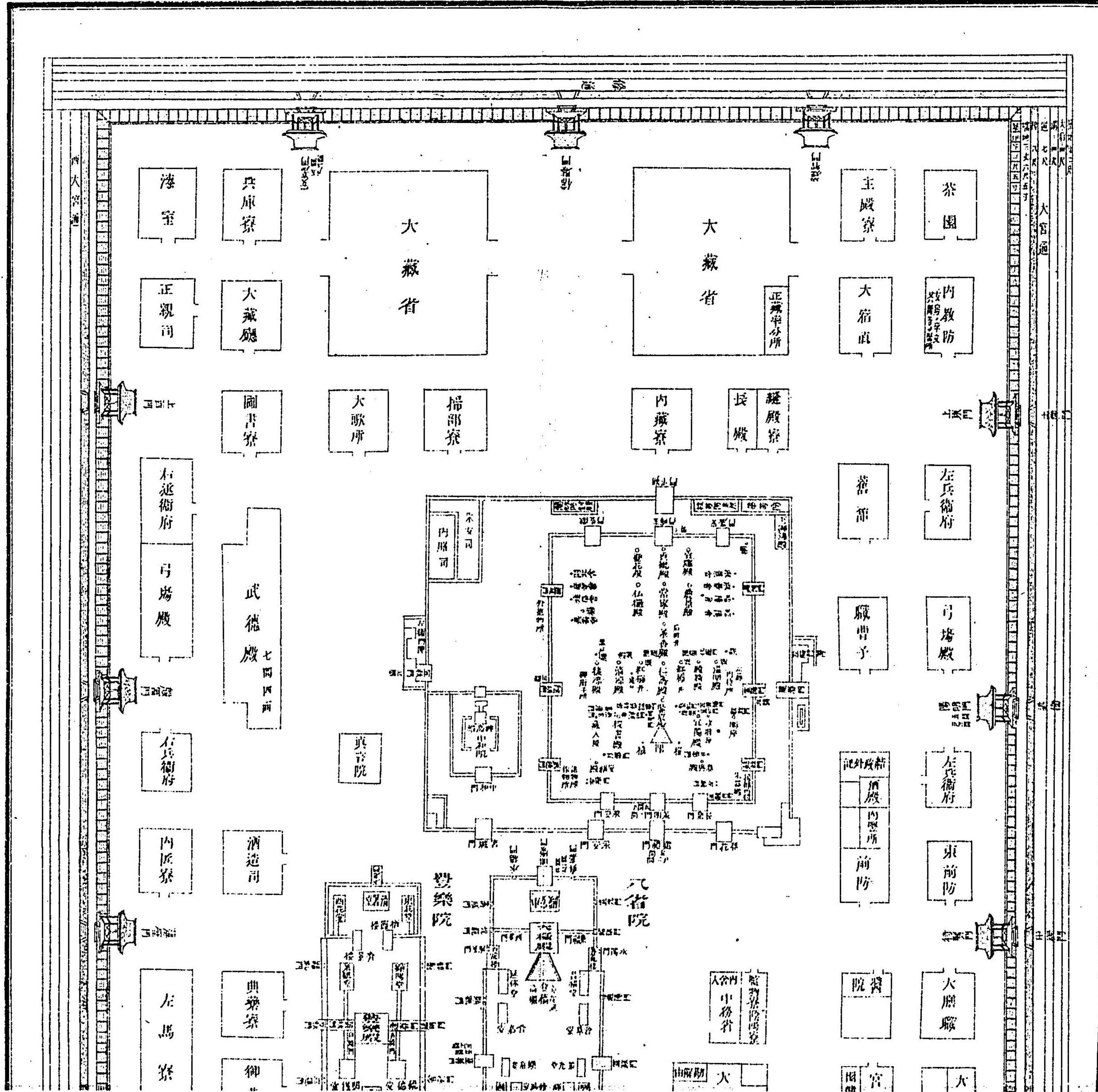
明治廿七年十二月

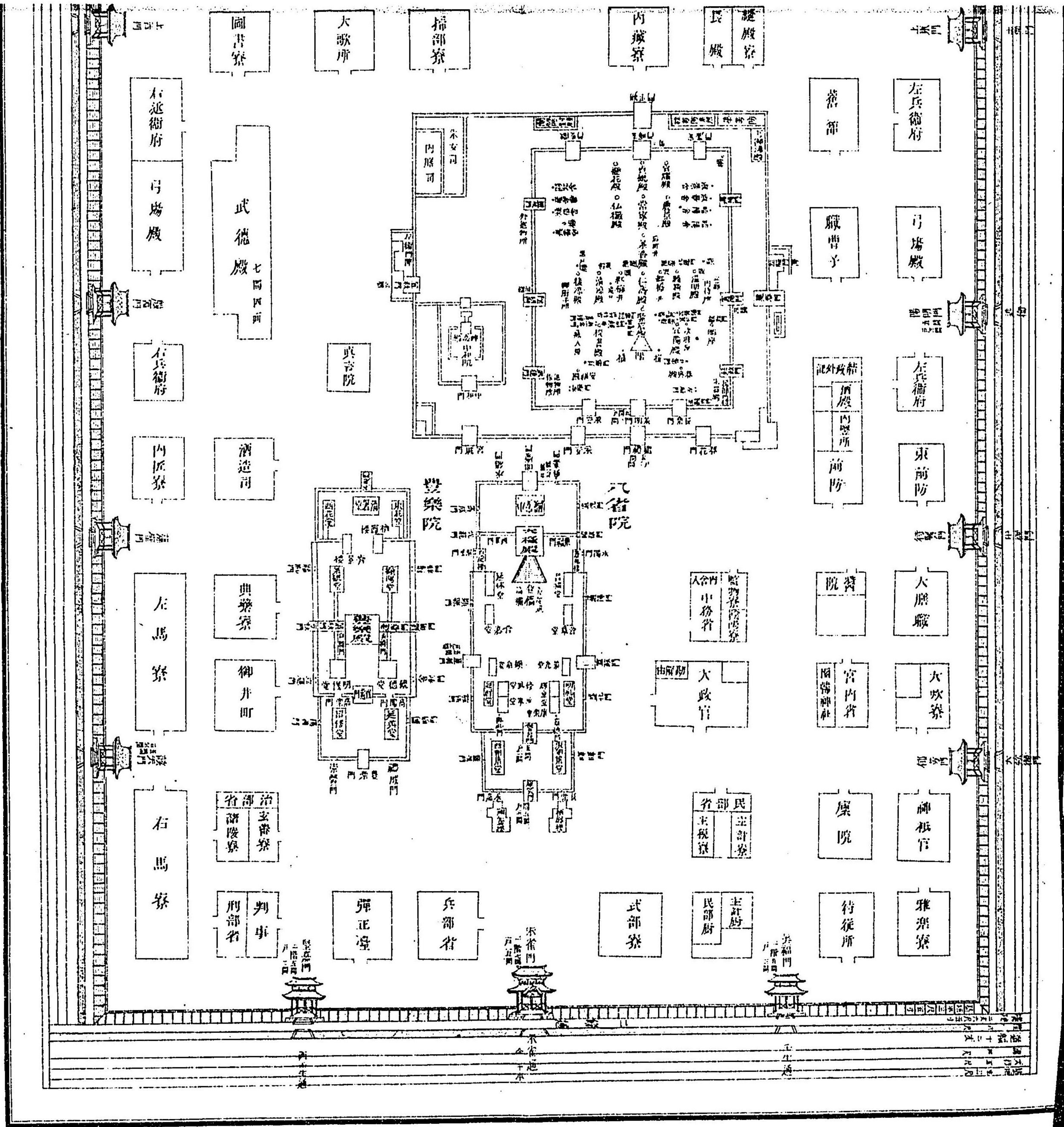
著者識

大内裏京都總圖



大內裡之圖





圖書寮

大歌所

掃部寮

內藏寮

長殿

藏殿寮

右近衛府
弓場殿

武德殿
七間四所

木司

倉部

左兵衛府

右兵衛府

興言院

內膳司

藏曹子

弓場殿

內匠寮

酒造司

豐樂院

式省院

記外政結
酒殿
內膳所
前防

左兵衛府

東前防

左馬寮

典樂寮

豐樂院

式省院

監物寮
中務省

院贊

大膳殿

御井町

豐樂院

式省院

大政官

官內省
關帝神社

大炊寮

右馬寮

治支書寮
省諸殿寮

豐樂院

式省院

民計寮
民部省

廩院

神祇官

刑部省
判事

彈正臺

兵部省

武部寮

主計寮
民部寮

待從所

雅樂寮



三ノ門
 五ノ門
 七ノ門
 九ノ門
 十一ノ門
 十三ノ門
 十五ノ門
 十七ノ門
 十九ノ門
 二十一ノ門
 二十三ノ門
 二十五ノ門
 二十七ノ門
 二十九ノ門
 三十一ノ門
 三十三ノ門
 三十五ノ門
 三十七ノ門
 三十九ノ門
 四十一ノ門
 四十三ノ門
 四十五ノ門
 四十七ノ門
 四十九ノ門
 五十一ノ門
 五十三ノ門
 五十五ノ門
 五十七ノ門
 五十九ノ門
 六十一ノ門
 六十三ノ門
 六十五ノ門
 六十七ノ門
 六十九ノ門
 七十一ノ門
 七十三ノ門
 七十五ノ門
 七十七ノ門
 七十九ノ門
 八十一ノ門
 八十三ノ門
 八十五ノ門
 八十七ノ門
 八十九ノ門
 九十一ノ門
 九十三ノ門
 九十五ノ門
 九十七ノ門
 九十九ノ門
 一百ノ門

京都みやこは山城國やましろのくににあり、山城國やましろのくには東近江ひがしあまのに隣り、西丹波さいたんぱ攝津せつじんに界し、南伊賀みないは大和やまと河内かふちに連り、北は近江あまの粟太郡あきたたぐみ及び丹波たんぱの北桑田郡きたかつたぐみに接す、東西凡そ六里、南北凡そ十五里、群樹ぐんじゆ起伏きふして東北西の三面を圍み、西南は開豁坦美ひらくわつたんびにして加茂宇治等かものうぢらうらの諸水淀しよすゐに會して西に注ぎ、地味膏腴ぢみかうゆ、風景亦秀麗しゆれいなり、氣候きかうは冷暖れいぬん變り易く、陰晴いんせい常ならず、冬時極寒きふくわん三十一度、夏時極暑きふくわん九十五度、郡は葛野かしの、愛宕あたご、乙訓おつくに、紀伊きい、宇治うぢ、久世くせ、綴喜ずいぎ、相樂さうらくの八やに分る、而して京都市みやこは葛野郡かしのぐみ西愛宕部あたごべの兩郡らうぐんに跨またがり、東西一里二十九間四尺、南北一里二十四町八間、三條通りさんじょうどおりを中央ちゆうあうとして、其以北そのいほくを上京かみみやことし、其以南そのいなんを下京しもみやことす、上京區かみみやこくは面積めんせき一万里一分強、市坊しぼく六百四十、戸數こぞう二万七千七百三十六、人口じんぐう十三万九千六百八十四人、下京區しもみやこくは面積めんせき零方里七分強、市坊しぼく六百十、戸數こぞう三万六千八百四十、人口じんぐう十五万六千九百五十五人、を有し、市街しちがい潔整けつせいにして、北に比叡ひゑの高嶺たかねを望み、東に鴨川かみがはの清流せいりうを帶び、山景さんけい水色すいしき相映さうえいじて、皇都みやこを修飾しゆしきせり、こ

の愛すべき山水の勝は依然として舊時のまゝなれど京都市街は今昔同じからず幾多の變遷を経て終に現在の形狀とはなれるなり今その由來沿革を畧述せんに太祖神武天皇都を大和の橿原に奠めさせ給ひし以降帝都の遷移せしと四十餘回概ね一朝一都たるが如し而して文武天皇の御宇西暦七百餘年の頃大化の制度修成せられ八省百官設備せらるるに及ては又昔の質素の世に似ず遷都の煩はしきこと古への比にあらざれば天皇百世一都の制を立んとして慶雲四年に相地を議せしめ給ひしが果さずして崩し元明天皇その遺志をつぎ和銅三年西暦七十年に至りて遂に都を大和國添上郡奈良に遷し大に規模を弘めたまふ之を平城宮と稱す斯て七代元明元正聖武孝謙淳仁稱徳孝仁の七帝七十餘年を経て桓武天皇にいたり孝仁革命の後を承け大に帝業を振興せんと圖り給ふに當り平城の地勢なほ其鴻模に適せざるを以て更に地を相して萬世不易の皇都を開かんと欲し延暦三年西暦七百四十四年藤原種繼の建議を納れて山背國乙訓郡長岡の地に都城

を經始し宮殿を營作せしめ十月天皇長岡宮に遷らせ給ふ然るに新都十年を經過して猶成らず工費勝て計るべからず和氣清麻呂これを憂へ萬野郡に重ねて遷都あらんことを奏請す天皇これを許して延暦十二年二月大納言藤原小黒麻呂左大辨紀古佐美等を遣し山背國葛野郡宇太村の地を相せしめ同三月天皇親ら行幸して新京を巡覽し百姓の地の新京宮城内に在るものは三年の價を給し五位以上及び諸臣の主典以上に令して役夫を進つり宮城を築かしめ同六月諸國に令して宮城の諸門を造らしめ十三年七月に及びて東西市を新京に移し且廩舍を造りて市人を移し同年十月車駕新都に遷御し給ふ斯てこの歲十一月詔して宣曰く此國は山河襟帶自然に城を作す故に形勝によりて新號を制し山背國を改めて山城國と爲すべしと又子來の民異口同辭に謳歌して平安京と呼べり當時の京城は南北一千七百五十三丈東西一千五百七十丈大内裏はその北端に在り南北四百六十丈東西三百八十四丈皇居及び百官諸司みな此

内にあり、四面に十二門を設く、その南門を朱雀門といひ、南極の郭門を羅城門といふ、其間に弘さ二十八丈の一直大路あり、之を朱雀大路と稱して東西の中央たり、之より東を左京とし、西を右京とす、兩京いづれも劃りて九條とし、北より數へて南に至る、條毎に名あり、一條を桃花坊といひ、二條を銅駝坊といひ、以下は左右名を殊にし、三條は左を教業坊、右を豐財坊、四條は左を永昌坊、右を永寧坊、五條は左を宣風坊、右を宣義坊、六條は左を淳風坊、右を光德坊、七條は左を安衆坊、右を毓財坊、八條は左を崇仁坊、右を延嘉坊、九條は左を陶化坊、右を開建坊といふ、而して一條の内に四坊あり、一坊の内に四保あり、一保の内に四町あり、一町の内に四行あり、一行の内に八門あり、一門は即ち一戸にして、長さ十丈、弘さ五丈より成る、然ば左右京各々坊三十六、保百五十、町六百八あり、坊毎に長一人を置き、四坊に令一人を置いて、戸口を檢接し、奸非を督察せしめ、又左右京職を置いて、京中の事を奉行せしめ、東西市司を置いて、賣買の眞偽をたしめ、都外の事は府を乙訓

郡、離宮に置き、國司をして之を領せしむ、京城の宏壯、整齊、前古未嘗有にし、て經國治略亦これに協ひ、萬世の皇基こゝに堅立す、然ども榮枯稠落の免れがたきは世の常にして、百王不易の都も時に盛衰なき能はず、村上帝の天德四年、西紀九百、皇宮災にかゝり、帝神嘉殿及び職曹司等に遷御まし、しを始とし、其後の御代々々にも幾度となく、内裏炎上して、土御門内裏、三條内裏、六條内裏等こゝかし、この里内裏に假に住はせ給ふこととなり、保元、西紀千、平治、西紀千、の亂後は、京師しばし、兵馬に踏あられ、或は祝融の災にかゝり、或は風伯の暴怒にふれ、都民生を聊する暇なく、昔の皇都の面かげは次第に變りて、復た見るべき影なきに至りぬ、鴨、長明おのが目撃せし當時の慘狀を、方丈記に述べて曰く、凡そ物の心を知りしより、以來四十餘りの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、稍や度々になりぬ、去ぬる安元三年、西紀千、四月廿八日、かどよ、風烈しく吹て、靜かならざりし夜、戌の時ばかり、都の東南より火

出で來りて西北に至る、終には朱雀門、大極殿、大學寮、民部省まで移りて一夜がほどに塵灰となりにき云々、或は煙にむせびて斃れ伏し、或は焰にまかれて忽ちに死しぬ、或は又僅かに身一ツ辛くして遁れたれども資財を取出るに及ばず七珍萬寶ながら灰燼となりにき云々、男女死者數千人、馬牛の類ひ邊際を知らず

又治承四年、西紀千五百卯月廿九日のころ、中御門、京極のほどより大なる旋風起りて六條あたりまで殿しく吹けること侍りき、三四町をかけて吹きまくるに其中にこもれる家ども大なるも小きも一として破れざるはなし、さながら平に倒れたるもあり、楯柱ばかり残れるもあり云々、かの地獄の業風なりともかばかりにとぞ覺ゆる、家の損亡せるのみならず、之を取繕ふ間に身を害ひて片輪づけるもの數を知らず、この風未申の方に移りゆきて多くの人の數をなせり、旋風は常に吹くものなれど斯ることやはある、たい事にあらざるべき物のさとしとぞ疑ひ侍りし

又同じ年の六月のころ、俄かに都遷り侍りき、平清盛がはからひにて都を冬再び本の京に復し、同年のいと思の外の事なり云々、之を世の人たやすからず憂ひあへるさま、理りにも過たり、然どとかくいふかひなくて御門より始め奉りて大臣公卿悉く遷り給ひぬ、世に仕るほどの人誰か一人故郷に残り居らん云々、軒を争ひし人の住居日を経つゝ荒れゆく家は毀れて淀川に浮び地は目の前に島となる云々

この後はどなく源平の戦ひ起り、平氏遂に亡びて源氏の世となり、頼朝幕府を鎌倉に開き、西紀千五百天下に號令するに及びては兵權政權ともに武家に歸し、鎌倉はますく榮えて京師はいよく衰へたり、斯て元弘三年、西紀千五百に至り、北條高時誅に伏し、建武の後醍醐帝、中興の業成り、大内營造せられ、省司諸制舊式に復せられしと雖も、瞬間にして挫折し、天皇南遷し、たまひ足利尊氏別に帝を京師に擁立す、是より南北兩朝となり、尊氏室町

に幕府を置て大政を握れり、三代義満の時南朝の元中九年、西にいたり南北合一せしかば、擅横さらに加はり、子孫將軍の職を襲ひて、十數世に及ぶ、されど足利氏代々治平甚だ稀にして、亂臣賊子世毎にあらはれ、其季世にいたりては、殊に甚だし、應仁の亂には、大軍輩下におし入て、足利義視と義隆と起り、細川勝元と山名持豊との戦争となり、勝元は兵十萬を率ゐて、東に陣し、持豊は兵九萬を率ゐて、西に陣す、是より戦亂打續き、殆んど十年に及ぶ、西紀千四百六十七年、花洛は修羅の街と變じ、市坊は悉く焦土に化し、都民堵に安ずること能はずして、右方左方に逃散りければ、皇居の御垣もかたぶき破れ、公卿の邸宅、市民の肆塵は、草茂り、獐狐狸の住所となり、果しを永祿年間西千五百六に及び、織田信長、畿諸國を畧定して、京師に入り、宮闕の頽廢を修治し、離散の民を安集しければ、稍や皇都のすがたを挽回せんとするをりから、信長弑せられ、尋で豊臣秀吉興り、京都のなほ荒涼にして、四方の際いづれともなく、田舎の在郷の如くなるを歎き、細川幽齋を召して、洛中洛外の塚を定めしめ、この時の土堤は今なほ存す皇空に供御料を獻じ、親王門跡及

び公卿にも領地を附しなせしければ、上下相和し、都民安堵の思をなし、京師漸く舊態に復する緒につけり、斯て徳川氏の世となり、家康幕府を江戸今のにひらき、慶長八年、家康征夷大將軍に任じ政權を掌握せし、以來子孫相嗣て、將軍の職を襲ひしかば、政治の實權と、もに繁榮は、江戸に歸せしと雖も、京師は依然至尊のまします皇都なれば、海内の文華こゝに集ひ、美術工藝國中に冠たり、世すべて上等なる物品をさして、京物といひ、優美なる形様をさして、京風といふに至る、且二百六十餘年の昌平にもなはれて、百業進歩し、京師の繁盛次第に増加はりぬ、然るこの長年月の間には、多少の天災地異なきにあらす、其中の大なるものは、天明八年西紀千七百正月三十日の火災とす、東は鴨川より、西は千本通に及び、公卿大名の邸、百三十社、寺九百廿、民家十萬三千戸、死者二千六百三十餘人にして、皇宮も亦炎上せり、將軍家、濟松平定信に命じて、造營を司近くは元治元年西紀千八百七月、長兵の京師亂入とす、長藩の士、福原元佃、伏見に至り、上書して、毛利父子、勤王の情を

陳べ七卿文久三年三條實美、三條西季知、東久世通禧、澤宣嘉、四の復職を請たれど容られず、剩さへ長州脱藩の士を討んとしければ、長人憤激して之を當時の所司代松平容保の讒構とし、讒者を瘞して君側を清んとて兵を京師に入れ大に輦下を擾がし、飛丸宮闕に及び宮中の雜蹂一方ならず、市街亦兵燹の爲に大半焼る、慶應三年西紀千八百六十七年正月にいたり、今上皇位に登らせ給ひ、この歳の十月將軍慶喜政權を奉還し、鎌倉以來武門の手に落たりし大權始めて皇室にかへり、王政復古のめでたき御世となり、明治元年江戸に行幸したまひ、江戸を改めて東京と號し、皇居を茲に定めさせ給ひしと雖も、京都はなほ依然として都名を存し、皇居をもそのまゝ保存せられ、殊に大嘗會天皇即位の儀行すの國典はこの地にて舉行せらるゝを恒例とす、且つ府廳設置せられて、京都及び山城一圓、丹波五郡、丹後五郡を統治し、疏水開通して工業及び運輸の便ひらけ、第三高等學校、同志社學校等ありて、四方より修學の徒群集し、都人は美術に長じ、工藝に巧にして、各種の物産盛んに

出れば更に衰頹の色なし、加前延暦遷都以來時に動靜あり、世に治亂ありて都民の聚散、皇城の榮枯なきにしもあらず、これを聯綿として、明治の東遷にいたるまで一千七十六年間の帝都なりしかば、其根ふかく其基かたくして幾多の災變も全く荒廢に終らしむること能はず、復た興り興りて遂に今日のすがたとなりぬ、今は延暦建都の始めの壯觀には遠く及ばずして、當時京城の中央たりし朱雀大路の跡は今いふ千本通市街の西なりと聞ければ右京は夙に荒廢して多くはみな田野となりたるを知る、然とてその勢ひ更にまた東に移り、維新の後は鴨東次第に人家を増し、疏水の利によりて工場建連り前の郊野は今市街となり、近年これを市に加へ、今回また茲に大極殿を建て、勸業博覽會も開設せらるゝに至りたれば、西に失ひて東に得、京都はいよいよ旺盛に赴く象を現はせり

さましくにうつりゆく世もうこかしな
とほすめろきのすゑし基ぬは

皇宮沿革小史

上古質素の世には皇宮京城などの制も定らず、たゞ昔ながらの式にしがひて宮殿を營造し至尊こゝに坐して政を親らし給ひ、民みづから來りて調貢をさしげ、上下簡朴にして後世の煩冗なるに似ず、百姓農を以て生を聊すれば、輦下に居を移すの必要なきが故に當時いまだ都會起らず、都民なければ皇居を遷させ給ふこと難からず、故におほかたは御代ごとに皇居を遷させ給へり、此は遷都にはあらす皇居を遷させ給へるなり、而して其實皇居を殊更に遷させ給へるは稀にして、繼嗣の天皇その御成長の地にて直ちに位に即き、然る世の中や、に進み紀元千三百年そのまゝ天下を知しめし給へるなり。代西紀六百年頃に至ては大化の革新もありて、朝廷のさまも俄然かはりたれば、文武帝の御宇西紀六百年始めて京城の制もたち皇宮の制も定められたり、而して元明帝の和銅三年西紀七百年に大和國奈良に都城の地を相し、左右京を立て、條坊を區劃し、皇宮を造り、結構備はり、規模大に張れり、その後また桓武帝都を山城に遷し、之を百王不易の帝都たらしめんと欲し、更にそ

の規模を恢弘にしたまひ、皇宮の制も甚だ大にして輪奐の美前古に類ひなかりき、爰にその皇宮の制を述んとするに先だち神武帝以來の宮室の狀況を示してその沿革を知らしむるは無要のわざならじと思へば更に古へに立かへりて之を略述せん

神武天皇中州を平らげ大和國橿原高市郡に始めて帝宅を經營したまふこの時手置帆負彦狹知二神の孫に之を造らしめ給へり、手置帆負神彦狹知神は天照大神の瑞殿を造れる高天原の木匠なり、今その孫に造宮のこを命じ給へるは即ち高天原の典式に則らせ給へること著し、かくて其宮殿のさまは地を穿ちて土中の石をそのまゝ礎石に用ゐ、丸木の巨柱をその上に立て萱を以て屋を葺き、斷木を屋上に列ね、之を榑木、榑風の兩端を高く突出して空を衝けり、之を千木或は比岐といひ、其極めて高く出づる皇を稱へ申し、語に畝傍の橿原に底つ磐根に宮柱太敷たて高天原に榑風高知り始馭天下すめらみことといへる是なり、今も伊勢の神宮にて其

梗概は知らるゝなり、斯の如き宮造をミアラカ或はミヤといひて天皇の殿と神宮との他には此稱を用ゐざりき、皇宮の構造は紀元九百年代西紀十六七の頃までは皆かなじき様なりけんを應神天皇以降韓國の工人しはしば渡來せしかば韓風くはより、紀元千二百五十年代西紀五百年に至りては隋唐の交通始まり次第に支那の風つたはりて宮殿の様もやゝに變りもきぬ、然ば平城の宮も唐制を酌量して宜きに從はれ、平安の宮城も唐制を取捨して善なるものに就れしなり、平安の大内裏一たび經始せられし後は永くその制をかへ給はず、世に治亂あり時に隆汙ありて或はすたれ或は及ばざるの歎なき能はざりしと雖もその標準としたまふ所はみな延曆創建の大内裏ならざるはなし、故に皇宮のことを知んとせば平安京の大内裏を知らざるべからず、今これを述ん

大内裏即ち宮城は京城の北方一條と二條との間にあり、今の西宮其廣さ東西八町、南北十町にして周圍に十二門あり、南面にあるを美福、朱雀、中

皇嘉西といふ、朱雀門は中央にありて正門たり、東面にあるを陽明待賢中郁芳南といひ、西面にあるを殷富藻壁中談天南といひ、北面にあるを達智偉鑑中安嘉西といふ、この中に朝堂院と八省院と稱し、天皇朝政を聽きたまふ所なり、豊樂院と會を行ふ所にして正殿を豐樂眞言院と稱し、僧侶の參集して武德殿騎射等所なり、中和院正殿を神嘉殿と稱し、天皇及び神祇官て大小の神祇を祭り、總大政官諸官の總司なり、中務省至上表を受け女官の考選及び五位以上の位記を掌し、式部省及び文官の考選、朝儀、位記、治部省を正し、備尼及び蕃客朝聘の事を掌る、民部省諸國の戸籍、田租、調庸、課役を勸、兵部省武官の考選、位記、及び兵士の刑部省、刑獄、刑名、良賤の考選、諸國調物の出納、權衡度量を均くし、宮内省諸國の調物官、廷の供御用等二官八省と之に屬する職、寮司その他彈正臺外、風俗を肅清し、内事を掌る、左右兵衛府前後を分衛する事を掌る、左右近衛府諸宿衛の禁等ありて内裏を圍繞せり

内裏は即ち皇宮にして之をオホウチと訓む、故に後世大内とも書き又單

に内とのみも稱せり、其廣さ東西七十三丈、南北百丈、南面に三門あり、中なるを建禮門と稱して皇宮の正門たり、その東なるを春華門、その西なるを修明門と稱す、東面に一門あり、建春門と稱し、西面に一門あり、宜秋門と稱す、北面に二門あり、正北なるを朔平門と稱し、西の隅によりてあるを式乾門と稱す、これらの諸門の中にまた一重ありて四方に十二の門あり、南の中央にありて建禮門と相對するを承明門といひ、東に隣りて長樂門、西に隣りて永安門といふあり、東の方に延政、宣陽、嘉陽と號くる三門あり、西の方に武德、陰明、遊義と號くる三門あり、北の方に安嘉、東、立暉、中、徽安と號くる三門あり、かくて殿堂宮舍棟をつらね軒を接してその中に巍々たり、承明門を入て第一に南面したるは紫宸殿なり、九間四面、丈五尺を一東西の廂各一丈、殿前の東腋に櫻、西に橘、右近のあり、此殿は尋常の公事をも行ひ給ふ所なり、その次に南面したるは仁壽殿なり、此殿はもと天皇の常の御在所なりしが後に清涼殿をその所と定め給ひぬ、そ

の又次に南面したるは承香殿その又次に南面したるは常寧殿なり此殿もとは皇后の御座所にして后町とも稱せしが後に弘徽殿に移り給へり彌終にありて南面したるは貞觀殿なり一に中宮應とも云て皇后の内職をさこしめす所なり此殿を御櫛笥殿とも稱す、その御櫛匣そのほか後宮に關するものなれ以上の五殿は中央にならび東側にまた六殿あり皆西面なり南にある第一を春興殿といひ、その北に隣るを宜陽殿といふ、此殿は累代の御物を藏する所なり、その次に綾綺殿并に温明殿あり、温明殿の内内侍所あり、綾綺殿の北に麗景宣耀の二殿ならべり、此二殿は女御或は後宮奉仕の女房の曹司なり、西側にも同じく六殿ありて皆東面せり、南の第一を安福殿といひ、その次に列べるを校書殿といふ、文字の如く文書を校する所なり、故に校書所藏人所もこの殿の中にあり、又北に隣りて清涼殿あり、此殿は天皇日常の御座所なり、故に身舎に晝御座あり、北の妻戸の内を夜御殿とす、東廂南の方に石灰壇あり、伊勢宗廟遙拜の所なり、この殿の後

に後涼殿あり、北に弘徽殿、登華殿と相並べり、此二殿も女御その他の曹司なり、以上諸殿のはかに朱器殿、太子宿昭陽舍、淑景舍、北舍以上進物所作物所藏人町屋、飛香舍、凝華舍、襲芳舍、雷鳴の壺等あり、また閤門、内垣の門と中隔門、外垣の門を云との間に華芳、桂芳、蘭林の三坊あり延暦遷都のち百七十年を経て村上帝の時にいたり天徳四年九月禁中火あり、温明、宜陽、春興、安福、仁壽等の諸殿ごとく炎上し、其後も圓融帝の貞元元年西紀九百七十六年五月禁内炎にかゝり、二年七月帝職曹司に遷りまして同天元三年西紀九百八十年にも禁内火ありて殿舎ごとく焚け、帝また職曹司に遷り宮に徙御續てまた同五年十一月に炎上し、一條帝の長保元年西紀九百九十九年同三年寛弘二年西紀千三條帝の長和三年西紀千同四年その後も次々重ね、回祿にあひ且は延喜西紀九百以後皇室衰微し官庫空乏せしより遂には内裏も舊時に復せず朝堂院、豐樂院その他の官舎等の顛倒破壊せしをも修繕すること能はざるに至りたれば後は内裏再建のことも止み、皇居は宮

城の外となり此處彼處に遷らせ給ひて之を里内裏と稱しぬ、まして政柄の武門に歸せし以來は皇室いよく委靡せしが後醍醐帝のとき建武中興の業成り一時大政奮に復りて大内裏も造營せられたれど幾時もなく世はまた乱れて南北朝となり再び政權足利氏の手に落ちその季世にいたりては皇室の衰へ極度に達しゆゝしき事ども多かりき、應仁略記は當時の皇宮のさまを歎きて曰く

花浴の体を告來るに二條より上、北山東西ことごとく燒野の原となりて其残る處は將軍の御所ばかりなり、禁裏、仙洞は定めて陣屋となりて南蠻の異類、玉殿を汚す、蠻夷の夜る晝る營固を勤めし、陽明門、郁芳門乃至偉壘門、達智門等四方十二の御門以下は凡て六畜の臥土となり古へは名をだに聞かざる殿上の小庭、内外の大床、紫宸殿の錦張、賢聖の繪圖、悉くも姑射山の仙居、皇居の寶闕かけても恐ろし云々

皇宮の狀はかくも淺ましき極みなりしが永祿六十餘年五百の頃となりて

漸く三冬盡き一陽來復せんとするの期にあへり、織田信長魯王之志篤くして大に皇宮を修繕せんと欲し未だ果さずして弑せられしと雖も豊臣秀吉竟にその功を成し其後慶長年間西紀千六に至り家康禁裏仙洞の境域東北各一町餘を弘め其四方に石を疊み石に刻て後世に殘す、且兩所の宮殿を經始す、然るその後幾度となく炎上しては新築し、承應二年炎上同三上同二年新築、延寶元年炎上同五年新築、焚るも速かなれば建るも亦早し何れも假殿の如き制なりしなるべし、故に天明八年西紀千七百の炎上の上き將軍家齊松平定信に命じて造營を司らしめしに定信從來の皇居卑隘にして其構造の式に合ざるを歎き有職の士に就て古制をたゞし其規模を大にせしかば紫宸清涼等の諸殿は舊規に復したりといふ、造營費は上の大名に命じて獻金せしむ、寛政二年西紀千七百九十年建、然るこの皇宮は嘉永七年西紀千八百に炎上し安政二年西紀千八百にまた造營す、全國人民の寄附金、現存の皇宮は即ち是なり、今上天皇にいたり王政復古し皇室の御稜威もかゝやき渡り、宇

内外國の交通も開けたれば萬機を統べたまふ便により維新の初め江戸
 城に遷らせ給ひて其本丸を皇居と定められしが明治六年祝融の災あり、
 更に舊西丸の地を卜定して皇城を經始し二十二年一月新宮に徙御した
 まひぬ十七年十月起工して二こゝに於て千七十餘年來の帝城たりし京都の
 皇宮は常に鎮されて寂寥たりと雖も天皇あつく愛護して之を保存した
 まへば舊形なは依然たり、皇室の榮はますと共に延曆聖帝の鴻圖は永遠
 に存してその蹟つひに亡ぶることなからん

うつりこし世にも雲々のみわらかは

むかしなからに仰かるゝかな

本邦の美術國たることは宇内に隠れなきことなるが單に美術國と稱するのみにては尙ほ足らず、美術の富國とこそ稱すべけれ、凡そ美術に屬するもの皆具足して缺るところなし、繪畫、彫刻、製陶、繡、織、髹漆、および金銀銅鐵の技にいたるまで一として他邦に劣らず、其意匠の高雅なる其工作の巧妙なることは常に外人の歎賞する所なり

各國亦かならず特有あり、何れの國にも他邦の及ばざる美術あるべし、然るにその數多くも二三に止まりて我日本のごとく總てに渡れるは殆ど稀なり、而して他邦のその勝れるものも我國に入來れば更に一層の光榮を増し、又や久うして終にはその本國の風を脱し、日本固有の体に化して日本物となるを常とす、其狀恰も世人の奇とする化石洞のごとし、百物かの洞に投すれば石に化し、万技わが國に傳はれば日本に變ず

本邦上古より既に多くのものを創造せり、神代の時日本紀元前を稱す西紀前六百四十一年より先

石凝姥命あり銅を以て鏡を造り始工天目一個命あり瓊瑤瓊青瑯玕等を以て各種の玉を製しの玉玉工柵機姫命あり蠶糸及び楮麻糸を以て絹羅倭文布和多閉荒多閉等を織りの織工又陶工ありて甃吡良迦手扶埤畝の類を造りの陶工木匠ありて宮室殿舎を造り彫刻の端緒も當時すでに開けをりて石片に刻める人像古器に彫たる神代文字等のたましく存して今に遺れるがわり

然と時なは素朴の世に屬し百工の業も未だ發達せざりしが紀元六百三十四年垂仁帝三年西紀にいたり先に新羅より歸化せしもの子孫天日柿に從し者近江國鏡谷にて陶器を造るこれ新羅陶法の本邦に入し始めにして其後千二百二十三年雄略帝七年西紀のころ雄略帝いたく工藝の事を獎勵し給ひて韓國の陶工高貴を徵して河内國桃原に居らしむこれ百濟陶法の本邦に傳はりし始なりこの後遙かに隔りて後堀河帝の御宇西紀千二百二十二年西紀尾張國春日郡瀬戸邑の陶工加藤四郎左衛門景正といふ者支那

宋に渡りその陶法を傳受して歸るこれ支那陶法傳來の始めにして以降彼より我に來りて製陶に従事せしもあり我より彼に往て其業を學び歸りしもありて支那様の陶器盛んに製造せられたり永正年間西紀千五百四年伊勢松阪の人詳瑞といふ者支那に往て磁器の製法を學得て歸り其法を肥前唐津の工人に傳へ萬治二年西紀千六百五十九年明の遺臣陳元贊歸化して尾張の名匠屋にて陶器を造る元贊燒是なり

繪畫の如きも其起り固より本邦にありしと雖も須佐之男命の言に當時國畫のありし雄略帝の御時西紀四百七十九年百濟より因斯羅我きたりて其國の畫法を傳へ武烈帝の御代西紀四百九十九年魏の文帝の裔なる辰貴といふ者ありて畫を善くし崇峻帝の御時西紀五百八十八年百濟より畫工白加きたり推古の御宇西紀五百九十九年墨徵高麗より歸化す墨徵は尤も彩畫に巧なりき是等はみな三韓及び李唐以前の畫風の我に傳はりし者にて大に本邦繪畫の發達を促せり斯て紀元二千三百餘年の頃はひとなり西紀千六百四十餘年支那は明亡びて清興り前朝の臣民多く歸化せしが其中には

書畫に巧なる者少なからず陳元賛の如きは尤も之を善くし明末の畫を傳へたり其後享保年間西紀千七百七十四年及び清の商客伊孚九南宗の山水を巧にし沈南蘋花卉を善くせしかば是より此流の畫風大に世に行はれ人之を文人畫といふ

機織の業の外國より入て我が發達を助けしは應神の十四年西紀二百支那人融通王百二十七縣の秦民を率ゐて歸化し大に蠶織の業を興し支那様の絹帛製法を傳へ、その後また百濟の照古王より織工西素を獻じ、雄略帝の時には西紀四百七十九年まで百濟の織工定安那徴に應じて來り始めて韓様の錦を織る所謂韓錦是なり、後世にいたり天正年間には西紀千五百支那の織工泉州堺に來り明様の紋紗および錦を織り、慶長年間には西紀千六百和蘭陀の法を傳受して羅紗を製し、又南蠻の法に倣ひて毛宇留を織り、寛永年代には西紀千六百和蘭陀の法によりて天鵝絨を織出せり彫刻建築等の業も佛法の傳來ともにもに佛工造寺工の渡來せしによりて

其技著しく進歩す佛法は欽明帝の十三年西紀五百五十二年に倣はり、佛工は來朝も同帝の御代に始まり、其後崇峻推古の兩朝にも佛工造寺工を百其他わが濟より貢し皇極帝の御時には西紀六百四十餘年支那風の建築も起れり其國の文物技藝おほくは皆よその文明に誘はれて發達進歩せしことは史籍も之を證して疑ふべき廉なし、然る日本の工藝美術はみな他邦よりの輸入にして今在るところの者は悉皆摸倣に成れりと想ふは甚しき誤想にして日本美術の皮相だに未だ見能はざるものなり、日本は摸倣國にあらず成美國なり、そは陶器、機織、繪畫、彫刻など三韓支那の工人來りて各その國の様式を傳へしと雖も三韓支那の形跡はいつしか絶えて美妙ますます加はり他に比すべきやうなき一種の特色を以て東洋に卓立するに至ればなり

朝鮮には今は陶器の見るべき者なし支那は陶器の本所とおもひチャイニースウエルの名稱をさへ陶器に負すれども其實歐洲諸國にて第十七八世紀の頃より美術品として愛重せしものは皆わが日本の陶器なり、又

レスナンの蒐集品中にてその多数の部分を占めたるは日本陶器なり
と英國の美術家某もいへり

繪畫に於ても平城朝以前のことは暫くいはす、文徳帝の御宇西紀八百の
百濟、河成、宇多帝の御代西紀八百の巨勢、金岡巨勢氏數世書を著くす後世日

白河帝の御時西紀千七の宅摩宅摩爲成また戲畫に名高き鳥羽僧正覺猷後世稱
の祖土佐風の畫祖とも稱すべき藤原隆能本物語緣起等を畫き出せる日高倉帝

の御世西紀千の藤原光長土佐三筆の一にして歴史書を著くす三筆とは光長
土御門帝の御時西紀千の慶恩住吉法眼と稱す後世住吉家の祖と仰ぐ等名手枚擧するに暇

なし、此等の畫様は何れもみな韓にあらす支那にあらす所謂日本風にし
てその精妙高雅遙かに支那の上に出づ、白河帝の頃とかや支那人わが國

人の扇面に畫ける平遠の山水を見てその精妙に驚き支那の妙手もい
で及ばんとて歎稱止まざりきといふ、織物にも是と同じきことあり孝徳

帝の御時西紀六百四織部司を置給ひしが其所屬工人の織出せし錦類る精
巧にして華章明美なりしかば支那人歎賞して之を神錦と稱したりき

髹漆、蒔繪、螺鈿、象眼の種類は歐米諸國にても之を日本固有の妙技として
疑ふものなければ茲に論せず、彫刻に就て少しく辨せん、是亦その技の發

達は既に述しごとく三韓支那の輔導によれど世を歴るともに精巧に
進み彫工かの一機軸をひらき終に日本美術の佳郷に入るに及びて

は三韓支那と全くその趣を殊にせり、古くは佛師稽文勳、稽文會父子元明
寺等西紀七百十餘年の人にて大和の長谷寺法隆近江國の高男丸淳和帝の時西紀

佛工ありて多武峰大臣の像を造る、同時に志古麻呂といふ會理阿開梨東大寺講堂
及び虚空藏地蔵等を造る、鑿僧康尙佛工の名手にして勅を請じて多く佛像を造

子帝の時西紀九百餘年の一人なり、法眼院助二男にて奈良の
紀千百二十餘年の人なり、西法印運慶後鳥羽帝の頃西紀千九百十年の一人なり、是

等は何れも佛工の妙手にして康圓運慶の孫にて鎌倉影は此人に權輿すとい
り、淨阿彌北條氏の命によりて寶戒寺の法具を眞行草しく三体に彫刻し五色の畫

人は龜山帝ころの人にて西紀康助(西紀千三百餘年)の二人にして鎌倉等
 千二百六十餘年代に當れり西紀康助(西紀千三百餘年)の二人にして鎌倉等
 は鎌倉彫の名匠なり刀飾の彫工には後藤祐乘(西紀千四百餘年)の二人にして鎌倉等
 柄杓の類に鑿めり小後藤光乘(西紀千四百餘年)の二人にして鎌倉等
 西紀千七百年頃の人なり彫刻雄健の風あり祐乘即乘(西紀千四百餘年)の二人にして鎌倉等
 享保の頃(西紀千七百二十年)の名工は三作と稱し祐乘以降の妙手なり横谷宗珉
 信に受しとぞ彫刻の圖案を有名の畫工元及び鏝の名工には明珍信家(西紀千六百
 西紀千五百三十四年)の人にして有名なる信立の職助法性(西紀千六百餘年)の二人にして鎌倉等
 嵌するを巧にせり此より前天授のころ(西紀千三百七十餘年)明珍宗安(西紀千六百
 並びに唐綾威の體を作りしは宗安なり假面の妙手には三光坊(西紀千六百餘年)の二人にして鎌倉等
 七十年頃の人にて其弟子是開吉満(西紀千五百九十餘年)の二人にして鎌倉等
 手には左甚五郎(西紀千六百二十年頃)の人奈良宗貞(西紀千六百餘年)の二人にして鎌倉等
 少くは五郎(西紀千六百二十年頃)の一人奈良宗貞(西紀千六百餘年)の二人にして鎌倉等
 手と稱す其風優美にして且精巧なり等あり少かにても美術に心あらん人は
 此等の名工の作を見れば我言の浮誇ならざるを知るべし

海外の學士美術家も夙くこゝに着目し彼是日本美術に就きて品評せし
 ものゝ多かる中の一を擧て慧眼なる歐洲美術家の日本美術を歎賞する
 梗概を示さんソル、レーソル、フォールト、アルコツク氏の説に曰、日本國美
 術品の特性を目撃すると同時に又その美術の品位、起原、進歩等を研究す
 ることは少しく美術に志あるものゝ尤も悦ぶ所なり蓋し日本美術品に
 は一種特別なる光澤を有するが故に殊に然りとす、余全世界に於て古今
 未だ日本のごとく美術上新奇の意匠に富る國あるを見ず、これ決して過
 言にはわらざるなり、實に日本人は宇内の美術界に於て一大新派を造り
 出し、者なり、斯て日本の美術はその理想を一度は支那に取しといへど
 も中古以來日本は日本固有の美術を發達せしめたるを以て今日に於て
 之を見るべきは日本美術は遠く支那美術の上に超過せり云々又曰、諸金
 屬の細工を見るにその製作その技能實に非凡なり、日本人は世界の大達
 人なりと叫呼せざるを得ず、彼等はたゞに歐洲人の未だ解し能はざる秘

法を以て歐洲人の決して成能はざる好結果を生出するのみならず、その模型及意匠に用ゐる原料を自在に處辨し一種特別なる品格をその製作物に與へ清廉の風雅美の体を之に有せしむ、殊に金、銀、銅、鐵、類の象眼、鍍金の技倆にいたりてはパリス、ベルリン等の大製造場の製作者も遠く企及し能はざる所なり云々

然ばわが日本の美術國にして百物みな美術の性質を帯び外來各種のものをも我が美に化せしむる不可思議の美術力を有することは外に歐洲識者の辯明あり内に古今事實の徵証あり他に亦何をか贅すべき、斯て前條述來れる日本美術の大要を知るを得ば各種の美術品に目を下して大様その眞を探るに難からじ

爰には日本の美術をいふが主なれば他邦との關係は論じたれど單にその美術の事は言はざりき、關係も亦上古より尤も親密なりし三韓支那のことは陳しがその他には及ばざりき、然るその實他邦との關係は韓支の

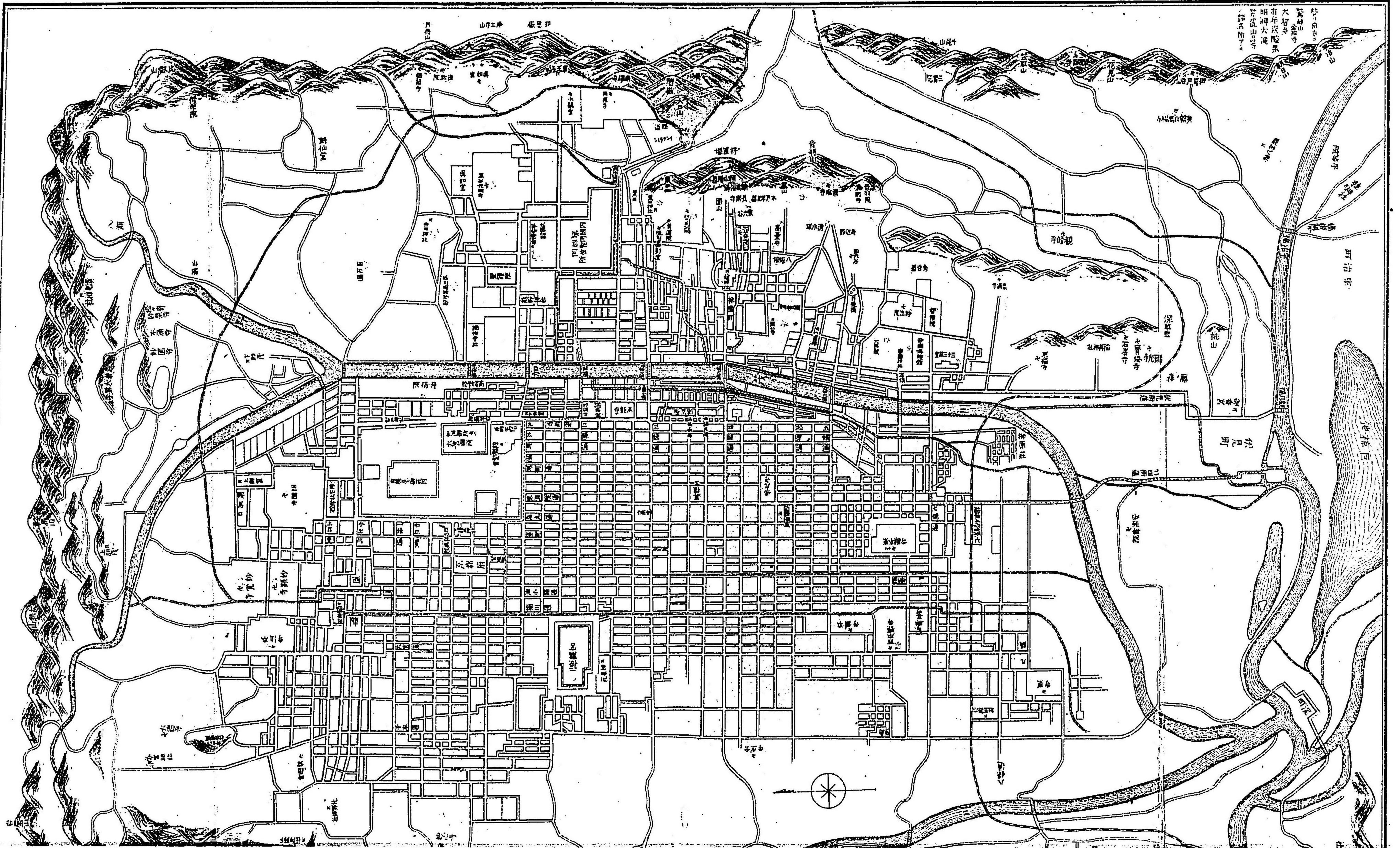
みには限らず間接には佛法の東遷とも印度、希臘等にも關係ありて其文物の我に傳へられしも少なからず降て足利氏の季世に至ては南洋諸島及び歐洲各國とも交通して其文明の巧技を我に輸入したれば日本美術の關係を細かに論せんには容易のことならず、然る我が日本の美術に於る特性に就ては變る所なく、且つ日本美術の情況を概知するには前段の陳述にて略ぼ足ぬべし

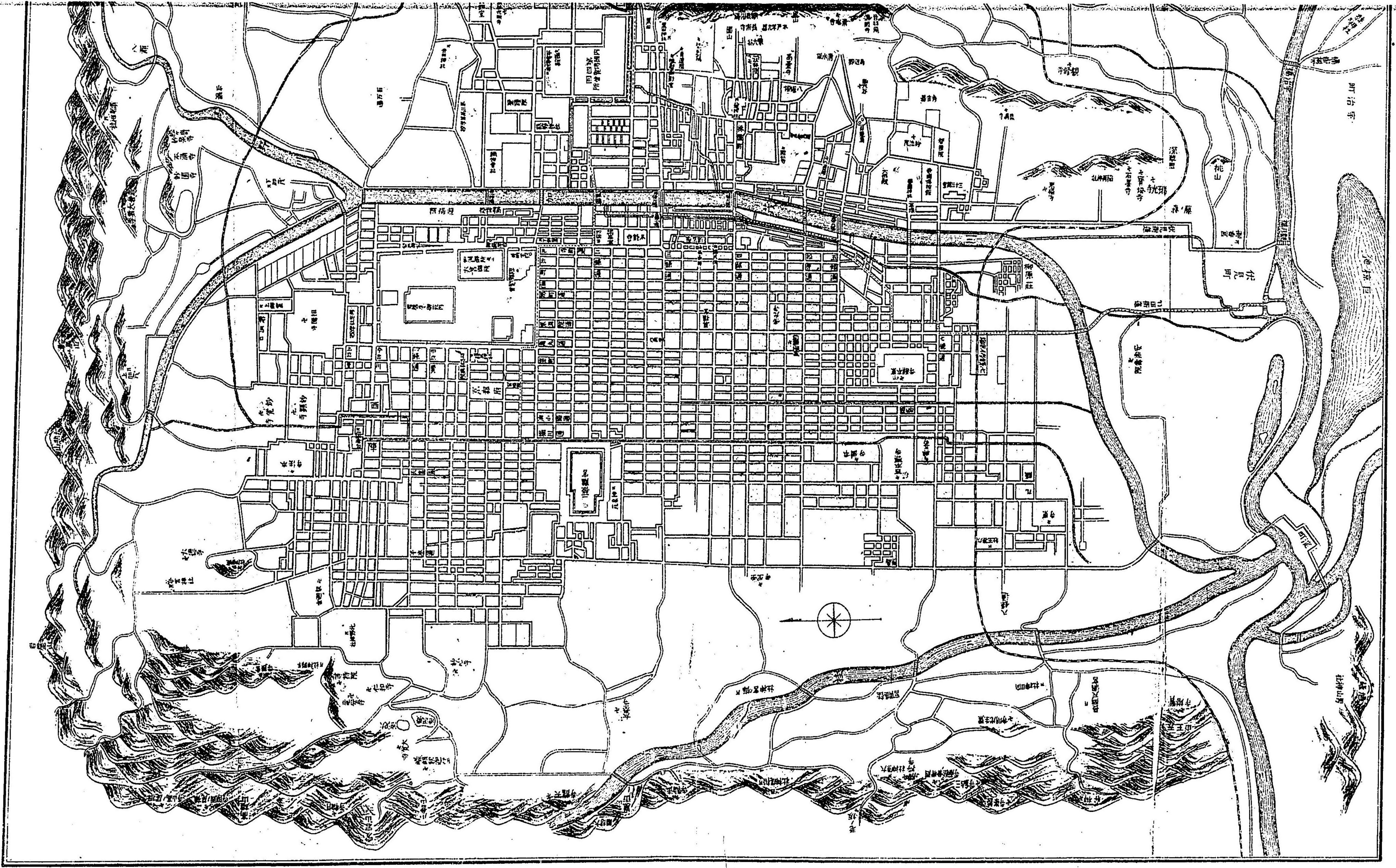
而して我に關係ある諸國の美術品は彼我對照して參考の益となること多し、況んや彼の美術品の中その優等なる者には希有の珍品も亦少なからぬに於てをや、嘗て三韓支那等より我に傳へしものの中には彼しほく革命の亂に遇ひて國の珍品重器を失ひ偶ま我に遺りて存するものあるに於てをや、幸に京都には日本美術品の他に此等の外國美術品をも藏する舊祠名刹少しとせず、その所藏の什寶を列擧して内外の美術を示し且つその作者年代等を詳かにせば或は之によりて美術社會に小補を與る

こと莫^{ナク}にしもわらじかし
明治二十八年一月

黙香廬主人識

京 都 及 近 傍 明 細 地 圖





きやうと

第二編

京都勝覽第一日三條大橋より四條大橋へ出で東部を北へ廻る

◎三條大橋三條通り加茂川に架す 京都三大橋の一なり當橋に四條大橋五條大橋を加へて三條大橋を稱す 初め天正十八年西紀千五百八十九年 豊臣秀吉その臣増田長盛等をして之を造らしむ長六十三間幅四間五寸欄干の擬寶珠は紫銅にてみな諸侯の寄附なるが明治十四年の改造にも同廿七年の修築にも擬寶珠はそのまゝ襲用したれば今なほ擬寶珠に寄附者の姓名および土功の銘歴然として存し人をして坐ろに三百餘年の昔を追懐せしむその橋銘に曰く

洛陽三條之橋至後代化度往還人土石之礎入地五尋切石柱六十三本蓋於日域石柱橋濫觴乎

天正十八年庚寅正月日 豊臣初之御代奉増田右衛門尉長盛造當橋は東海東山北陸等諸街道の起點にして里程元標も亦こゝに在り

故に諸道の旅客輻湊して晝夜往來絶えず旅亭軒を並べて橋の東西に櫛比せり大江資衡が三條橋の詩に曰く

畫橋雲裡出 千尺彩虹懸 絡繹行人影 飄然似上天

●三條小橋 大橋の西牛町許 橋下の流を高瀬川といひ加茂川の支水にして南方伏見に達し淀川に入る慶長年間吉田了以の開疏せし所にして百貨運輸の通路たりこの橋の東詰より北に入れば高瀬川の東に沿ふて一街あり木屋町といふ旅亭貸席割烹店等軒を並べ鴨水その家の東に流る亭榭水に臨みて遠くは叡岳を望み近くは東山を眺め四時の景とも佳し

●新京極 三條小橋の西二丁餘り三條通 この地もと誓願寺の境内に屬せしを以て誓願寺と稱したりしが明治維新のち道路を開通し更に呼て新京極といふこゝは都第一の熱鬧場にして演劇音曲輕伎軍談落語その他種々なる遊樂物および飲食店並に色々なる商舖等みな此一通衢

の中にありて遊人肩摩晝夜雜踏を極む

因に云誓願寺は天智帝の創建にして初め大和にありしを平安遷都のち山城乙訓郡に移し後また今の元誓願寺通り小川の西に遷し天正年中七八十年に至り秀吉の命によりて現在の地 京極三條東に移しゝなりといふ

寺の南に一基の石塔あり傳へて和泉式部の墓と稱す式部は西紀千年頃の時上東門院に仕へ文學式部老後尼となりて誠心院立御堂關白道長の建に達し殊に和歌を著す 寺といふに住す院はもと一條の北小川に在て誓願寺に隣りしを誓願寺と同時にこゝに移しゝ由なれば式部が墓もその時移したるにや

●蛸薬師并に鋪天神 共に新京極 蛸薬師は永福寺と號し本尊は即ち薬師如来にて石像なり傳へて傳教大師の作と稱す初めは叡山の北谷に在しを後に二條室町に遷して堂を營み水上薬師堂といひ又その境内

に水澤あるを以て澤薬師堂ともいひしを後世こゝに移し遂に澤薬師を誤りて蛸薬師と呼び祈誓を立るもの蛸を禁するに至れりとかや、神佛にこの類のこと多し、その愚憐むべく其迷笑ふに堪たり

錦天神社はもと紫苔山観喜光寺基は宗にして開の鎮守にして河原院の舊趾邸内の地にありしを天正年中西紀千五百豊臣氏の命により寺院を今の地に移せる時ともに遷座せし者なりしが維新のち神佛混合を禁止せられしにより佛寺の所屬をはなれて純然たる神祠となり新たに社殿を造營せり神靈は菅公自筆の畫像にして其名高く境内は繁華の中央に位するを以て賽人常に絡繹たり、また観喜光寺の什寶に一遍上人の繪傳十二卷あり、圓伊法眼の筆にして北野神社の天神縁起に次々べき著名の者なり

◎四條大橋四條通り加茂川に架す 京都三大橋の一なり、祇園社家條々記録を開するに永治二年近衛元帝この歳即位ありて西紀千四百四十三年康治始めて祇園四條橋を造りし

こと見え、その後或は流失し或は造築せしこと彼是の書に見ゆ、今の鐵橋は明治七年の改造にして洋風を摸したれば舊形を失ひしと雖も是また新装の壯觀ありて三大橋の名に耻す夜來電燈かゝりやきて四邊白晝のごとく水影遠くきらめきて橋下銀波を流せり夏期に至れば水上磯頭に假床をならべ席をまうけ燈を點じ篝火をたき夜を徹して雅俗雑踏す之を四條河原の納涼といふ往時は舊曆六月七日の夜より十八日及び七月の初め便時をねら梅窩山樵が詩に曰く

不_レ泛_二游_一 舳_レ不_レ架_レ棚 小床臨_レ水有_二餘_一情
晚風柳外人如_レ織 半里平砂跳_三可_レ行_二

すゝみする鴨の川原は都人錦をあらふ江にこそ有けれ 有功 船もなき鴨の川戸をふき渡る風にのりても涼む夜は哉 景樹 當橋の東詰に劇場あり南芝居北芝居と稱して兩座相對へり此處を四條仲町といひ爰より以東を祇園新地と稱し酒樓妓院軒をならべ歌音

やしのとうさや
Yasaka Temple.



戸々に起り、絃聲樓々に湧く人こゝに來りて平生を誤らざる者殆ど稀なり、實にこの地は京都の銷金銅たり

●八坂神社 東山の麓に在り 當社の濫觴を尋ねるに聖武天皇の天平五年 西紀七百三十三 吉備大臣唐土より歸朝の日素盞烏尊に牛頭天王の名を附し始めて播磨國廣峯に祀り貞觀十一年 西紀八百六十九 年に山城國八坂郷なる威神院に移し、同十八年に藤原基經、威神院に感じて新たに社殿を造營す、その模形紫宸殿を表したりき 後世改造するも雖も皆その様式による、故にそれとも柱の數寸尺は紫宸殿に同じ或書に基經此歲時疫流行せしかば之を疫神の崇りとして卜部日良麿といふ者京中の男女を率ゐて六月七日と十四日とに疫神を神泉苑に送る、然るに其翌年も疫病流行しければ百姓また神輿を神泉苑に送る、爾來例となりて毎歲この神事を行ふ之を祇園會と稱す、後世にいたり市内の諸町より各種の山鉦を曳出し練りめぐる、その行粧の美にして壯なることは花浴祭禮中にも多く



見ざる所にして頗る著名の祭なり年々この祭を観んがために遠近より集る老若男女の数はその幾萬なるを知らずこの祭を祇園會といひ祭神を牛頭天王といひ其社を祇園社といふは皆神佛混合より出し稱なるを維新の後はその混合の風を除きて之を純然たる神社となし例祭は七月十七日と廿四日とに定めらる十七日に神輿を本社より出して四條御旅所に送り爰に駐ること七日間にして廿四日に至りまた本社に還幸す

因に云本殿の中央は素盞鳴尊伊弉諾尊の御子西間は稻田姫御妻東間は八王子天照大神と素盞鳴尊の盟約の時に生を祀る然も佛者は天竺の佛神に附會し陰陽家は曆道の神に配合し世人をして遂にその由るべき本所を知らざらしむ而して普通一般に稱し來れる牛頭天王及び祇園の號は慈惠大師の傳に天延二年西紀九百七十四年云々蓋斯神は素盞鳴尊にして播に在ては廣峯と號し尾に在ては牛頭天王と稱し陽成院の御宇に當り來りて京師に化す且兒に託して曰く我は祇園

當社の境内には嘗て櫻樹多くして花のころは殿堂樓閣さながら白雲の中につままれたるが如くなりきといふ祇園の御神詠とてわが宿に千もとのさくら花さかば植おく人の身も榮えなんとありて此御歌によりて櫻樹を奉獻する人多かりしといへば然もわりけんされど近來は櫻樹昔しはせにはわらざれど社の東方に一株の垂枝櫻あり人これを祇園櫻と稱して昔しは許多の櫻に負はしし名稱を今は一樹に負ふに至れり巨幹繁枝高く空をつき廣く四方に垂れ一株にして數百株の林をなすに似たれば祇園櫻の名を已一株に負ひしも實に故なきにあらずその花爛漫の候にいたれば夜櫻とて人みな夜の艶色を賞し夜夜觀花の容ひきも斷ず篝火暗をてらして花光と相映じ醉顏紅袖相照して亦燃るが如し

高架火篝映萬枝 一群、榻展晚歸時 醉餘暫倚繩床坐
花氣暖來欲浥肌 梅窩山樵

●智恩院の東北隣 華頂山大谷寺と號し淨土宗の總本寺なりこの地もと南隣の圓山と一封域にして叡山の別院南禪院に屬せしが山門十二代の座主慈鎮和尚これを法然上人に與へしかば上人一向專修のため叡嶽を去てこゝに來り遂に淨土宗門を此所にてひらき又この所に入寂す故に此地は淨土宗門の靈場たりこの地に名水あり多福庵の階の傍らの清泉依てこゝの名を吉水とも稱し又この地昔は山嶽にして

ひみんおち
Chion-in



谷境廣漠なりしが故に古へより大谷と稱す、今は本願寺祖廟の在然
 るに滿譽和尚の代にいたり徳川家康の台命にて嶮岨を穿ちて平坦な
 らしめ茲に大伽藍を建營し即ち現在の狀形とはなりぬ、殿堂巍々とし
 て山に倚ひ樓門高く聳ひて老松の間にあらはれ春は櫻花の香雲をむ
 らがらせ秋は紅楓の錦をかくその風光の秀麗は禿毫の能く及ぶ所に
 わらず本堂北東西二十七間三三三寸表面に掲げたる大谷寺といふ額は後奈良
 天皇の宸筆なり、本堂の背後より廻廊を渡りて方丈にいたる、方丈の廊
 下をすぐるに歩々微かに聲あり林を隔て、春鶯を聞くに似たり所謂
 鶯張これなり、各室には名手の筆になれる著名の畫あり、佛間、蓮華、極
 の狩野、信に安阿、關、快慶の作なり、拜間の畫々工同前、上段、床に瀟見の李太白を
 工同中段、鐵拐、張果、耶を下段、劉女、西王母をえが、鶴間、色狩野、尙信の筆、梅間
 金張附梅に雉と松に、裏上段、呼鳥、狩野、尙信の筆、菊間、金張附極彩色の鶯間
 極彩色畫工狩野、定信、柳間、金張附柳に、燕、極彩色等なり、本堂の東の山上に開祖法然
 彩包畫工同前、柳間、色法橋、定信の筆



上人の塔あり又東南の丘上に鐘樓あり方四間にして洪鐘を懸く高丈八尺直徑九尺厚九寸五分造永例歳正月十九日より七日間御忌大法會あり其時これを用るれども日常は之を撞打せず當山櫻樹多きが中に糸櫻淺黄櫻の二株尤も世に名高し

上人の塔あり又東南の丘上に鐘樓あり方四間にして洪鐘を懸く高丈八尺直徑九尺厚九寸五分造永例歳正月十九日より七日間御忌大法會あり其時これを用るれども日常は之を撞打せず當山櫻樹多きが中に糸櫻淺黄櫻の二株尤も世に名高し

輕暖輕寒二月時 櫻花最早是垂絲 欲知春色繫情處
先問福庭鐵籠枝 畫餅居士

おは空の色の淺黄にさく花を霞の袖のうらかとそみし 景樹
當寺にはまた什寶頗る多し○觀經小經の阿曼茶羅紺紙金泥、寺傳惡心○地藏菩薩の立像寺傳小野○彌陀三尊の座像李龍○彌陀勢至觀音の三幅對宋の展○五百羅漢宋の法○五髻文殊僧都珍○二十五菩薩來迎の圖惡心○後白河法皇の肖像土佐古將○淨土曼茶羅元の薛○九品曼茶羅元の季○花鳥の畫二幅呂紀○荷葉の畫徐熙○籠に牡丹の畫元の繪○威陽宮の圖二幅雄子○山水人物の圖仇英○毘沙門天に群鬼寺傳金剛の筆○十王

の圖十幅信中華 ○袈裟張四曲屏風後乘坊より圓光大師開祖法然の ○法華經斷圖一卷弘法 ○十六觀經紅紙金泥寺傳唐 ○大方廣佛華嚴經紺紙金泥宋 ○玄宗の花軍及び源氏の圖の屏風二隻 ○十八羅漢の帖斷欠十一葉明 ○蓮華の畫一幅照筆除 ○文珠の圖一幅師傳金 ○圓光大師行狀繪傳四十八卷勅筆にして後伏見帝及び後二條帝の宸筆その他親王 ○羅漢の圖一幅殿司筆 ○地藏曼荼羅一幅信忠筆陸 ○文珠二童子の圖師傳梁 ○鳳凰に鶴惠心 ○妙音辨財天の圖一幅守傳飛那 ○黃鶴樓と岳陽樓の圖二幅司筆 ○布袋の圖に一休和尚の贊一幅 ○厨子入十一面觀音寺傳行 ○勢至菩薩の座像秀衛に傳はりて其體持佛たりきといふ ○銀の花瓶一個 ○鍍金の板佛二葉この他にも數十點のれをその重なる者を舉て餘は畧す ○植髮御影堂川橋通白 舊は青蓮院々内に在しを近年堂舎をこゝに移し本尊阿彌陀佛の右脇の壇に親鸞上人植髮の像を安置すこの像は上

人九歳の春青蓮院慈鎮和尚の許にて難髮せしが和尚その時の容貌をうつしかき剃り落し翠髮を像の頭に植るし者なりといふ之を植髮の尊影と號し眞宗門俗の偶像する所にして賽人常に群をなせり青蓮院はこの南隣に在り始祖傳教大師のち大僧正行支師實の息中興し覺快法親王第七皇子の爰に坐りたまひし以降代々法親王の御治職ありし名に高き寺にして書の一流御家流といふ粟田を開かせられし尊圓親王伏見帝もこゝに住職したまひぬ斯る由緒ある寺なれば什寶も多かりしが惜いかな去明治二十六年の春回祿の災に罹り輪奐の美も什寶の珍も悉皆烏有に歸せり其後朝廷より恩金を下賜せられ有志者も義粟田神社青蓮院の東 當社は明應年中西紀千四卜部兼俱の勸請にして武將の若公名源志義輝なるべしの本居と崇信せられし社にて祭神は八王子なり八王子といへば祇園社東間の祭神と舊は粟田天王或は威神院新宮なぞ稱したり

當社の東の高丘に吉水園と號する遊園あり近來こゝに貸席を新築して遊人の便に當つ南に山を負ひ東北西の三面ひらき前に黒谷の高塔翠松の間よりあらはれ遠く四明鞍馬愛宕等の諸嶽を望み脚下に花洛の諸街を俯視す景色の絶佳たどふるに物なし

●粟田口の陶器三條白川橋の東より山際に至るまでを粟田口と稱し東國京都名産の一にして昔は大日山の土をとりて製す物を表るに火にかけて損せずその養たるもの味ひ亦美なりといふ之を粟田焼と稱してその名世に高し

附 粟田燒史 寛永元年西紀千六百の頃尾張國瀬戸より三文字屋九右衛門と云者始めて粟田の里に來り住して専ら茶器を製造す其後九右衛門關東へ召され三代將軍より茶盃の御用命せられ年々各種の茶盃を燒て調進し數代つゞきて燒物御用を勤むたる薄玉子色の藥をかけた京燒御茶盃と唱へ淡黄色の藥を少しくかけ中程より下に糸目十一筋あるを御茶盃と唱へ

召糸目御茶盃と唱へ燒物師にては青燒と稱す黒の御紋徳川家の定紋葵三所つけたるを黒繪御紋付御茶盃と唱へ(御盤所)の茶湯に用ゐるこの他にも御好御茶盃御野茶盃な初代九右衛門の陶窯は粟田口今道町南側人家の裏字華頂畑と云ふ所にありて製陶の用土は建仁寺の東なる遊行といふ所また神明の邊及び東岩倉山(神明宮)粟田大路の傍の上にして大乗經を王城四方の山に藏めしより岩倉の號起ると舊くは東岩藏寺眞性院といふ大伽藍ありしが應仁の亂に兵火に罹り今は僅に小堂ありてその表とす山頂に大日堂あり等より取しが後にはその地絶えて元祿十年西紀千六百關東に請願し江州野洲郡南櫻村の山を給せられ其山の土を以て陶器を造る家より出たる者なりといふ當時専ら燒出ししものは茶入茶盃猪口鉢香爐及び禽獸蟲魚偶人の体にして人その巧致を賞翫す後年次第に同職の者増加し寶曆八九年の頃西紀千七百五十には凡そ二十軒ばかりとなりぬ然るに此頃は重に世用の土瓶茶盃その他雑品のみを燒出し九右衛門の家は追々衰微して御用の茶盃物品柄年々に愈惡に流れしかば淳信院(徳川)の代粟田口の茶

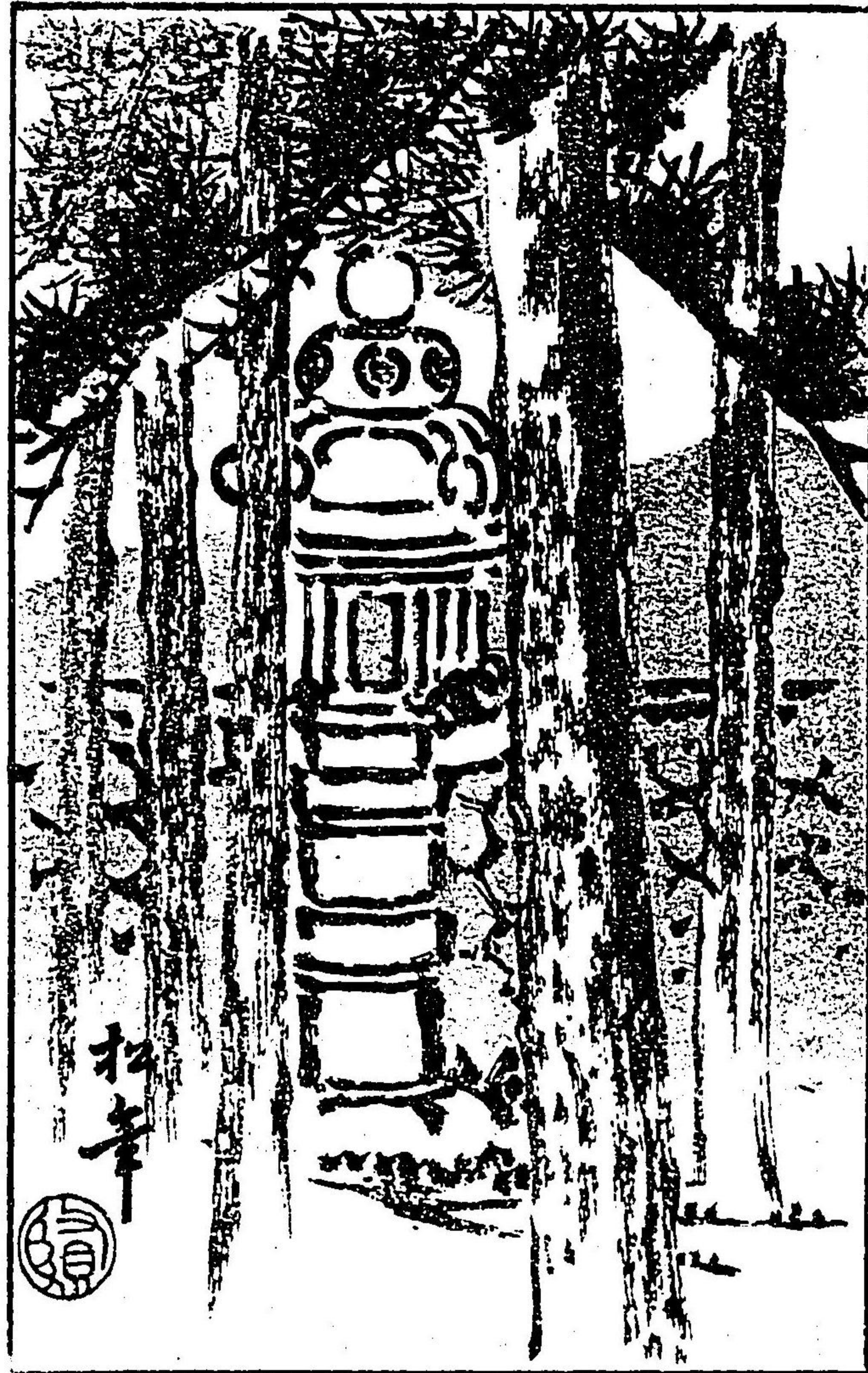
盃師等を取調べられて其時青蓮院宮の御用陶工錦光山銚屋喜兵衛
 岩倉山銚屋吉兵衛兩人へ更に御召御茶盃の御用申付られ六年九右
 衛門の跡はその後子孫の相續者累絶せり而して元祿年中に關東よ
 り給せられし江州の地は栗田の里よりは道程十里餘ありて御用の
 製造に不便利なるを以て寶曆八年に之を返上しその後洛東岡崎村
 の邊にて地主相對を以て土を買取り御用の茶盃を製造す錦光山岩
倉山等は
 人に金參拾圓づり此兩山は燒窯破損して改築する時は一また帶山帶屋
 與兵衛と云ふ者ありて禁裏の御用職を勤め毎年正月大福の御茶盃
 を燒き海玉子の藥をかけ松竹梅の模を付る例をす其他臨時の御用にて各種の品物
 を燒く諸侯がたの館入御用陶工には寶山茶盃屋文藏といふ者あり
 この外にもなほ窯持の陶工數人ありて茶器の類並に土瓶茶急須
 燒行平及び世用の品々を燒立て諸國へ盛んに賣弘めしが近年にいた
 り其技いよく進みて精巧を極め釉澤富潤彩畫艶麗にして善美を

盡す現時名を知られたる陶工は錦光山宗兵衛丹山陸良寶山文藏帶
 山與兵衛等にして其製品の海外に輸出せらるるもの亦多く製陶の
 業月に年に盛なるに至る

◎疏水運河幹線の水南禪寺の前にあつたり博覽會敷地の南 明治十八年に
 起工し同廿五年に及びて竣成す近江國大津町三保崎より琵琶湖の水
 をひき三井寺の山麓を穿ち二千三百七十餘間の隧道を通じて山城國
 宇治郡山科村にいたる更に曲折たる溝渠を経て日岡山に達しまた六
 百餘間の隧道を過て蹴上に出づこゝに舟溜所ありて荷物はインクラ
 ンによりて南禪寺前の舟溜所まで運搬を上下し水流は小隧道に入り
 て南禪寺の南に出で煉火石造の水道に瀉ぎて西に走る水道は鱒虹の
 ごとく蜿蜒として翠松の間に隱顯す是亦疏水の一壯觀たり斯てその
 水幹支の二線に分れ幹線は南禪寺前なるインクランの下を流れ遂
 に加茂川の新運河に合し支線は若王子の前を過ぎ鹿谷淨土寺等を経

ろうと、おんぜんか

Nanzenji - Stone Lamp-post.



て更に西に折れ加茂川の川底を通り京都市の北を遡りて堀河の上流に入る

磯道なりに事もひらくる世とて足引の山の下にも舟のゆきかふ

鳴神のくしき力をつかふ世は山に舟さへゆきしにけり

◎南禅寺 東三條の北南 瑞龍山太平興國南禅々寺と號し京都五山の上に

置かる 智光秀これ天竜寺相國寺建仁寺東福寺万壽寺初め京都の中に在しを明

てく 隆派なりし此地に往昔三井寺の別院最勝寺は最勝光院とも云へり又と

云るがありて爰に道智僧正といふ僧正住すその後年歴るに隨ひ替廢に

及び弘安年中 西紀千二百 年にいたりて龜山上皇宮を營み給ふにより

宮外には公卿の館舍薨をつらねて滔々たりしが正應の始め 西紀千二百

宮中に物怪ありて障をなし衆人しばしも安寝すること能はず 陰陽頭

に之を卜はしめられたれば故最勝院の道智の靈この地を愛惜して障得を

なすなりといふこの時南都北嶺の諸師下は呪術巫祝に及ぶまで百計

世これに文武兼備の名將と仰ぐ歳七本堂の傍より東に進み山徑をゆく
 こと數丁にして駒瀨あり巨巖左右に阻ち飛泉その間より落ち老樹蒼
 鬱として畫なは暗し古來こゝを神仙の佳境と稱す

涼しさに心のよりて來て見れば岩はしるなり駒か瀧つせ 眞彦

當寺の什寶には支那人の手に成れるもの頗る多し○山水漁舟の畫横

物一幅筆三松○山水樓閣の畫鶴の間の襖に張付く寺傳○墨竹の畫二幅趙

筆固○睡鴨の圖一幅萬國○山水の畫二幅然筆高○山水の畫一幅司兆殿○

山水の畫二幅呂紀○山水の畫二幅秋景一は雪景なり○聖相文珠の像

寺傳李龍眼の○十六羅漢の像一幅寺傳足利義持の○藥山李翱禪會の圖

一幅馬公○羅漢一幅西金居士筆○釋迦三尊寺傳張○十六善神の像寺

には張思恭の筆と云ふ宅磨其賀○涅槃像一幅寺傳張思恭の筆、普通の圖式

一種の妙あり或説に恐らくは西紀○觀音像一幅寺傳大にその趣を異にして

○十六羅漢十六幅美術のしるべ云丙三幅は宋畫なるべし○融通縁起二卷

信佐光○昔に雁二幅林良等なり此他にも無名の畫幅に見るべきもの少

なからず塔中の金地院にも亦什寶あり○山水の畫一幅村○山王祭

の圖屏風一雙不詳○昔雁の畫一幅○木造の地藏二軀同拈華の釋迦像

一軀また其方丈の間の畫は狩野尙信の筆にして庭前の林泉は小堀遠

州の作なり南に隣りて東照宮の祠あり祠の前に風樓門東門北等あ

りてその形式は日光廟祠の風を摸せり

○永觀堂南禪寺 聖衆來迎山禪林寺と號し淨土宗西山流西谷派の總本

山にして無量壽院と稱し又俗に永觀堂と稱す當山はもと東山進士藤

原關雄の山莊なりしを文德帝の齊衡年間西紀八百眞紹僧都請て佛刹

とす第二世宗叙の時清和帝之を歸依し貞觀五その後十數世を歴て永觀律

師の住職たりしとき衆僧と共に行道念佛を修せしに彌陀佛壇より下

てとも之を行ふ律師信感の餘り暫く乾方に向ひて躊躇しければ本

尊左を顧躬て永觀遲しといひ其後面貌もとに復らず世に之を見返り本

信の形より後世遺説附會せしものにて寺社の縁起には此類のこそ多し固より律師感涙を流し是偏に末世の衆生を攝取引接の證鑑なりとて自らその由縁を記し此像を本尊とす斯ることより堂を永觀堂と稱せりと
 いふ以上の奇瑞は永保二年二月十五日の朝あり又聖衆來迎山と號する故は寛治二年西紀千八百八十九年九月八日の夜律師聲を勵して念佛しけるに忽ち光明かゝやき聖衆來迎して星のごとく庭前の松樹の上に集會せしに因る本堂の前には枯木もなれり門を入て右の方に蓮池あり池邊一圓みな楓樹なり四時の風光ともに佳と雖も晩秋梢を染るころの美觀にまた及ぶものなし

古寺の庭のみちを見かへれば秋なから日も遅きかけ哉 正裕 笈齋

東山はなはかりかは霜もまた
 祖祠堂石壁の下に岩垣楓と稱する老楓一株あり古今集なる關雄が「奥山の岩かさ紅葉ちりぬべし照る日の光みる時なくてといふ歌に因み

て後世好事家の造り出せるものならん然ぞこの地の紅葉は古きものなること此歌にても知らるゝなり

當寺にも亦見るべき什寶少なからず○赤衣の釋迦と十大弟子三幅對
 寺夏筆 唐 ○來迎佛一幅 信筆源 ○廿五菩薩一幅 心筆 惠 ○山越の阿彌陀

佛一幅 同上 ○十六羅漢十六幅 筆者詳ならずその中の一幅は新畫を以て補筆力道勁なり或云宋人の筆か將 ○藥師如來一幅 基光筆 惠心筆とあれど春日た宋畫を寫し日本畫なるべし ○銅の唐磬等なり

ありの 〇十界の圖二幅 代の巨勢畫なるべしといふ 木造の地藏 一 佛寺
 空海の作 ○願阿彌陀 一 佛寺の本尊 惠心僧都時代 ○銅の唐磬等なり

●若王子社 永觀堂の北に隣る、一に若王子寺に作る舊は乘々院と號し天台宗にして當社の祭神は熊野大權現なり後白河法皇紀州熊野三所權現を崇信し
 卅三度まで御幸したまひしが渴仰の餘り葦下近きはとりに三所を移さんとして此所彼所尋ねたまひしに此地は台嶽の南にあたり山中に
 三の瀧ありて神妙の靈地なりければ法皇叙感斜ならず即ち當山を那

智と定め永曆年中西紀千百紀州那智山の土砂を運ばしめて權現をこ
 くに勸請したまふ皇居の正東なるを以て正東山と號し又熊野權現の
 若宮女一王子の神名に因て若王子と稱す曩昔は神殿壯麗にして樓門
 廻廊建つらなり境内には櫻樹多くして古へより花の名所にてありき
 然るに應仁の兵亂のとき此邊は軍士の屯する所となりたれば遂に荒
 廢に及び今はたゞ僅かに數字の小祠あるのみ然と社背の山は依然と
 して絶佳の風光を存し泉石亭舍幽趣あり且梅櫻楓樹及び杜鵑花等數
 多くして四時みな宜し溪谷の水清冽にして老杉鬱樹の間を過ぎ上流
 三所に瀧をなして落つ第三を如意輪瀧といひ第二を千手瀧といひ最
 も奥なる第一を十一面の瀧といふ瀧のはとり溪谷の間には三伏の日
 なは炎暑なし故にこの地は花紅葉にて世に知られたるのみならず消
 夏の最良地たるを以て亦名高し

花もみち瀧の響きの名にそへて

從二位 實 仲

ぬならぬ色の世に流れけり

名にたかき瀧の白糸されはこそ

正三位 有 功

花の錦もおりいたしけれ

若王子の瀧のはとりにて

延 之

くる人のたぬまをかのか物にしてむすふも涼したきのしら糸

●黒谷、光明寺若王子の西紫雲山金戒光明寺と稱し淨土宗鎮西派四箇の
 一本寺なり舊はこの地を栗原岡といひしを淨土宗の始祖法然上人こ
 ろに住しその初めに居し叡山の西塔黒谷の名をとりて新黒谷とよな
 へしが後には新の字を省略してたゞ黒谷とのみ稱するに至る安元元
 年西紀千百創建のころは白川禪房といひて別に寺號もなかりしを後
 宇多帝の御宇西紀千百にいたり始めて今の寺號を下賜せられたる
 なり本堂に圓光大師開祖上人自作の像あり其西脇に親鸞聖人自作の像
 あり阿彌陀堂東本堂に在の中央なる阿彌陀佛は惠心僧都の作にして僧

都がいやはての彫刻に係るを以て乙の如來といふとぞ、また觀音堂くわんおんどう藏經のぼんざん本尊千手觀音は行基の作なりこの觀音堂は往古行基が開基せしにて願主は吉備大臣なり故を以て臨壇に衣冠せる大臣の座像を安す、始めは善正寺の邊にありて、吉田寺と號せしが後世の寺は、滅びたよ此堂のみ存れるを當山に移し、いなり故に堂にはなほ吉田寺の額を掲げたり、且、觀音の像は天平五年西紀七三三年吉備眞備唐土にて靈木を得て歸り行基と心を合せて作りし所のものなりといふ堂前に一株の松あり、鑑懸松と稱す、傳へいふ熊谷直實遁世し法然に就て髪を剃すとき其着せし鑑を池にて洗ひこの松にかけしより名づくち方丈の北庭に鑑池といふあり即直實は出家して法力房蓮生法師といふ承元二年西紀千二百八十其詠める歌に

いにしへの鑑にまざる紙衣風のいる矢もとほらさり鬼

極樂に剛の者とや沙汰すらん西に向ひて後ろ見せねは

當山第一の什物として秘藏せる一枚起請文と稱するものあり、開祖法然鳴大神宮の神勅によりて淨土安心の要文をかきたるなりと言傳ふこの他の什寶には○出海の文珠、一幅寺傳唐畫とすれど或云千五百○彌陀三尊の像、一幅寺傳○屏風本尊の繪三個中は山越の彌陀三尊左右は北秋極樂の圖筆は悪心なり

○千代の地藏一幅野傳小○釋迦十六羅漢の上に涅槃像を彫りたる大理石、一個銅の厨子中にあり高三寸五分等なり

◎眞如堂黒谷光明寺の北に鈴聲山眞正極樂寺と號す、眞如堂はその本堂の名なり、本尊阿彌陀佛は慈覺大師の作にして舊は叡山の常行堂に安置せしが圓融院の御宇永觀二年西紀九百八十五年の春、叡山の戒算上人靈夢に感じて元眞如堂の地の北東下控に遷す、こゝは白河女院一條帝の母后の離宮たりしが女院も亦上人と同じ靈夢を得給ひければ先阿彌陀佛を殿中に移し尋で正曆三年西紀九百九十年の秋本堂を建立し莊嚴人目を眩する計りなりしと雖も兵亂などのために各所に轉遷し終には本尊阿彌陀の像をも燒失し今の像は其後元祿五年西紀千六百九十二年洛陽一條町に在て火災に罹り同六年に今の地に遷る、境内老楓數株ありて紅葉に名高し鎮守稻荷の社前には櫻樹林をなして花時亦佳し

法然院

七十

秋季真如堂觀楓晚間遇雨

中島規

楓寺靠山 山色開 老紅寒翠映行杯

不妨急雨驚吟席 一洗幾多秋錦來

よきもの餅屋はさひし花の時 芹舎

當寺の什寶見るべきもの三四あり○普賢の像一幅寺傳 思恭筆○廿五菩薩の像一幅寺傳 惠心筆 後世拙工の修補○不動の像一幅寺傳 空海筆○木造の地藏

一驅寺傳 空海の作

◎法然院真如堂の東 鹿谷村に在り此地は法然上人開栖の舊蹟にして其徒弟住蓮坊も亦こゝに住す然るに故ありて中絶しや久しく廢せしを延寶八年西紀千六智恩院卅八世萬無心阿上人ふたゝび興して新たに經藏を造築し一切經和をこゝに納めて寺を萬無寺と稱す客殿の庭前に清水あり之を善氣水といひまた山號を善氣山といふ當寺は老松古杉の中にありて寂々寥々また人寰の事をさかす清風俗塵をはらひ青苔世垢を

といめざれば茲に遊ぶ者は身を清淨無塵の佛界に入れし想ひあるべし

南隣に住蓮山安樂寺と號する寺あり是また法然上人の如法念佛執行の古跡にて當時その徒弟住蓮安樂の二僧に附屬したりしが後鳥羽院の愛妃松虫鈴虫の二婦一向專修の勸めをさゝて發心しこの二僧に隨ひて大内をしのびいで此庵室に來りて髪をおろし尼となりければ上皇いたく怒らせ給ひて二僧を死罪に行ひその師たる法然を土佐に流し給ひしを以て一時この庵室も廢滅せしを幾多の星霜を経てのち念佛弘法の舊跡の永く絶んことを惜み寺院を建立して即ち住蓮安樂の二僧を開山とす今は荒廢してたゞ僅かにその形を存するのみ此の邊をすべて鹿ヶ谷と稱し東の方三四丁の所に談合谷といふ地あり是を法勝寺の執行俊寛僧都の山莊の舊跡にして治承年間西紀千百年新大納言成親平判官康頼俊寛等平氏を滅さんとして密會謀議せしより

法然院

勝覺第二日

七十一

此名を存したりといふ今も山莊の跡にて二段の平地平家物語に云ふ

東山鹿の谷といふ所は後ろ三井寺に續きてゆるしき城郭にてぞ有ける、それに俊寛僧都の山莊あり、彼に常は寄合ひく平家亡すべき謀をぞ回らしける、或夜法皇も御幸なる云々

寛公別墅已泯然 慷慨爲惟壽永年 寂寞談溪風雨夜

水聲添恨轉潺湲 古尾重巖 恭

ひすひつゝ鹿か谷間の岩清水 古尾重伴

もれすは遠く流れさらまし

談合谷の上に瀧あり樓門瀧といふ樓門こゝに在しを以て名づく高凡そ九丈二尺遙かに之を望めば恰も練糸の樹頭より垂るゝに似たり、この又東に高く聳ゆる峻嶺を如意嶽といひ俗に大文字山ともいふ、往昔この麓に淨土寺と稱する伽藍ありしが一とせ回祿の災にかゝりしに本尊阿彌陀佛如意嶽に飛去りて光明を放つ、爾後于闐盆會とくに光明の

かたちを作りて火を燈しけるに弘法大師これを大文字に改めしが年經て文字の跡もうづもれしかば足利義政相國寺の横川和尚に命じて復もとの如くに作らしめ毎年七月十六日の晩に點火す大字横の長四十一間左の堅の一畫八十間餘、右の一畫六十八間、慈照寺之に由て大文字山の稱あり皆川愿が東山大文字を詠せし詩あり云く

何人巧思畫山成 村炬秋輪一夕明 巨筆飛丹光的歷

積薪焚翠勢崢嶸 烟合遠影浮龜水 雲伴昏星落鳳城

清賞由來片時散 空餘孤月照三更

ふみはみなやきし代もゐるを東山 雪 臣

名におは文字は火もて造れり

◎銀閣寺法然院の北淨土寺村に在り 文明十五年西紀千四百八十年 足利義政こゝに邸宅を新築して移る天子勅して東山殿の號を賜へり、没後遺命によりて寺となし其法名慈照院をとりて慈照寺とよなへしが北山の金閣にならひ

ぎんかき
Ginkaku-ji.



て二層の銀閣あるを以て世また之を銀閣寺と稱す宗は禪にして臨濟に屬し夢窓國師を開祖とす佛殿の釋迦牟尼佛は日護院と稱し鳴瀬の中三寶寺の作にして各室の畫は諸名家の筆なり客殿中の間の仙人畫しは海北友雪東の間の山水は逍遙軒西の間の山水は狩野隆也襖の畫は土佐光興また芦と薄とを畫ける屏風は相阿彌の筆なり東求堂は義政の持佛堂にて今はこゝに法服を着せし義政の像尺四寸五分を安置す東北にならびて茶室あり義政の數奇を畫しゝものにて達棚の張付の梅の畫は狩野古法眼元信の筆帳臺の腰障子なる琴書畫の圖は狩野永納兩腋の蘭と水仙の畫は相阿彌の筆なり此は四疊半茶室の濫觴なりといふ庭園は相阿彌の經營せし所に山水の風光真妙佳絶天下の勝景あつまりて一望の中にあり奇巖怪石こゝかしこに散在し石障虎石天柱峯香爐清泉懸崖にかゝり巽方に瀧あり躑躅花紅にして夕陽に映じ池の向に藤岡の丘白沙色清くして月光をといめ客殿の前

文庫園



吉田神社
銀閣寺の西

をあり一を向月盛一四時の觀どもに宜し池に數橋を架す
石は昔名分界橋といふを渡れば二重の高閣屹立す世にその名高き銀閣は是なり
下を潮音閣と名け上を心空殿と名く義滿の築造せし鹿苑寺の實に銀閣ありしと思ふは誤なり

大平時節守成難 豈料兵戈起宴安 兩腋風生銀閣上

憐君盡日倚闌干 太宰純

大樹蕭々秋帶風 無如猿犬各稱雄 獨有玲瓏數舉石

從君建置小園中 賴山陽

石も木も時代の苔やあきの雨 西吟

當寺の什寶見るべきもの二三を擧れば○渡唐天神の像一幅土佐光○

山水の畫一幅横九寸三分、豎九寸四分、相阿彌筆○冬夏の山水二幅吳琦○不動明王畫

像寺傳巨勢畫或云公望の筆ならん

◎吉田神社 銀閣寺の西 祭神は武甕槌命 齋主命 天津兒屋根命 姫

大神の四柱にして貞觀年中西紀八百中納言藤原山蔭始めて勸請す當社は南都春日社と同じく藤原氏の尊崇せし所なり天津兒屋根命即ち宣胤卿記に云く

奈良京の昔は春日社を以て氏社とし興福寺を以て氏寺とす平安城の今は吉田社を以て氏社とし法成寺を以て氏寺とす社頭の興廢に隨ひて藤門の榮衰を測るべし云々

當社の上方の山を神樂岡といふこの邊より西へかけて吉田の里なれば俗に吉田山とも稱す南北四町ばかりの丘山にして四方を見晴し眺望絶佳なり延暦廿年四月天皇こゝに御幸したまひしこともありき丘上は緑の松のわひく紅の躑躅のあまじり其盛りのうるはしさ殊に春は花の白雲このもかのもに柵引き秋は紅葉の錦をちこちに織掛け四時のながめ盡ることなし此岡の北に一すぢの流あり白河といふこの河にそひたる山本の村を白河村と稱す昔はこの邊より鴨河の東九條邊までを白河といふなへ南と北にわからず今の白河村の邊は北白河とよび古來このあたりの風景を賞し花松卯花等を詠せし歌少なからず

春といへばさむく風に立浪の花に埋める白川の里 定家
波のおとは松の嵐にきこゆなり卯花かはる白川の里 家隆

◎第三高等學校吉田神社の西當校は明治元年大阪に舎密局を建設せられたるに創まり爾來數多の沿革を歴て明治六年開明學校と稱しその後外國語學校と改め同十二年専門學校と改稱し其翌年また大阪中學校と改稱し同十八年 明治十九年に至り新に發せられたる中學校令四月九日及び其官制四月二十に依りて第三高等中學校と改稱し其位置を京都に定め今の地に校舎を新築して同廿二年八月一日移轉す而して廿七年高等學校令三月二十出るに及び高等學校と改稱し九月十組織大にかはりて法工の二科を置くのちつひにこを國までも匂ふらんよし田の里のわか櫻花

◎百萬遍 北田中村に在り 淨土宗 西本山の 一にして長徳山知恩寺と稱す草創は慈覺大師にてその始めは天台宗なりしが法然上人加茂の神勅に依てこの寺を附與せられ爰に住して専修の法要を談せしより遂に今の宗となり即ち法然上人を開祖とす第八世空圓善阿上人の時にいたり元弘元年 西紀千三百一十一年 の秋國中疫厲流行して民多く死せしかば天皇 後醍醐 之を憐み給ひ善阿に勅して祈念せしむ善阿餘行を修せず七日を限りて念佛すること一百万遍にして疫病止みければ天皇御感ありて百萬遍の號を賜ひ又弘法大師の書せし六字の名號を賜ふ 文字畫所は此名號を本尊となすといふ元弘の疫に用かした大數珠今は存す此の寺舊は今出川北小路に在て當時神宮寺又は加茂の川原屋 川原屋は瓦を築かふを居て用かした號なるべし 國傳院伊勢齋宮寺の忌詞に佛を立ズク思ふと稱して上下加茂社の法樂修法の寺なりしを義滿相國寺を創せんとして之を油小路一條北に遷し 永徳三年西紀千三百八十二年 其後また秀吉の時京極土御門に移り寛文二年 西紀千六百一十二年 今の地に轉す

當寺の什寶は○善導大師の像一幅 寺傳大師の自 ○涅槃の像一幅 寺傳李或云中ころの巨勢 ○十六羅漢十六幅 寺傳唐畫 ○釋迦文珠普賢の三幅對 寺傳中は行基左右 ○當麻の曼荼羅一幅 寺傳惠 ○蝦蟇鐵拐の畫二幅 寺傳顯 ○十体阿彌陀の像一幅 筆者不詳願

◎織物會社 御幸橋の東 明治二十年の創立にして縞子紋織その他各種の織物を製造し傍ら染物撥糸等の業を營めり初めは佛人を雇ひ入れ又西洋の機械をも設置して歐風を専らとせしが後には和洋その宜をとり技術頗る進歩して其製出する所のもの實に精巧美麗を極び現今使役する職工七百五十餘名にして煙筒の煙り晝夜絶ることなく鴨東の風光これが爲に害なはるゝの恐ありと雖も亦以てその業の隆盛をトするに足る

京都勝覽第二日 東部南の方東福寺に至り更に圓山に遷る

◎建仁寺 大和路の南、建仁宗臨濟派にして京都五山の第三に位する巨刹なり、開祖は榮西、千光國師と稱するが彼嘗て商船に乗て千八百六十八年支那に渡り、明州の津に着し、南宋の孝慮庵、欽和尙に就て禪を學び、南宗の正統を相承して歸り、其後建仁二年、西紀千二に當寺を草創す、敷地は鎌倉將軍頼家の施入にして、五條以北、鴨河原以東みな其封内たりき、時の天皇、門院深く榮西を尊仰したまひければ、勅して之を官寺となし、建仁の年號を寺號に賜ふ、當寺は本邦禪刹の魁首にして、堂塔藍伽立列なりて、魏々たりしが、天文年中、西紀千五百、火災にかゝりて悉皆烏有に歸せしより再び舊の結構を見ること能はず、今ある佛殿は東福寺より方丈は藝州安國寺より移し建たる者なり、南の方の中門を矢立門といふ、軍箭のあと扉にあるを以てこの名あり、此門は始め小松重盛の館に在し、もいふ、斯て當寺再建の中門の西側に禪居庵といふあり、清拙和尙の開基なり、和尙は宋國福州連江の人にて、嘉曆二年、西紀千三百二十七年来朝し、鎌倉

の摩利支天、金色七頭の猪に乗る、和尙が宋國より持來れる土にて造りし所に於て應驗あらたなりとて、遠近より參詣する者多く、朝暮香烟たゆることなし、また惠瓊の首塚、元安國寺の僧にて、學を好み、武を嗜む、嘗て毛利輝元を其後、長庚子の亂起るに及び、首として三條河原に梟せらる、好謀三輪執齋の墓、京師にてを築成し、遂に家康に捕られて、三條河原に梟せらる、三輪執齋の墓、京師にて始め、佐藤直方に從ひ、山崎派の性理の學を主張せしが、後また陽明王氏の長知の教を崇尊す、倣、四首教等、その著書少なからず、學門の傍ら、和歌を好み、之を善くす、赤松圓心の塔、跡にあり、等あり、正傳院には、織田有樂齋の塔及びその好みの茶亭あり

遊建仁寺、正傳院

伊藤長胤

菩提 紆餘樹竹深
 迎人 恰々有鳴禽
 入門 香霧襲衣袂
 一道 花開薔葡林

佛殿の東に鐘樓二ヶ所あり、東の方なるは無銘にして、獨鈷の形を彫る、傳へ云ふ、往昔源融、一徳の皇子にして、齊衡十四年、左大臣に陞り、宇多帝の時、景を煇造し、毎月難波の湖二十斛を汲て、日の河原院に掛し、所の鐘なるが院に鐘を煮さしむ世に河原左大臣と稱す

の替廢せるのち加茂川の淵に沈みたりしを榮西官に請て之を引上げ
 當寺に移しゝなりと嘗てこの鐘を撞くに毎夜子刻より數九十聲また
 晨に十八聲をならし合せて一百八を撞く俗にタラリと稱して世に名
 高き梵鐘なりこの鐘を撞くとき陀羅尼經の文を誦せしより陀羅尼經の
 詩あり云く 招提合在白雲隈 何向花街柳陌開 九乳似憐人醉夢
 蚤驚一百八聲來 什寶○關山霽雪の圖藏文 ○樹下仙人の圖二
 幅陸倫 ○群賢勝會の圖劉俊 ○赤衣釋迦の坐像不詳 ○達磨の像雲谷
 掌の合 ○人丸の畫像曾我蛇 ○雪中梅鷄若冲 ○山水の畫馬蹄 ○内裏歌合一
 卷寺傳西 ○十六羅漢十六幅名筆凡筆相混す中に長隄 ○後小松帝の宸
 翰一幅 ○銅の花手桶狂ひ獅子の影 ○青貝の大卓上面風風 ○青貝の料紙
 箱梅花の淡綠古雅 ○古青磁の花瓶一對 ○同大花瓶一對 ○爵形の香爐一
 個器陶 ○達磨の木像一個一尺三寸ばかり 塔中の什寶には久昌院に
 ○山水の畫一幅時野定 ○文珠の像筆者不詳明 正源院に○鷹の

畫八幅對宋の徽宗 靈洞院に○源平合戰圖の小屏風 ○觀音の像
 月畫 ○樓上吟月の圖一幅 兩足院に○山水の畫馬蹄 ○人丸の像
 足曾我蛇 ○雪中梅雞の畫若冲 大昌院に○藥師如來銅像一軀佛傳
 大師 ○珍皇寺堂舎古繪圖法珍 大昌院に○藥師如來銅像一軀佛傳
 年中西紀千 百十餘年所に燒失し其後 再建もなかり 珍皇寺一に愛宕寺とも稱し
 兩中西紀千 百十餘年所に燒失し其後 再建もなかり 珍皇寺一に愛宕寺とも稱し
 たりと開基は弘法大師 中興は念佛上人 又六波羅密寺 の東北側に六道佛
 皇寺と稱す あり觀音 の千日詣 して七月九日 十日諸人 六道の地 蔵に詣り 亡魂
 を迎へまた 清水寺 觀音の千日 詣して 七月九日十日 諸人の珍皇 寺と 誤認 する者 多か
 れどつ 是亦 たが へりの 愛宕の 地は 延暦 珍皇の 寺と 古諸 人の 珍皇の 寺と 誤認 する者 多か
 り故に 死者を 迎へ先づ この ふた りの 寺院 たる引 導經 べして 鳥部 野に 送り 者の
 爲し 閉き しに 因り つき たるに 及び 六道 の名 は後 世に 聞ゆ る寺 を愛 宕寺 とよ く
 道に 殿亡 して其 古稱 を負 はせ て大 昌院 を建 せり 誠の 珍皇 寺は 既に 殿亡 せし ば六
 のな

建仁寺の東に隣りて安井金毘羅の社あり祭神は中央崇徳天皇左金毘

羅右源三位頼政なり、この社舊は觀勝寺に屬す、往昔藤原鎌足この地の
 勝景を愛し自ら紫色の藤をうゑて家門の長久を祈りしが其樹いやま
 し榮え盛りに花を着ければ世に花の寺と稱せらる、崇徳天皇この藤
 花を愛し屢次鳳輦を巡らし給ひ遂に殿舎をこゝに營み寵妃阿波内侍
 を居らしめて臨幸絶えざりしが保元の亂に讃岐國に遷幸ましく内
 侍はその後も爰に止まりて且暮慕ひ奉りしかが讃岐より形見にせよ
 とて御自筆の尊影并に御隨身二人の像を畫きて内侍に贈り給ふ斯る
 緣由あれば文永年中西紀千二百こゝに一字の佛閣を建立して尊靈を
 鎮め奉る院と號す其後兵火にて燒滅せしが元祿八年西紀千六百
 至り洛西の安井村より蓮華光院を遷し又新たに讃岐國象頭山の本社
 を模造す象頭山は那珂郡平村に在り、大己貴神を祭り後にまた崇即ち安
 井金毘羅なり本殿の東北及び表門の邊に藤樹ありて晩春の頃はやか
 りの色深く咲亂れかの帝のめで給ひし昔しのばれて戀々去りがたき
 心地す

まどゐして見れどもわかぬ藤浪の

天曆 御 製

たゝまぐ惜しきけふにも有かな

高はたにみけしおるかどみゆるかな

上田ちよ子

やすみの松にかゝるふちなみ

◎六波羅密寺五條の東 普陀落山と號し空也の草創なり天曆五年西紀
 一十年京畿疫して死屍相枕せしかば空也いたく之を憐みて自ら十一面
 大悲の像を刻みて車に乗せ洛内を巡廻して祈禱をなす斯て四衆を勸
 めて一寺を創め之に自作の觀音を安置す洛内を引廻せし境内に姿見
 の池と稱する池あり空也おのが姿をこの池水にうつして自己の像を
 彫刻せしより名づけたりといふ開山堂に安置する像は即ちその像な
 りとかや六波羅は屢々歴史にあらはれたる顯著の地にして平相國清
 盛の邸平正盛、忠盛も共に六波羅に住したり清も此地にあり、建長七年西

千二百五 北條義宗 居北方に 式部丞時輔 居南方に 相共に政を施し、両六波羅も亦この邊の地なりき 義宗の弟は密寺の西に並び、時輔の

嘗寺の什寶には○十二天の圖十二幅 筆月 ○桃源の圖 畫は蓋其昌にして、嘗て嘗寺開張ありし時無村連日參觀 ○地藏菩薩一軀 小野 盤作 ○四天王 木造四軀 ○梵字の銅古印一個

◎五條大橋 五條通鴨 此橋いにしへは今の松原通に架せり、これ實の五條通にて現時大橋の在るところは六條坊門通りなりしが豊臣秀吉五條橋を此處に移し、より従前所在の名稱を用ゐて五條大橋と呼びしかば遂に六條坊門の名をいはずして五條通といひ本の五條通は本稱をすて、松原通と稱するに至る蓋し往昔京極の西四五丁の間に松の並樹ありしを以て松原通の名を得たり、この橋も三大橋三條四條の間の一にして舊は石を以て造り、欄干に紫銅の擬寶珠を用ゐしが其後木造となり明治十一年に洋風に改造し、同二十七年に再び舊制に復し、欄干擬寶珠を附して木造とせり

舊の五條橋の濫觴は嵯峨天皇の勅定によりて、一百餘間の橋梁を用ゐ東西の大路に續くと水月集 青蓮院尊純法 に見えたる是なり、慶長年間六條坊門通に轉架せし後はこゝに假橋を架し松原徒杠といふ、清水寺へ參詣人の通路なれば往還つねに賑はへり

◎大佛殿方廣寺 建仁寺町通、馬 天正十四年 西紀千五百 豊臣秀吉の創建にして此役に與る國廿一、佛像は銅にては其成ること晩きが故に木像となし、漆膠を以て之を塗り、五彩を以て之を飾る、堂の高二十丈、佛の高十六丈、石燈籠、敷石、或は石垣の大小など、寄附の諸侯おのゝ家名または紋所および其出所を石面に鐫す、惜かな慶長元年 西紀千五百 の大地震にて悉く崩壞しければ、同七年豊臣秀頼再建し銅像を鑄んとして失ちて焼亡し、また十五年更に金銅を以て造りしに五十餘年の後、寛文また慶長に罹りて其像破壞せしにより復た木像に改造し、寛文七年 西紀千

十七に成就して殿堂巍々たりしが寛政十年西紀千七百九十八年七月雷火の爲に佛殿丈像二王門廻廊すべて灰燼となり近時漸く大佛の半像を造りて僅かに懷舊の感を惹起せしむ

晉費黄金十萬駄 鑄成百丈大沙那 佛與檀起俱灰滅

耳塚蕭條春草多 賴 惟柔

世中何者免無常 千尺佛身今則亡 只有彌陀峯頭月

雲間遙拜白毫光 釋 獨 雀

當寺に大鐘あり尺高二丈四尺徑九寸慶長十九年秀頼の鑄造せし所にして其銘は東福寺の僧清韓の撰なるが國家安康大小釋迦迭爲主伴云々となりしを家康讀て已を呪詛するものとなし是より遂に物議を生じ大坂滅亡の種因となりしは史に於て人の知る所なり

大佛正面通の南に大なる塚ありこれ世に聞えたる耳塚にして秀吉朝鮮を征せしとき敵兵の首を獲ること幾萬級なるを知らず從役の諸將

これを悉く秀吉の展覽に供ふること能はざれば削り取りて京師におくりたるを茲に埋む

授誠歸來此築墳 可憐萬里背親恩 和歌不入殊方耳

強唱唐詩慰旅魂 釋 元 政

こゝに來てなけ郭公その聲を 芳 樹

さくべきための耳塚のうへ

◎豊國神社大南院 豊臣秀吉の靈を祀る慶長三年西紀千五百九十八年八月十八日秀吉歳六十三にて薨じ九月上旬その遺骸を阿彌陀峰山社の後に今豊國山モに葬り同四年三月社殿回廊拜殿三門等悉皆落成しければ朝廷勅して豊國大明神の神號を贈りたまふ然るに徳川氏の代にいたり廢亡して復むかしの面影みえざりしが明治十年西紀千八百七十五年あらたに土工を起して現今の所に社祠を建立し之を別格官幣社に列したまふ表門は桃山城門を移しゝにて社前の鐵燈籠は慶長五年西紀千五百九十二年釜匠與二郎の鑄造せしなり

◎妙法院 大佛殿の東馬町の南側 開基は延暦寺惠亮僧正にして代々法親王御相續ありて山門の座首たりき舊は祇園の南にありて小坂殿また綾小路宮など稱せしを豊國社創建のとき爰に移す

什寶 ○花鳥の畫一幅 寺傳 ○如意輪觀音一幅 馬遠 ○不動の畫像一幅 後白河帝御筆 ○豊國神社臨時祭の圖六枚折屏風 野内 ○不動の畫像

○踊の圖六枚折屏風 筆者不詳或云岩又平ならむと ○内裏歌合一卷 西行法師筆 ○唐金の水指 高七寸重一貫百四十 ○頼阿法師の碓 泥なり澄 ○秀吉の裝束一式并に朝鮮人の衣服八領裝一枚脚絆一双沓一兩 朝鮮人衣服等は同國王なりといふかの國當時の服樣を觀るに足る ○後白河院御肖像 御自 ○古鏡一面 徑三寸八分柄面に整衣冠尊瞻視の六字あり秀吉の遺物なりといふ

◎智積院 豐國社の東阿彌陀華の西麓 一豊臣秀吉その子兼君の早世を哀しみ菩提のため一寺を建立して祥雲院と號し妙心寺南化和尚を開基とすその後故ありて之を妙心寺の玉鳳院に移ししが徳川家康の世に至り眞言新

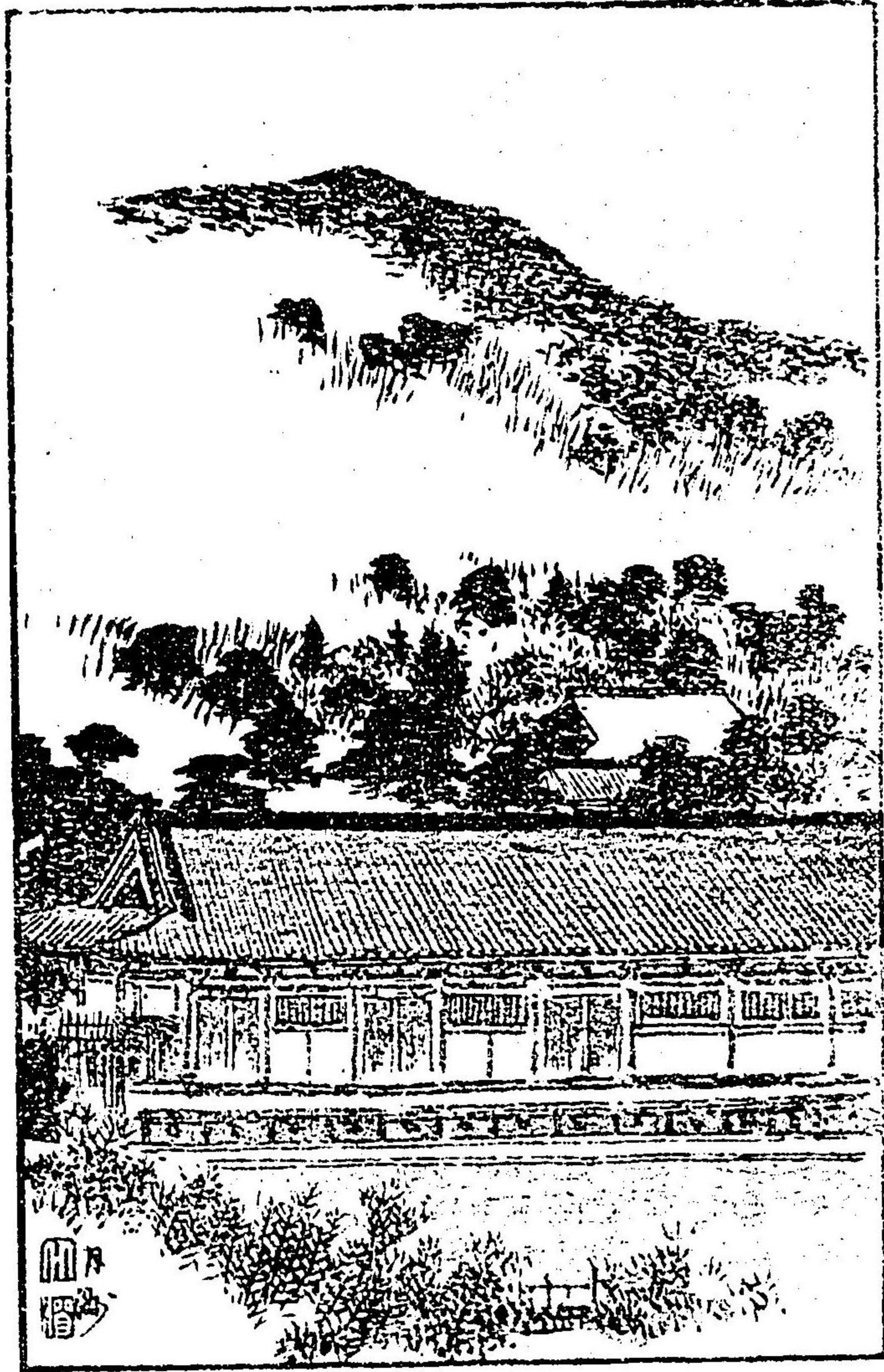
義の門徒根來寺の廢絶を歎きて屢々愁訴しければ祥雲院の建物をそのまゝ賜ひて根來寺智積院と稱し即ち眞言新義の總本山たらしむ 州根來寺は眞言新義派の宗祖覺鑊上人の開く所なりしが天正年中豊臣秀吉の寺の坊徒が動もすれば兵器を弄して武家に敵するを惡み遂にこれを滅ししかば一時廢亡せしを得たり方丈の各室は名畫おはく庭中の林泉は頗る佳景なり

什寶 ○松鶴の圖一幅 吳春 ○山水の畫 寺傳馬遠 ○牡丹に獅子の圖瀧に二獅子の圖瀧見觀音の圖藥師十二神將の圖 以上四幅共永貞筆 ○浪岸の圖一幅 寺傳王 ○孔雀明王の圖 張思 ○五大尊の圖 寺傳與教 ○五字の文珠二幅 永貞 ○不動の像一幅 寺傳與教 ○乾建婆王十五鬼神の圖 吳春 ○繕字妙音品 寺傳支那 ○瀧見觀音の大幅一軸 長曆十四段 ○不動の座像一軀 ○愛染明王の像一軀 ○銅像の地藏一軀 ○華嚴經一卷 天平十二年の書 増一阿含經一卷 寺傳天平

◎帝國博物館 豐國神社の南に在 明治廿五年六月の起工にして同廿八年に落成

うだんげ三十三

Sanju Sangendo.



三十三

九十二

す間口四十一間奥行卅五間六分の建物にして玄關の間口七間奥行十
間はかに間口五間に奥行三間の石段ありて其左右に長三間幅一間の
御影一枚石を敷詰り左には普賢菩薩唐獅子乗の銅像右には文殊菩薩
象乗の銅像を置くその装飾の優雅なるその構造の壯麗なるは實に日
本帝國の美術の府とも稱すべき京都の博物館たるに恥ざるなり

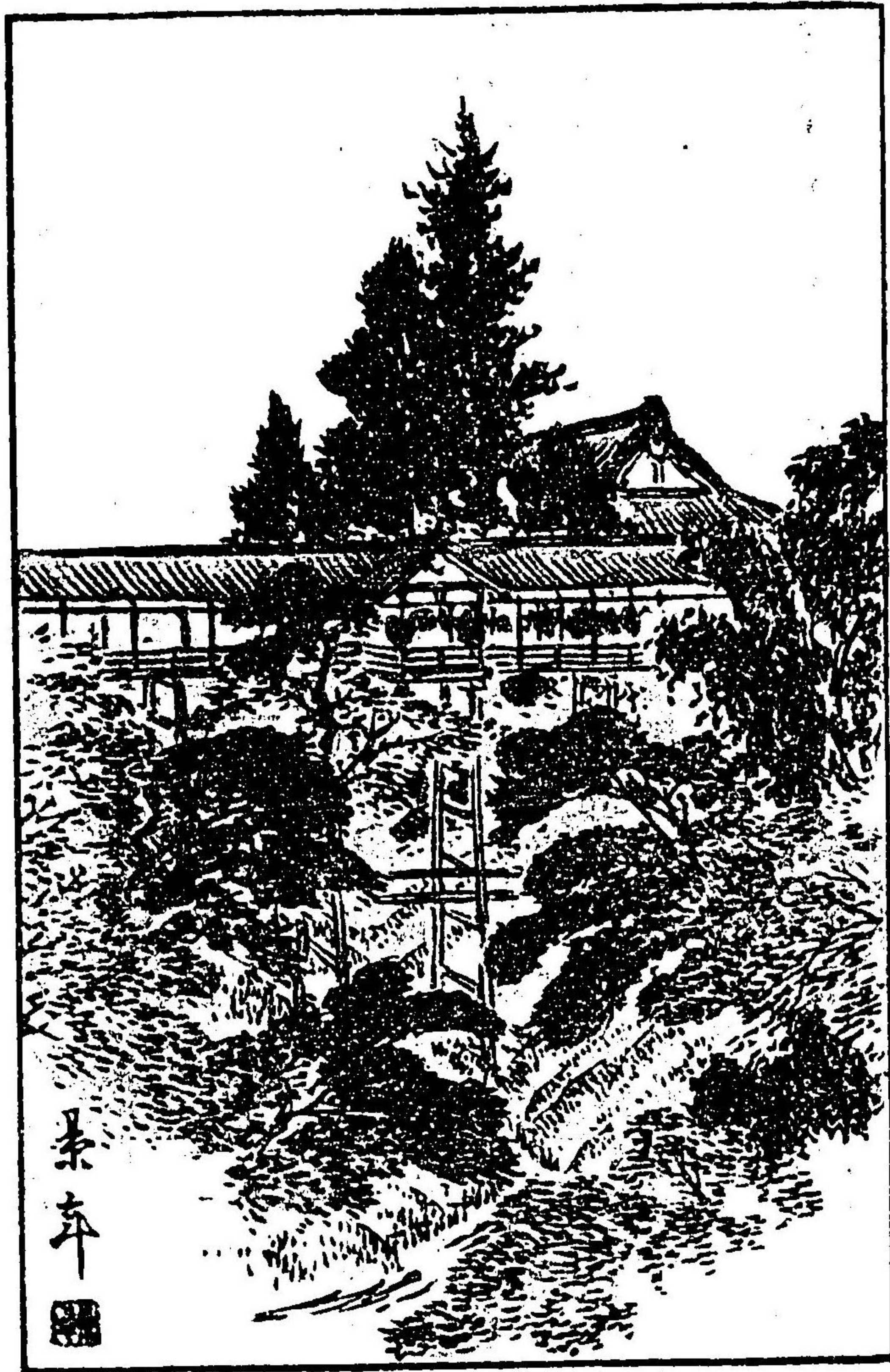
◎卅三間堂 豊國社の初め鳥羽上皇長承元年西紀千二百に卅三間堂を此
地に造營し得長壽院と名けて一千一軀の觀音を安置したまひけるが
後また長寛三年西紀千五百に後白河上皇更に卅三間の堂を建立し一千
一軀の觀音を安置して蓮華王院と號す兩寺とも寶治二年に回祿の災
にかゝり文永三年西紀千二百に再興せられしが此時兩寺合一して蓮
華王院と呼び得長壽院の方はその名うせたり現存の堂は即ち文永再
興のものなり 本堂南向にして南北六十間一尺四寸六分東西八間三尺七寸
り堂内は垂木等にまで彩色を施したりと雖も今を去る凡そ六百卅年



前の建築なればその多くは剣落して圖畫明了ならざるは遺憾なり、本
 尊は千手觀音座像八尺、大僧正行慶、康二十八部衆師運慶作、一千体の千
 手觀音、立像各五尺許、内三百体は康慶、康永の作にして二百体は運慶の作
 昔時は堂の裏縁側にて階藩の士年々弓勢を試ることをなせり、初め
 は堂下の芝生にて射を練り、然るのち堂上に登り、百射或は千射又は
 日矢數等かの、隨意に之を行ふ而して、大矢數射試る時の射術を
 行ふときは日暮より翌朝まで、簪をたき夜を徹して射を試み、傍らに
 は通矢檢證の役人居並び、要所々々には消火役繩を振立て、非常を
 警むる等その機いと嚴かなりき、從來大矢數に名譽を博せし者の類
 かす、堂にかゝげたれば、今なほ其人を知るを得るなり

◎東福寺 伏見街道、第 禪宗臨濟派にして、京都五山の第四に位す、嘉禎二
 年 西紀千二百九十六年 九條相國道家當寺を創建し、其後寛元元年 西紀千二百
 至り之を聖一國師に予へて開基とす、備辨圓喜良元年、宋に渡り、經山寺の

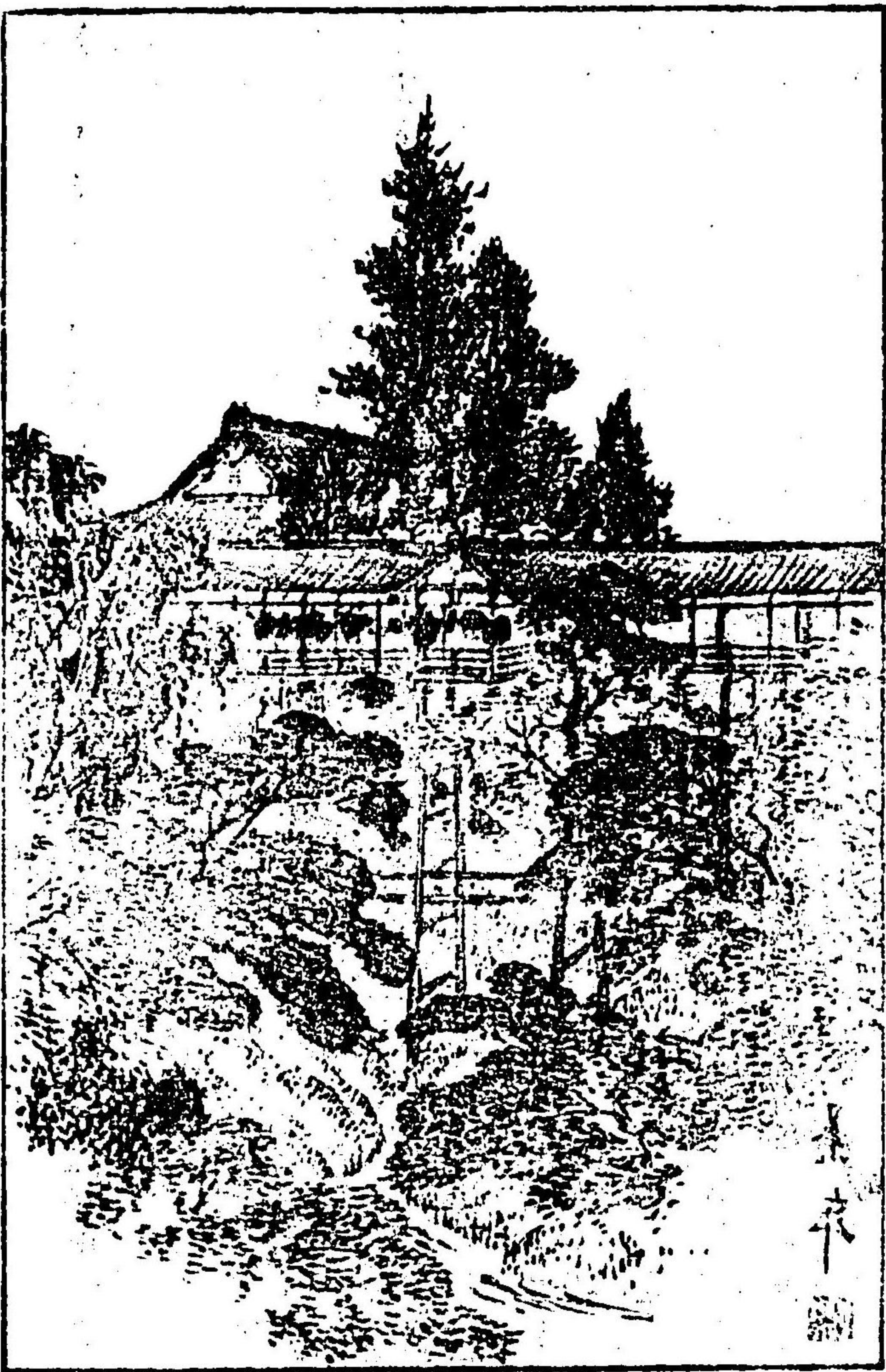
ふてらつ、くふらと
Tōfuruji: Ten ten.



茶本

二年に備朝し、花園帝の御宇に至りて聖一國山號は惠日山と稱し其創め宏に
 鉅材を構ひ洪基を東大に亞ぎ成業を興福に取り名けて東福寺といへ
 る由なれば當時の壯麗想ふべし然るに前年開山堂常樂庵等は燒亡し
 て再建になりしが幸ひに伽藍のみは往昔のまゝにて在しを是亦近年
 回祿の災にかゝり悉皆烏有に歸せしは惜むべきことなり現今僅かに
 堂舎の再建成りたるもわれを假立に過すその舊觀に復するは何れの
 日ならん乎されど今なほ寺域廣濶五万九千四山にそひ溪にまたがり
 老杉古樹蒼鬱として幽靜を極め境内一步をいるれば自ら名刹の區た
 るを知る殊にかの著名なる通天橋は即ち國師の筆なり橋下の溪流を洗玉
 ふいは依然として舊形を存し滿溪の楓樹昔しながらに色をあらため
 す毎歲毎秋紅のふかく染なして兩岸相映照し橋下の水はさながら錦
 繡の浮びながるゝに似たり此地古へより官傳へて東山紅葉第一の勝
 地す實に過稱にあらす

5 c 2 y . c 2 y
net w. st. of m r n j o l



通天橋

頼山陽

橋底停車酒半醺 仰看霜樹亂紛紛
素來卻上玉龍背 踏過一溪紅錦雲

尋ねきて秋の錦をけふとみる柳櫻の春はしらねと 大平

星ならて紅葉のはしの往來かな 信徳

當寺什寶多きが中に尤も世に知られて其名の高きは光殿司の揮毫せ
る涅槃像の大幅なり 三丈九尺横二丈六尺 應永十一年二月十四日
五兩日之を佛殿にかけて 參詣人に縱覽せしむるを以て 貴賤群集す中
島規の詩あり云く

涅槃勝會引都人 爭看光公遺筆真
爲想樂新門外寺 那誰名蹟得相均

又かなじき殿司の畫ける五百羅漢の像五十幅ありて 運筆の巧妙凡筆の企
越の暇風そより 所遺したれば 全幅の中は 其光しく 數倍ししを 授また 深出しく 是も

亦正月五日には僧堂にかけつらねて法事を修す之を羅漢供といふ此
 他にも殿司の筆になれる観音三十三幅達摩一幅聖一國師の像一幅高
 僧の像四十幅十八天部二像蝦蟇鐵拐二幅寒山拾得二幅等あり斯く兆
 殿司の畫けるもの多き故はかれ當寺の大道禪師を師とし應永年中
 西紀千三百東福寺の殿司となりて南明院塔頭寺に住せしに因る殿司は
 九十餘年東福寺の殿司となりて南明院塔頭寺に住せしに因る殿司は
 名にして其師は明光字は吉山と稱す及殿光殿司のはかに○釋迦文珠普賢
 の三幅對道子筆○維摩居士の像之筆○文珠の像一幅寺傳吳道子といへ
 いふも○八相涅槃の像寺傳吳道子といへ是亦疑はし恐くは明畫なら
 釋迦三尊の像立本筆○墨梅二幅補○雲門禪師の像牧溪筆○羅漢十
 六幅寺傳○黃鶴樓竹樓丘陽樓の圖三幅昭筆○瀧見の觀音一幅寺傳金
 ○同上一幅瀧筆○開山國師の像三幅補○伽藍の圖一幅寺傳舟○淵明
 畫傳一卷趙子昂○雪梅松鶴の圖屏風一双益筆○鍍金の塔一基○繡佛
 帖一撰○四天王の木像一願安置す

當寺の東に月輪殿とて藤原兼實の山莊の舊跡あり兼實嘗て愛宕山の北
 造りて之に居る故に月輪右大臣と稱したり今こゝに兼實を祀りて新たに社
 殿をも造營す社北は溪深く水聲潺湲として微かにきこえ他に俗物の
 耳底を汚すことなき靜閑幽趣の好地なり

●泉涌寺伏見街道第一 初めの開基は弘法大師にして法輪寺と號せし
 が文徳帝の御宇に至り齊衡三年西紀八百十六年に左大臣緒嗣これを再建し
 て仙遊寺と改めたり仙人來遊せしより斯は名づけ其後數百の歲月を経て遂
 に荒廢しその寺跡は和州の刺史中原信房の領する所となりをりしを
 彼その歸依の僧俊仍に寄附せしかば俊仍化疏を作りて後鳥羽上皇に
 奏し上皇の厚き降施を得て當寺を中興すそのころ麓に清泉涌出せし
 を以て泉涌寺とまた改稱し爾來天台眞言禪律の四宗を兼學すること
 とはなりぬ信房の寄附せしは顯徳帝の建保年中斯て貞應年中西紀千二百勅
 願の寺となり四條院仁治三年正月九日願正を月輪山莊の我禪坊俊仍の坊に葬送し奉り

その後また後光嚴院應安七年正月を當山に茶毘し奉りしより以降天子御代々の御葬所となり歴朝の帝陵薨々として後山にあり當寺はかゝる由緒もあれば勅物靈寶等その數甚だ多しかつ境内清幽にして殿堂樓閣翠松の間に陰顯し梢頭の清風は俗耳をすまし崖下の靈泉は濁心をきよむ

聞説靈泉涌此中

更沿回磴到琳宮

五陵七厓栖眞處

遺澤尙思松柏風

伊藤長胤

什寶 ○南天大師靈芝律師俊苾律師の三肖像寺傳宋の周丹士筆○涅槃像の大幅堅九丈横二丈人物鳥獸など其大價物に均し涅槃像は全圖○韋駄天の像一幅堅二尺横一尺餘りの小幅○釋迦三尊の圖明兆筆、寺傳に徽宗皇帝の勸進疏一卷、後苾の○牡丹に獅子の据箱一個○詩繪の硯箱二個○補陀海山圖通寶開の扁額唐の玄宗の書○銅の佛器五個○鞘卷紋付の太刀一振

○五獅子の木造如意

○西大谷五條坂の東 眞宗の開山親鸞聖人の廟所なり聖人は龜山院の御宇弘長二年西紀千二百六十二年十一月廿八日に入滅せしを東山の西のふもと鳥部野の南なる延仁寺に火葬しその遺骨を鳥部野の北邊り大谷に納め後文永七年、西紀千二百七十二年また改めて西の方吉水の北邊に墳墓を移し茲に佛閣を建立して影像を安置せしが此地は知恩院山門の北准如上人のとき慶長八年、西紀千六百三年台命によりて現在の地に移す斯てなは舊名を呼んで大谷と稱しまた龍谷山と號す當山は高丘の地にして眺望絶佳なり門前歩をといめて西顧せば洛中洛外一眸にあつまる唐門の前にある池を皎月池と稱し夏日は蓮花池に満ちて清香人衣を撲ち櫻楓翠樹の間に點々して春秋の美觀を呈し冬も亦雪の朝は絶妙なり池上に渡せる石橋を圓通橋と號す俗に目橋といふ其形巖花岡石を壘みなして奇巧を盡しよものにて其名世に高し

にたほおまに
Aishi Otani.



圓通橋、晚涼
宿禰寺 雲 叙

圓通橋上、晚 細々白蓮香、 眞如波底、月 更涌自然、涼
はちすさく池にかけたる玉橋は 竹屋 春 臣

すゝしき國に通ふなりけり
門を入ば境内老樹翁鬱として風景をみに一變し幽邃の趣をなす廟所の北東一町ばかり松杉生茂れる所に聖人の茶毘所あり、この邊り一圓の地を鳥部野といひ茲なる山を鳥部山といふ往昔は無常所なりき舊こゝに延年寺と號する無常院ありて親鸞をこの寺にて茶毘す一延年寺に存す、親鸞茶毘所の邊を稱して今も延年寺社子といふ、鳥部野鳥部山の名は歌にも文にも多く出で無常所として世に知られたり

すゑの露もとの雫も鳥部山 家 際

かくれ先たつ烟なりけり 長 儀

鳥部野の煙のすゑも雲となり

百



雨となりてや袖ぬらすらん
 とりへ山あした棚引かすみこそ

景 樹

◎清水寺 西大谷の東北 松原通の東極 當寺の濫觴は大和國高市郡八多郷小島寺の僧
 延鎮光仁帝の御宇 寶龜九年西紀七百七十八年 靈夢に感じ木津川に沂りその支川の
 水源なる瀑の傍にて異人行叙といふ者にあひしに行叙大悲の像材と
 なすべき靈木を示して東に去る延鎮代てこゝに住すること五年たま
 たま坂上田村丸この山中に獵して延鎮にあひ其大悲の靈告によりて
 此所に來り居ることをさして渴仰の思ひを發し觀音寺を建立して延
 鎮に寄附せしかば延鎮さきに行叙の示したる木材を以て十一面四十
 臂の千手觀音を造りて本尊とすその後桓武帝都を山城國長岡に遷し
 再びまた平安城に遷したまへるとき田村丸に殿舎を賜ひ勅して同國
 愛宕郡八坂郷の現地に觀音堂を造營せしめ給ひければかの千手觀音を

遷して爰に安置し北觀音寺と號し後改めて清水寺と稱し又音羽山と稱す大同元年西紀八に至り平城帝紫宸殿を田村丸に賜ひ之を清水寺に移して伽藍とす造營一年を竣す大此地もと嶮阻にして平坦ならざるを以て伽藍の前面は棧を懸崖に架してその上に置る世これを清水の舞臺と稱す臺上の眺め曠然として京城の萬井脚下にあつまり西南の諸山奇を呈し遠くは淡路島模糊として雲烟の間にあらはる堂の軒には土佐狩野等諸名家の扁額畫馬を多く掲げたる其中尤も高名なるは海北友雪が田村將軍東夷征伐の大扁額なり

登清水大悲閣

龍公美

樹杪峻嶒古佛樓

登臨縱目此中遊

九街春老神州色

匹練雲含鴨水流

初地泉鳴懸石上

諸天花散遍欄頭

到來觀世風塵外

始悟吾生如是浮

名もしるき清みつ寺の夏の月うき世の外に影を涼しき泉冷爲村

おはしまに立よりて見んきよ水の

長廣

うてなにかゝる花のしら雲

とふ人の思案てきけりちるさくら

一滴

奥の千手堂俗に奥の院といふ此所は延鎮僧都の住房の跡にして歿後こゝを其廟堂となし千手觀音の像を安すこの堂も前は棧閣を構へ崖によりて起ち眺望頗るよく風景佳絶なり千手堂の傍らに阿彌陀堂あり瀧山寺往昔法然上人この所にて不斷常行念佛を開く今に退轉せずして修行せり千手堂の崖下に三條の飛泉あり之を音羽の瀧と稱しその名世に知らる

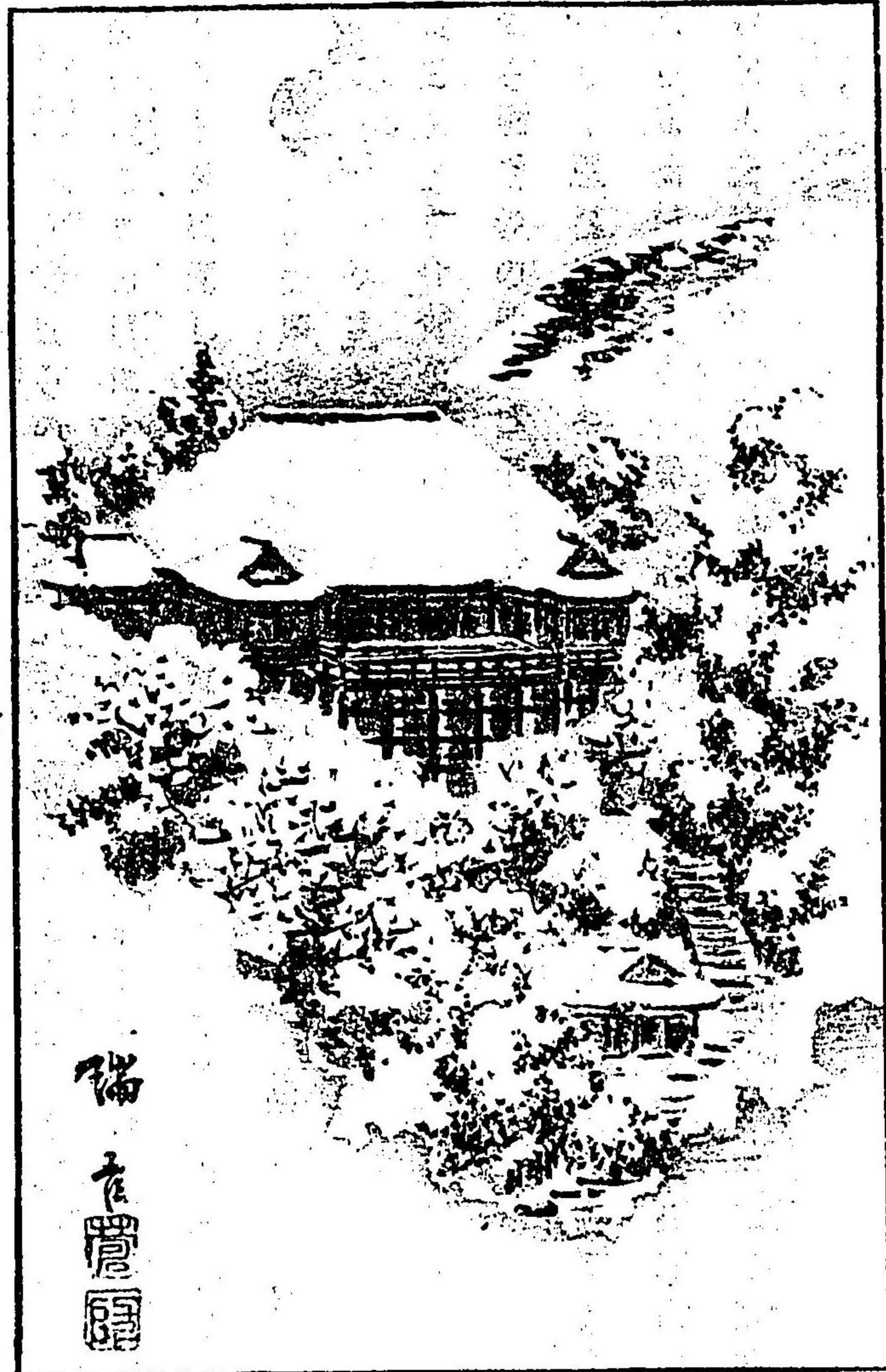
清水の瀧の三すちの白糸をふきくる風そより合せける 景樹

結ふ手のにはふばかりに梢より花やおちくる山陰の瀧 黃中

本堂の後なる北の丘上に地主權現社あり祭神は大己貴命とも云ふ或は田八坂郷の産土神にして臨時は四月九社邊に櫻樹多し其角の發句に「京中

らてづみよき

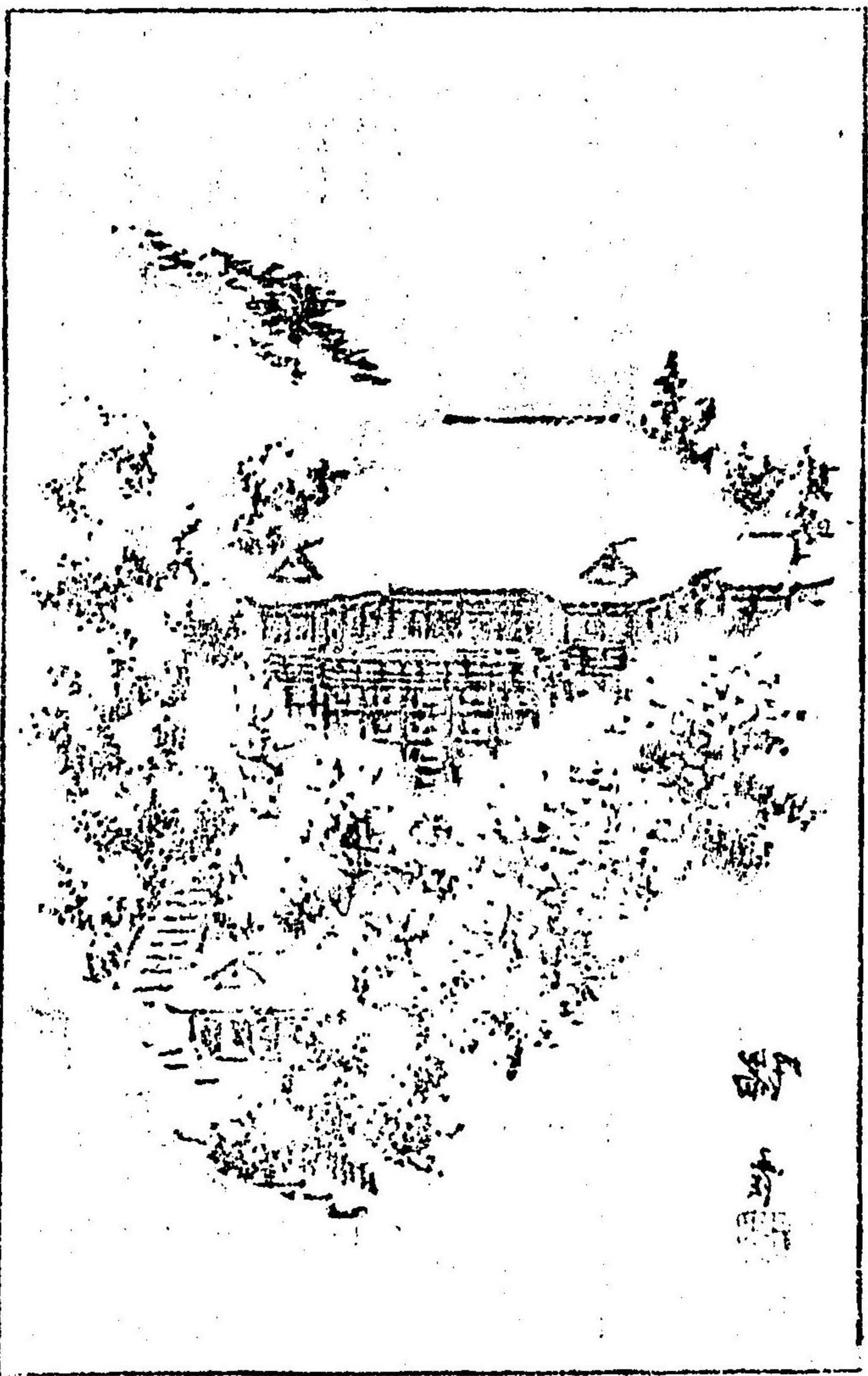
Kinonigudera.



瑞
在
園

へ地主の櫻やとぶ小蝶西門の東に三重塔あり子安塔と稱す桓武帝の
 女御全子の妹村丸出産の月に病惱ありて藥石驗なく大悲に祈誓し病忽
 ち癒て皇子誕生ましししかば叙感ありて此塔を建給ひしによりこ
 の稱ありといふ此はか朝倉堂正貞の建立田村堂所にして古昔の本堂
 叙延領等の像を安置す經堂等なは多かれ然のみは言す惣じて當寺は
 眺望の佳絶のみならず春花秋葉の艶麗また類ひなし櫻花爛漫の候に
 はさながら雲にまがひ其散かふは空にしられぬ雪と見え色に香に醉
 つべき風情なり雪景また極めて佳なり前山後峰玉を屏となし万頃玲
 瓏として銀海を現出するの狀譬ふるにもなし
 音羽の瀧の南邊を歌の中山といふその奥に清閑寺と號する一寺院あ
 り草創は紹繼といふ法師にて延暦廿一年にあり再興は一條院の御宇
 佐伯公行なりといふ本堂の北一町ばかりの山中に高倉帝の陵石塔あり
 りてその傍に楓樹を植たり平家物語に仕丁が御愛樹の紅葉を折擣しを怒

百四



なる因かもし又御塔の左傍に小督の塔あり小督は櫻町中納言の女に季定といふ者入道清盛の命を受け當寺に奉てきたり姿を替せて尼とす

盛衰記に云院高倉帝深く思召出したるときは只御體とて夜の御殿へ入らせ給ひけり小督局の心ならず尼になされたる所なれば御なつかしく思召けるにや朕をば必ず清閑寺へ送り納めよと御遺言あるこそ御愛執の罪とは云ながら哀れなれ

はとゞぎす今宵なく音を高倉の 蒼生雄

みさゝき近く聞えわくらん

紅葉見紅葉見は清閑寺にまかりける時小督の局のはかにて 忠秋

もみち葉は悲しき陰にかくれけん昔のさがもおもはゆるかな
 六條院の陵もこの邊にあるべきなれど所在詳かならず明月記に云清閑寺の堂なり御當寺はその名に背かず清閑にして幽静なり翠竹涼を生じて夏に宜しく丹楓錦をかけて秋に宜し

紅葉ちりて竹のなかなる清閑寺

蘭 更

◎清水坂陶器清水寺門前の通衝清水坂および五條坂は陶器に名高き地にてその道すぢの兩側とも大半は陶器を興ぐる家なり世これを稱するに交も通して清水焼とも五條坂焼物ともいふその始は多く抹茶煎茶の器にとまりしが年経るに隨ひ各種の物品を製造し新奇の工風日に月に加はり弘く内外諸國の需要に應じ京都物産の聲價を揚るに至る

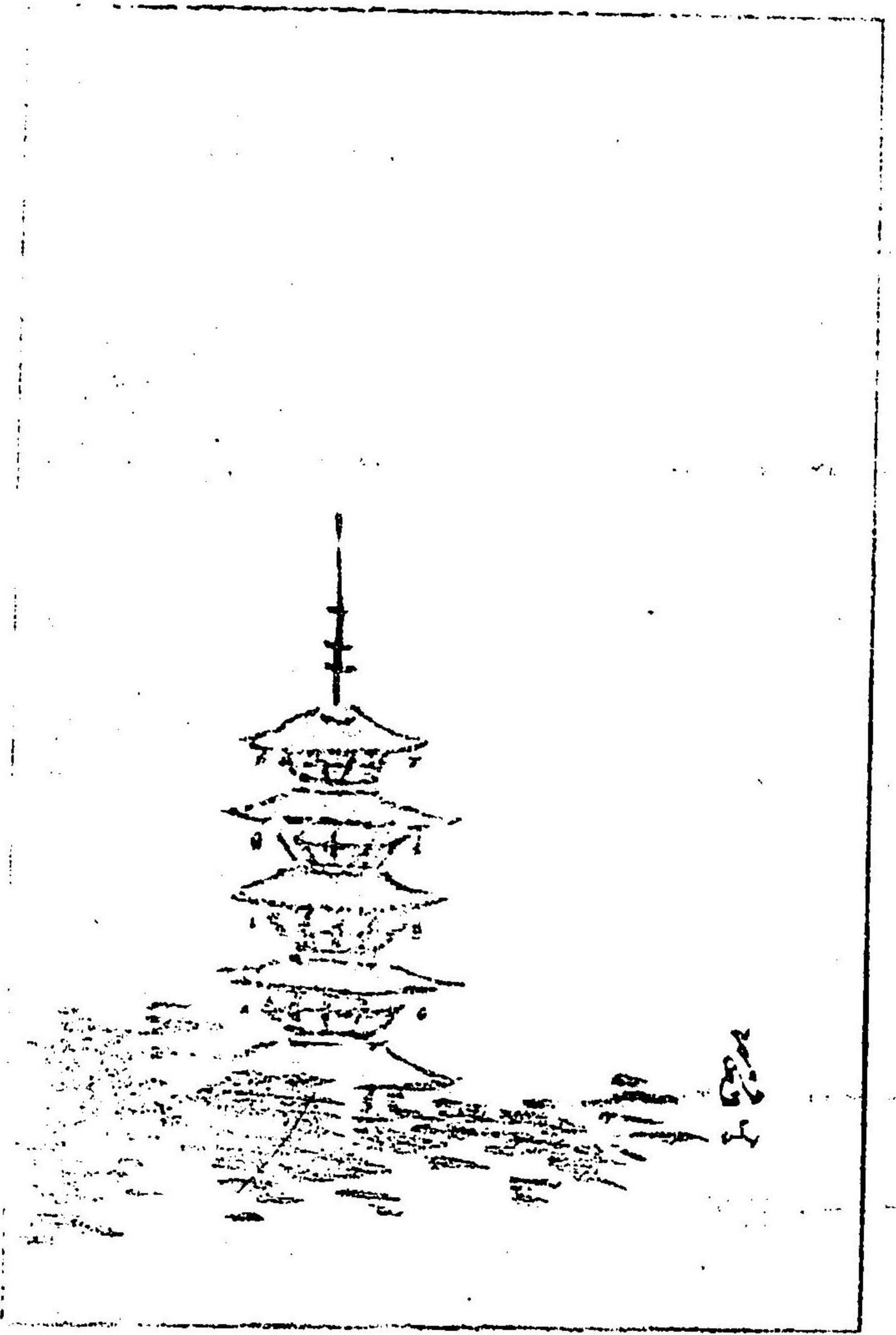
附清水燒略史 清水燒の濫觴をたづぬるに寛永十八年西紀千六百四十二年ころ惣左衛門と稱する者城州愛宕郡清閑寺村領字丸山後代茶盤坂と稱せしとぞに住居して陶器を燒きはじめ其子孫九代相續せしが終にその家業微して所有の窯を文政二年西紀千八百十九年大佛境内鐘鐺町丸屋佐兵衛に譲りその居宅の裏へ窯を移し弘化四年西紀千八百四十七年に至りまた同町丸屋卯兵衛に之を傳へたれど此窯は清水五條燒物窯の元祖なるを

以て窯元と稱し他にも當時すでに窯持人増加して多かりしがみな窯元とは稱せざりしといふ然る名工として世に知られたるは仁清なりき仁清は丹波國野々村の産にて寛文の頃西紀千六百六十七年一は西紀千六百二三十年或書に仁清の列は宗和の筆といふ宗和は茶人に明暦二年に卒したれば寛文には既に世にをらす仁清の判果して宗和の筆永ならんには寛御菩薩池山城國の邊に來り好みて茶器の類を燒き此地屬し物には御菩薩又は其後御室山城國富野郡仁和寺門前の堅町へ移りて製陶しこの時より仁清の名を用ふ御室より仁和寺の仁字を賜はり其名を清村播磨大條藤原正樹入道仁清と記せし者ありとぞ斯て晩年にいたり又清水坂に移住す初代仁清の後四五代相續して御室に住せしよし或書に其陶法を傳受せし者一人ならんか或は後に是より清水陶器に一新時期をひらき清水燒の名世にあらはれ其製品も亦茶器のみに止らず皿鉢井の類にまで及ぶ茶器のみにて外の世用の器に燒すも云り爰に住たりしが寶曆年間西紀千七百十餘年清水に移りて磁器を製す仁清の乘

し者か又は別に一家を起 爾來製陶の術いよゝゝ進み文化年間百餘年代
 に至りて高橋道八和氣龜亭水越與兵衛などいふ者肥前有田の製法
 をまなび得て青花磁器を造る 肥前有田にては慶長三年(西紀千五百九
 十八年)朝鮮の歸化人李參平、磁器を創製
 した正保寛文の頃には愈
 よ進歩して精巧を極む 當時おはくは指頭を以て造りて模型を用ゐ
 ず之を畫かく所の畫甚だ巧なり其後續きて良工輩出し磁器を專と
 する者には幹山傳七丸屋佐兵衛龜屋文平等にして瓷器を兼て製す
 る者には第二世高橋道八、第二世和氣龜亭清水七兵衛清水六兵衛清
 風與兵衛眞清水藏六等いづれも著名なる者なり 以上の良工に次て宮
 田龜壽、長谷川寅助な
 る 而して仁清は其施釉堅實にして淺黄色の地磁に青緑の着
 色を被らしめ之に金色を加へ、道八、龜亭、與兵衛等の製する所のもの
 は白色の地磁に單純なる青畫を施す往々着色畫を描することす
 れども遠く青華には及ばず其中幹山のみは永樂風の赤畫描金を善
 くす 永樂は文化(西紀千八百餘年)のころ支那永樂年間製の金、銀、銅、鐵、錫、鉛、鋳、造、る、磁、器、に、木、づ、き、て、赤、色、釉、に、金、粉、を、以、て、古、代、の、彩、紋、を、描、け、る、一、種、新、様、

の精妙美麗なる磁器を製 藏六清風道八等の家は五條坂の方にありし
 出して世に寶譽を得たり 藏六清風道八等の家は五條坂の方にありし
 と雖もすべて皆これを清水焼と稱し粟田焼と相並びて名聲あり其
 業寛文年間に發達の端をひらき製造の盛なるに及では時に濫造の
 弊なき能はず且は後世の製品その精妙雅致むかしの良工の作に及
 ばざる所ありと雖も技巧大にすゝみ明治の今日に至ては前代見ざ
 る所の大小各種の新様を焼出して日に月に隆盛を致せり

◎八坂の塔 清水寺の西北、高
 坂といふ故は、詛園坂、長樂寺坂、下河原坂、法觀寺坂、壘と號し推古天皇の御宇
 山坂、三年坂、山の井坂、清水坂の八の坂あるに因る 靈光山法觀寺 一には八坂寺と稱す、其八坂
 西紀五百九 聖徳太子の創建したまふ所の古刹なるが星移り物變りい
 十餘年代 つしか殿堂伽藍は廢亡し五重の寶塔のみは今に昔をおもはせて屹然
 雲霄に聳ゆ、然る最初のものに失て建久三年(西紀千二百九十二年)に右大將頼
 朝これを再建し正應四年(西紀千二百一十一年)に圓成禪定尼 北條貞三、個所を造
 營修補し千の時附す 若 曆應元年(西紀千三百一十八年)に足利尊氏また修營し
 氏傳



り建仁寺に嗣して臨濟となれり佛殿唐門形を以て營む方丈征伐の
 はき野陣の祝慶慶に設けし殿舎を移す中間客殿の畫は狩野永徳土佐光信
 物組天井唐戸殿障子小方丈及び古法眼の風吹柳の畫は親王のかみせ給へる額
 き開山堂朝鮮征伐軍艦の天井を以て張る天井等立列りて善美を盡し
 が嘗て回祿の災に罹り其多くは灰燼となり今僅かに昔の浪殘をとい
 ひるぞ惜き臥龍と號する廊階を登りて小高き所に秀吉及び政所の靈
 舎あり屋形花帽の政所の像を安置し後關成帝の宸筆なる豊國大明神の額
 かをい又その東の山上に時雨茶屋ならびに傘茶亭ありニッとも伏水城し
 の好茶は千利休いづれも世にさこねて名高きものなり中島規の詩に云
 く

英雄猶未免情痴
 更思海外取鮮夷
 傘様第亭容膝時
 畢竟優遊何耐狭

當寺は古より萩の名所にして秋にいたればその花疎松の間に咲亂れ

て恰も翠蓋の下に錦をしきなせるに似たり櫻の大樹數株ありて春花の艶色もなかく佳し

豊國夫人遊有時

白櫻花後紫胡枝

龍圖韻事餘恩賜

名在高臺成寺遺

合離

都人けふもとひ來とあき萩の

蒼生雄

花のむしろをしきて待かな

名も高さつもの臺やはさの花

來葉

什寶 ○西湖の圖後陽成帝の御筆 ○釋迦と五祖六祖の像三幅對後陽成帝の御筆 ○達磨の像古瀨長老の贊 ○十六羅漢十六幅師月大 ○出山の釋迦北殿 ○孔雀と鶴雙幅林真 ○琴棋の圖二幅然 ○菅公の像寺傳自筆 ○觀世音と龍虎三幅對 ○童子の圖一幅 ○秀吉の書翰小田原陣中 ○薛繪の爐椽同角盥同手拭掛同双六盤 ○沈金彫の食臺 ○籠甲張の卓子朝鮮 ○推

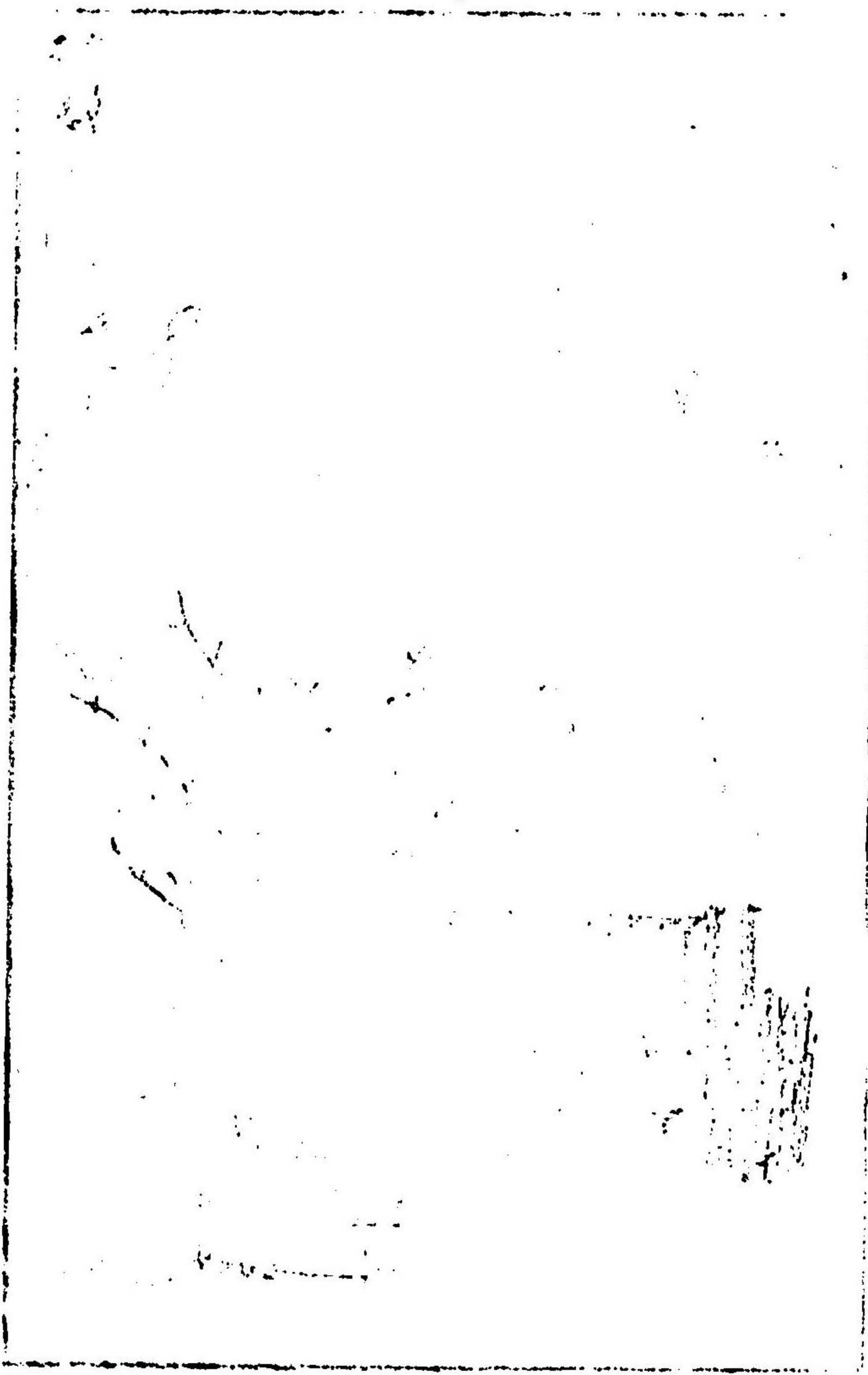
黒の机 ○唐銅獅子の香爐 ○唐銅龍の花瓶 ○唐銅の罽 ○大和錦の模枕

○薛繪の厨子盛合の中 ○銅象眼梵字の香爐 ○梨子地膳櫛三組 ○黒漆螺鈿の硯箱一個 ○綴錦の陣羽織秀吉の用品 ○秀吉の書一幅

●双林寺高蓋寺の北東 金玉山と號し無量壽院と稱す、また雙樹林寺と稱するを累して雙林寺といふ、延暦年中桓武帝の御願にて傳教大師の開基に係り、そのうち鳥羽帝も厚く御歸依まし、皇女綾御前女綾王宮と稱す、双林寺をこゝに居る、土御門帝の御子靜仁親王亦こゝに住職したまひて由緒おほき寺なるが、中世兵燹にかゝりて堂塔灰土となりしを文和西和千三百のころ國阿上人再興して念佛の一家をたて終に國阿派の本山となる昔は天台なりしが、此より時宗に改れり、後柏原帝當宗に御歸依ありて宸翰を染させられ、中興開山の緣起を賜ふ、當寺第一の寶物たり、また嘗て豊大閭この寺の花を愛て花の制札を前田玄以にか

かせて時の住職彌阿彌に予ふ、その文に云く、當寺山林竹木不可伐、採次花折取事堅令停止之畢仍如件、天正十四年三月五日、民部卿法印玄以

勝覽第二日



とて西行 頼阿の塔 西行塔と阿所にあり、頼阿は小野大納言能實の裔に
 其基に相謀り、好浄、辨慶、正盛と相並びて和歌、四天王を稱せしむる、貞治の
 又その著書に、井蛙抄あり、四家集に、三月の草庵集あり、元等みな當寺の境内にあり、
 中元年(西紀千三百八十四年)三月の草庵集あり、元等みな當寺の境内にあり、
 また當寺門前の南側に芭蕉堂あり、芭蕉は松尾忠房と稱す、芭蕉も亦その號なり、
 聲に俳諧を好み、北村季吟に學び、多し、元禄七年(西紀千七百一十四年)大阪にて名
 譽大に鳴り、來て樂を受る者甚だ多し、其の奥妙を極め、自ら一機軸を出して、
 作す、芭蕉管て西行が東山阿彌陀坊上人の庵にて、堂を營みしなるべし、而して
 安蕉の門人五老井許といふ芭蕉の愛せし樹を以て彫刻せしる、芭蕉の像を授け、
 此千屋朝陽九起の住居に、嗣て更の日後も芭蕉の句より名づけし、稱なるべし、
 此名を無くし、字を貸成、道といひ、號を假、撫、また九段、或は三岳、及び大雅、堂などいふ、
 五年(西紀千七百七十六年)四月、葛原の草庵に、死す、後門人等、其跡を空うせ、
 此を、歎き、七日、木下長、庵子の、山に、建、ま、し、歌、仙、堂、の、額、破、し、て、柱、礎、な、う、せ、
 跡を、と、め、し、を、請、求、め、之、を、基、と、遺、さ、ん、が、在、の、地、に、軒、の、瓦、に、大、雅、堂、の、篆、印、を、記、し、
 骨、は、舟、岡、山、の、南、なる、淨、光、寺、に、葬、り、ま、こ、に、墓、碑、を、建、つ、て、其、友、大、典、禪、師、の、大、撰、文、の、遺、
 の、し、て、高、美、容、あり、是、等、は、その、人の、強、ち、當、寺、に、縁、故、あり、し、に、は、わ、ら、ざ、れ

風雅の因みによりて設けられたる者なり
當寺の傍らに阿彌陀房上人の庵ありしなれど今は廢してその趾さだ
かならず、たい西行の歌と芭蕉の句とのみ今日に遺れり

古へころ東山にありて坊を申しける上人の
菴室にまかりて見けるに哀とおぼええてよみける 西行

柴の庵とさくは賤しき名なれども世にこのもしき住ひなりけり

此うたは東山に住ける僧をたづね西行のよませたまふよし山家
集にのせられたりいかなる住ひにやと先其坊なつかしければ

しばの戸の月やそのまゝ阿彌陀坊

はせを

雙林寺吊古

巖垣彦明

雨後、春流漲碧溪

過橋夜景正凄々

漂零鬼界悲歡異

欣慕鶴林時日齊

苔補敗簷無月漏

花攀古冢有禽樓

一聲寒磬知何處

雙樹澹雲色相迷

花もみち夏のこすゑもはかに似す

宣長

ならふ林のふる寺の庭

西行頼阿などのこも思ひ出られけるに
かたへなる流れを菊の谷といふも聞けは

同

いにしへの人に契りを結ひみん住ける跡とさくのたに水

西行上人すみ侍ける雙林寺といふ所に
庵むすびてよめる

冷泉爲村

あどよめてみぬ世の春をしのふかなそのささらさの花の下陰

◎靈山 雙林寺の東に在り高

靈鷲山を略言せるにて一に鷲尾山ともい

ふ舊はこゝに靈鷲山正法寺と稱する寺院ありき 開基傳教大師莊嚴な

る佛閣山上にたかく煌きたりしといへど今は荒廢し近時は招魂場と

なり憂國殉難および勤王戦死者の靈を祀る明治九年十月創めて招魂

祭を營み爾來年ごとに盛なる祭典を行へり又こゝに表忠の銅碑あり

明治維新の功臣木戸孝允の墓あり、當山は眺望頗るよく古へより花に

雪に人皆この地のながめを嘆美せり

文永元年の春わしの見侍りしに
花をしのかびて見侍りしに

太上天皇

なつかしき香にこそ匂へ袖ふれし代々の昔のはなの下風

きやうけい
うけい

靈山春望

鷲峰樓閣倚晴空
五色雲中花似海

楚客登臨作賦雄
長安十萬戶春風

清 絢

雪のあし
靈山にて

渡 忠 秋

けさみれば柳さくらもうつもれて雪こそ花の都なりけれ

◎東大谷北に隣る 大谷の稱は既に西大谷の條に述しどく親鸞の遺骨を最初に納めし地の名なるを後にその廟所を建たる地に名けしものにて爰も亦然り此所なるは元祿年中西紀千六百九十餘年に造營せる親鸞の廟なりその東本願寺に屬するが故に世人大谷の上に東の字を加へ以て西大谷と別つその殿堂樓閣燦爛として翠松綠樹の間にあらはれ又やよひの頃に及べば暄風花をふらし眞に現世の淨土とやいはまし是また東山の佳境たり

◎圓山八坂神社の北に隣る 往昔こゝに圓山安養寺と稱する寺院ありしが

故に今もなほ此名を存す安養寺の明神は傳教大師に於て山門の別院なりして住持し其後また國河法師當山を讓受け爾後天台を時宗にかへ勝興正阿闍長壽庵左阿闍花洛庵重阿闍端之寮とも云ふ多福庵也阿闍延壽庵連阿闍多藏庵源阿闍等多は行酒軒庵を有せしが後世京師第一の遊樂地にして有名なる旅亭割烹店洋料理及び料理には正阿闍左阿闍文阿闍等あり西こゝかしこに景勝を占め綠樹芳草四時の美をそなへ花に紅葉に雪に一年みながらら眺めつくることなし加旅ちかごろ爰に鑛泉浴場をひらきたれば炎夏には一浴して苦熱をわすれ玄冬には浴室のうち常に寒をしらす浴後欄に凭りて一望すれば京城の萬井目中にあつまり西南の諸山奇を呈し笑を獻じ以て心目を娛ましむ明治六年の創開にして浴室客房浴室客の爲に設たる宿舎あり

一どほり夕日に晴てめに近き山より高きをちの川水 逍遙院
自將鐘磬換笙歌 精舍隨緣迂綺羅 半夜人歸芳樹月
衣香巾影拂蹊多 畫餅居士

自註して云く圓山、敷院古昔皆屬延曆寺、中世紛亂別立宗門、昇平
二百年、竟化、成繁華行樂之域、云々住僧又貯妻孥、理酒肉、以譙客爲
事業、香火經梵、蔑然如不覺知者、

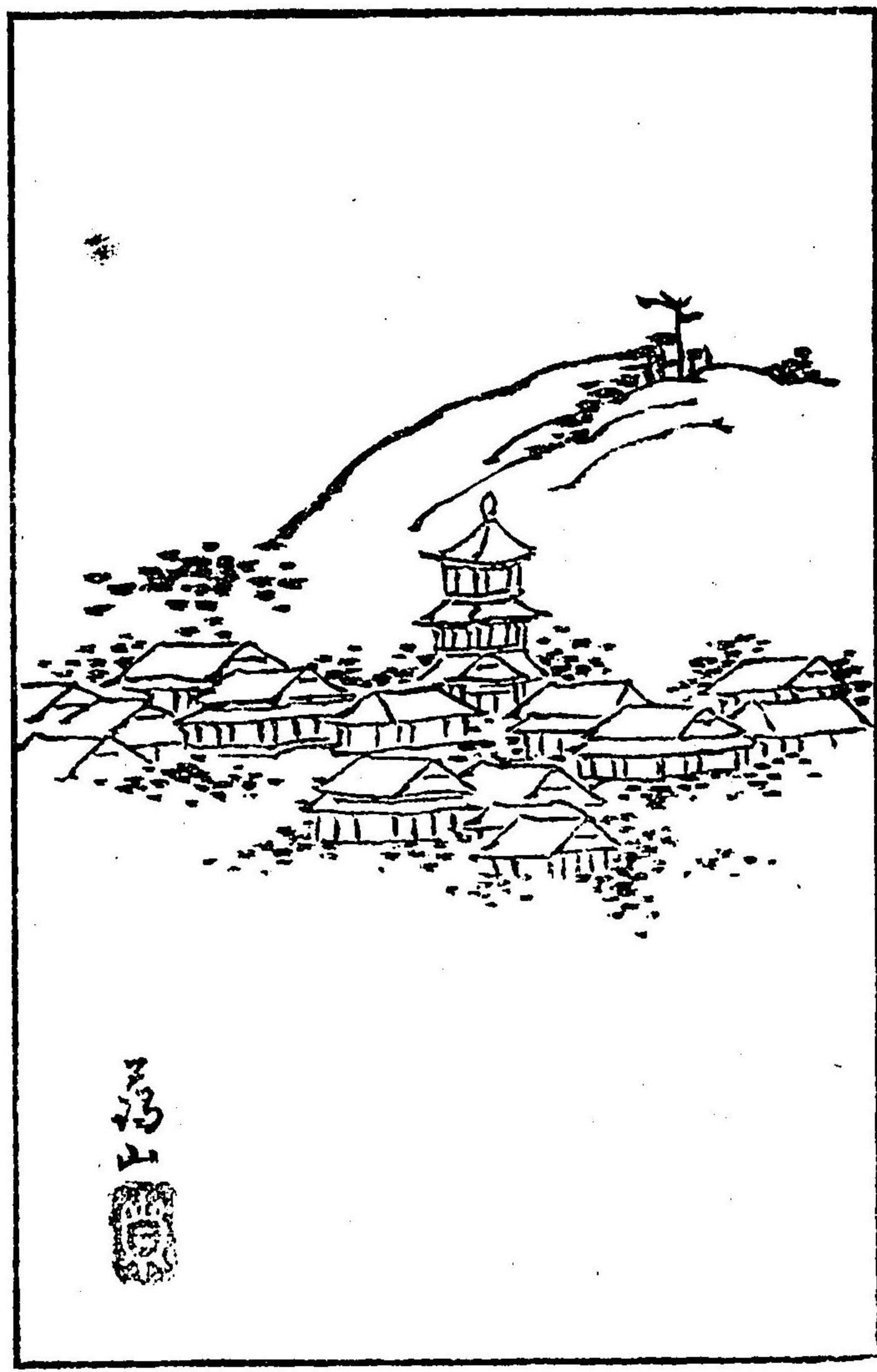
圓山の南に隣りて長樂寺と稱する古刹あり、開基は傳教大師にして延
曆年中の創建なり、この所の地景、唐土の長樂精舎に相似たるを以て長
樂寺と號く、そのうち年月を経て頽廢せしを國阿上人中興して、時宗に
改む、文治元年、西紀千五百、建禮門院、平相國清盛の女にして、高倉帝の后なり、安
光院に開樓したまふ御落飾のとき、當寺の印誓上人を戒師とし、たまひ御
布施に先帝、安德帝なり、即ち建の御直衣を賜りしを上人この御直衣にて
十六流の幢を作りて、菩提を吊ひ奉る、之を安德帝御衣幢とて、當寺の什
寶たり、藤壘が詩に云く

壽永戦争、歲 西巡遂不歸、 法幢黃楹、色 留看、舊龍衣

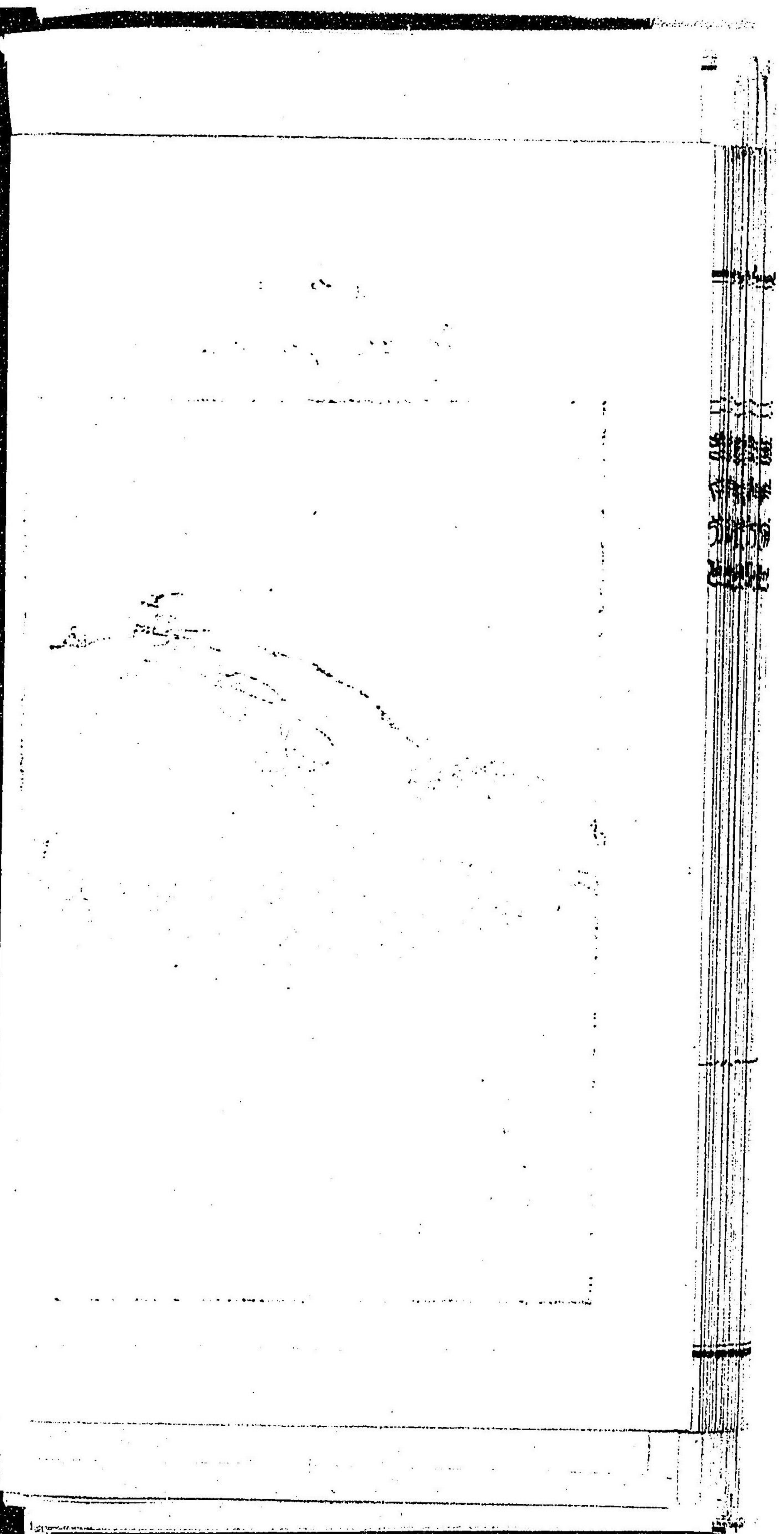
當山は洛東の中にも風景殊に勝れたれば、古人の詩歌甚だおほし

まゆるま

Ma ru ya ma.



圓山



長樂寺にて故郷霞といふ心をよみ侍ける 大江嘉言

山たかみ都の春をみわたせばたゞ一むらの霞なりけり

山亞花梢花亞山 相隣石陞不嫌難 試看紫闕金城景

畫餅居士

境内の北なる山上に頼山陽の墓あり山陽は號にして名は嘉字は子成通稱

れも稱す蘇州の瀟湘樓春水の男なり文章を著くし史事に精し名聲風行はれたるに及んで日本外史にして止まざりきといふ天保三年千八百三十二年九月廿三日卒は遊學年五十三山花島に春琴居士の碑あり春琴は號にして氏は浦上名は選字の友たるを以て五月二日歿す碑銘は條崎翁の撰する所なり春琴は山陽を方外

將軍塚長樂寺の後傳へいふ延暦十三年長岡の京より此京に遷り給へ

るとき桓武帝この地を御覽せられ斯の如き勝地なしとて殊に執し思召し皇法絶ざる限りは末代まで此京を外へ移すべからずと勅制し土にて八尺の人形を造り鐵の鎧冑をさせ鐵の弓箭をもたせて永く王城

大極殿

を守れと言含め東山の頂きに西向に立て埋めたまふ將軍塚これなり
とど塚上凹形にして老松四五樹あり一望豁然として風景の美なるが
中におのづから雄大の氣象あらはる

桓武相、俊年 神甲鎮、皇州 鬱彼、一丘、松 萬古復千秋
不同白帝子 金人適、鑄、仇 祇園、瑜

京都勝覽第三日 東都なる大極殿に始まり北

◎大極殿南禪寺の西、碓氷 明治廿八年の平安京遷都千百年祭につき紀
念のため建設する所にして専ら延曆の制を摸したれば碧瓦朱楹煥然
として當時の壯麗を追懐せしむ

附 大極殿由來 桓武天皇は光仁帝の御子にましくて御母は皇太夫
人高野新笠大政大臣乙女なり、天皇剛毅英明の資を以て光仁帝の後を承
け能くその志を嗣ぎ精を勵まし治を圖り平安遷都と東夷征伐との
二大事業を成し以て帝業を恢弘し邦基を鞏固にし給ふ、その平安京

經營のとき殊に叙慮を用ゐさせ給ひしものは大極殿なりき、大極殿
は朝堂院中政と云ふの正殿の名にして或は最大殿ともいひ天子臨
朝、即位、諸司告朔の所にしあれば百官萬民の仰ぐところなり、百王不
易の都たらしめんと思し建られし平安京の朝堂院の正殿ならんは
は深く叙慮を之に用ゐさせ給へるも當然とこそ推察らるれ、その構
造の式様を窺ひ奉るに南面なる外門を應天門と稱し三間五、その
東に栖鳳樓方四、その西に翔鸞樓方四あり、應天門を入れれば東西に朝
集堂あり各九、次に内門あり之を會昌門といふ、その中に康樂、暉章、明
禮、承光、含章、昌福以上、永寧、修式、延祿、顯章、含嘉、延久以上の十二堂、東西
に分れて正殿の前にあり、爰にまた高欄を附したる登橋あり、この橋
階をのぼりて進めば乃ち大極殿なり、その東西に廊ありて龍尾道と
號く、この龍尾道の端に樓あり各八間多し、上東なるを蒼龍樓と稱
し西なるを白虎樓と稱す、大極殿の北に並びて後房あり小安殿とい

ふ七四この他なは記すべきこと多かれを餘は大内裡圖に譲りてこ
 には言ずさて大極殿の濫觴をたづぬるに皇極帝の御宇西紀六年
 大安殿を唐制に倣ひて造營し殿内に磬砌を敷き其名を書するに大
 極の字を用ゐたまふ然と當時なは大極殿を音にて呼すして古へよ
 り稱來れるがまゝにオホヤスミドノと訓り但し大安殿は神武帝以
 降代々天皇の朝政を聽給ふ所なり殿に大極の號を附すること支那
 にては魏明帝の時西紀二百三十九年昭陽大極殿を起しに始まり爾來唐に
 至るまで代々大極殿を正殿の名とす隋の文帝新都に入りその城を大
此は文帝繼に大典郡より隋公に封せられたるに由る然と唐の高斯るが故
祖武徳元年西紀六百十八年大典殿を改てまた大極殿となせり
 に太極の字を天皇の朝政を聽召す大安殿に當用ゐしなるが最初は
 さすがに字音にては呼さりけるを何れの頃よりかオホヤスミドノ
 とは言でダイヨクテンと字音に呼ふことゝはなりぬ想ふにその字
 音讀は延曆の頃より以降なるべし平安京となりては皇城の諸門諸

殿なごに殊に多く唐風の稱號あらはれ日華門、月華門、紫宸殿、同じ宣命
 にも大極殿の字載せられて音讀せしと思はるればなり桓武天皇の
大極殿は清和帝の貞觀十八年西紀八百七十六年四月十日夜炎上し延て
小安殿若龍白虎の兩樓及び延休堂まで燒く此時柏原山陵桓武帝の陵に告
げ給へる宣命に大爰にその宣命の文を抄出して一はこのころ字音に
稱せしと思はるゝ證とし一は當時の大極殿はいかに壯麗なりしか
 その狀況を想はしめんとす
 前去月十日大極殿爾火災乃事在天東西乃兩樓并爾廊百餘間一時
爾燒盡爾太傳開賜波此宮乃掛毛久畏殿天皇朝廷乃營作其之賜天萬代
爾傳賜留宮利就中爾大極殿波殊爾御意留賜天妙爾麗久造飾賜天國
 乃面止之百官萬民乃仰久處止定賜留殿介利云々
 摸倣大極殿

○平安神宮大極殿の北に在り當宮も亦遷都紀念祭に際し桓武帝の御威徳を永

く世に仰思せしめんとして爰にその神靈を崇祀して社殿を營めるなり、朝廷これに平安神宮の號を賜ふ社殿は明治廿七年に起工し構造は白木造りにして淨潔嚴肅かのづから人をして畏敬の念を生せしむ

すめらさの惠の風はふきたえす千とせの今もなひく民草

●熊野神社 下岡崎町、一の島居は丸 後白河上皇の勅願により熊野新宮を勸請せし所にして創建のときは熊野の土沙を運びて宮殿の地を築き熊野の樹木花草を移して境内に植る宮殿には金沙を鏤め樓門廻廊榎舎經堂等巍々たりしが應仁の兵革に悉く焦土となり爾後社殿再興せられしと雖も昔時の什が一にも及ばず今はたゞ僅かにその形式を存するのみなり

●聖護院 熊野神社の北、聖 開基は智證大師にして常光院と號せしが寛治年中 西紀千八九三井寺の聖護院増譽僧正當院に住職せしより聖護院と改稱す、増譽は權大納言經輔卿の息にして始めて熊野三山の別當職

となる中頃より法親王こゝに住職したまひしが此故によりて代々三井の長吏熊野三山の別當たり門主は即ち修驗道を兼て山伏を管領したまへり

因に云、山伏に天台眞言の二流あり、天台は當聖護院に屬して之を本山と稱し、眞言は醍醐三寶院に屬して之を當山と稱したり

●高等女學校 太土町丸 明治五年四月始めて業を開き華士族の子女に英語及び和洋女紅を授け尋で一般人民の入學を許し稱して新英學校及び女紅場と呼しが其後數回の沿革を経て明治廿年一月に至り高等女學校と改稱して高等普通學を授け別に隨意科として茶儀、插花、絃歌の三科を置けり

●療病院 河原町 明治三四年のころ横村京都府知事の創意により府民の健康を保ち窮民の疾苦を救助する目的を以て療病院を設立せんとし弘く慈善家の寄附を募りしに府下の醫師大村達齋、新宮涼民、前田松

閣等創立費を寄附せしを始めとし諸有志者より寄附せし金員頗る多
くして數萬圓に達せしかば明治五年十一月一日粟田口青蓮院を以て
假療病院とす其後幾多の星霜を經へた沿革を歴て遂に現在の地に新
築せられ府立療病院となれり又その傍らに醫學校を設けて之に附屬
せしめ以て醫生を養成す

●梨木神社 寺町殿小 路に在り 贈右大臣三條實萬卿を祀る、實萬卿は三條内大臣
實美卿の父にして勤王之志篤く光格孝明の二朝に歴仕し嘉永六年外
艦の渡來以降公武の乖離せるを憂ひ百方その調和を圖りしが孝明帝
の御時攘夷の勅書を水戸に下賜せられしより幕府の忌憚する所とな
り遂に一乗寺村に閑居して落飾し安政六年西紀千八百五十九年五月薨去す近
年に至り社殿を創建して永くその功績を表頌せり

●師範學校 寺町通、廣小路下る 創設は明治九年五月にして始めは中筋町舊准
后里御殿を假に校舍に充てしがその後舊中學構内に新築して之に移

り、後また現在の所に轉じ校舍も完備し規則も整頓して男女生徒に小
學教員たるに必要の學科を教へ附屬小學校を置て實地を習練せしむ
●下御靈 寺町通り丸太町の南にあり 上御靈と共に祭神を同うし早良親王伊豫親王
藤原夫人文太夫橋逸勢藤原廣嗣吉備大臣火雷神の八靈を祀る、下は仁
明天皇の御宇 西紀八百四十年前後に鎮座せしめ上は朱雀天皇の天慶二年 西紀
九三年に勸請す

因に云、早良親王は光仁帝の御子にして桓武帝の弟なり、天應元年太
子に立られ給ひしが故ありて廢せられ遂に淡路に流され、途次食を
斷て死す、後にその靈崇りをなせりとて證して崇道天皇と稱し以て
その怨靈を慰む○伊豫親王は桓武帝の皇子なりしが謀反によりて
其母藤原夫人吉子と共に捕へられ藥を服して死せり○文太夫とは
文屋宮田丸のことにて是も承和十年 承和は仁明帝の年號にしてその
十年は西紀千五百三年に當るの
謀反の企露顯して伊豆に流さる○橋逸勢も亦宮田丸と同時代の人

にて太子恒貞親王の事に坐して伊豆に流さる。○廣嗣は藤原宇合の子なり、上表して奸僧玄昉を除かんとして成す遂に筑紫にて兵を擧げ官軍に生捕れて誅に服す。○吉備大臣は久しく唐に留學し博學を以て聞え神護二年西紀七百六十六年右大臣に任ず。○火雷神は菅原道真を稱するなりといふ、吉備大臣を除くの他はみな非命怨恨に斃れし者なるが故にその崇を懼れ亡靈を慰て災禍を免れんために斯は祭祀せるものなり、然るに學識を以て卑賤より異數の高官にさへ陞りし吉備眞備を此中に加へたるは如何なる故にや訝かし。

◎美術學校丸太町寺町 舊は京都府立畫學校と稱し明治十三年七月准后里御殿を假校として開業し専ら西洋畫を教授す其後河原町二條或は花頂山麓通照院等に轉移し明治廿四年に至り美術學校と改稱し繪畫工藝圖案の三科を置きて諸規則を改正増補し同廿五年七月御苑内の東南即ち現今の地に校舍を新築し翌年工成て移り次第にその業を

廣め更に彫刻科をも加へ又豫備科を設け校名を改めて美術工藝學校とせり。

◎京都博覽會場丸太町御苑内 當會は明治四年三月皇居の空殿に於て開設せられしを以て始とし其後これを大宮御所に移し同十四年に至り更に會場を今の地に築造して毎年三月一日に開會し六月八日に閉會するを例とす、開會中は京都諸名工の妙技一場にあつまり繪畫彫刻陶器漆器織物繡物金銀銅器その他萬種の物品みな此中にありて人の需要を充し燦爛たるその美は人をして眼目まばゆからしむ。

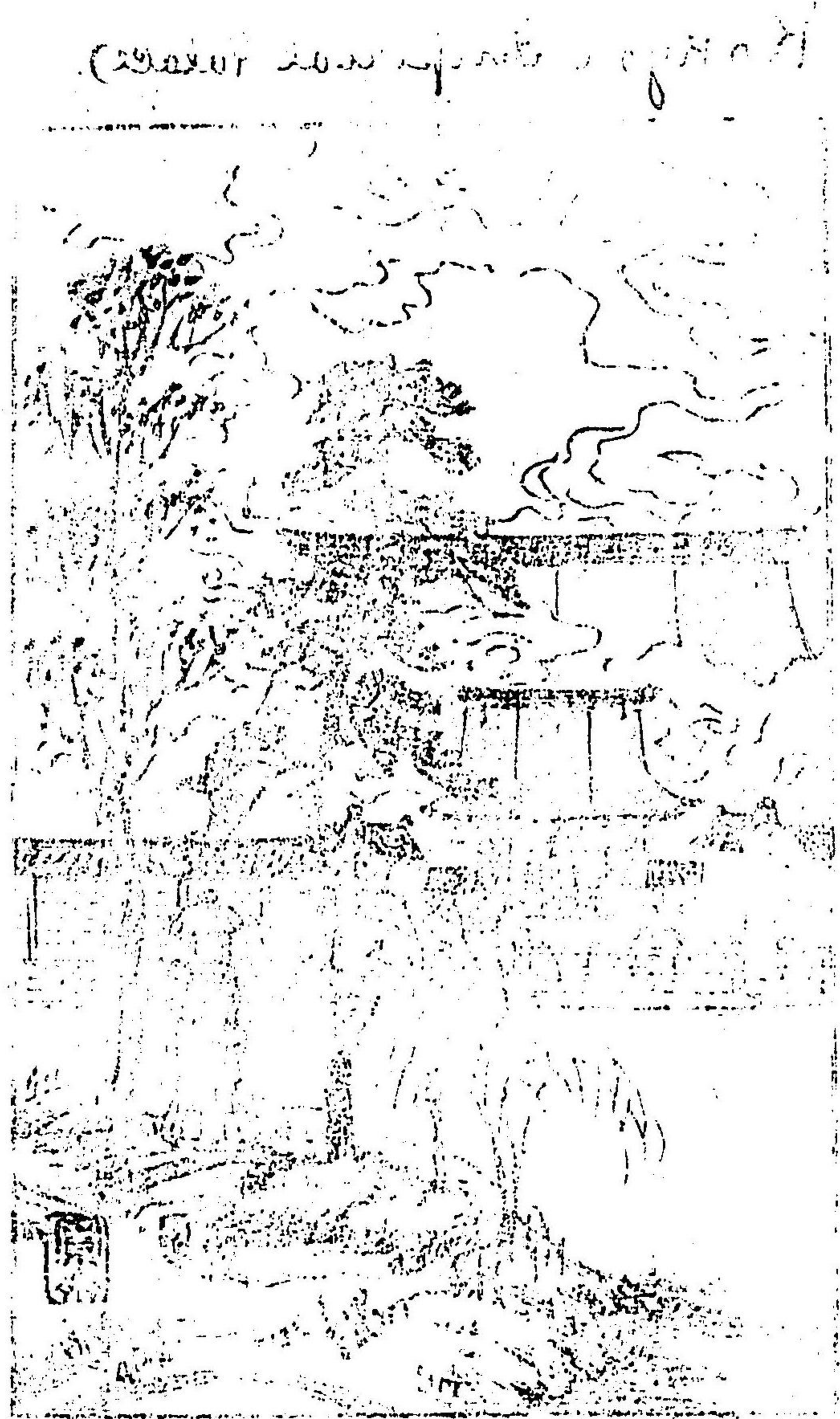
◎仙洞御所皇宮の東 舊は上皇の宸居なりしが安政元年西紀千八百四十四年四月炎上せし後は造營なし、然る林泉は今なほ存して幽鳥老樹に鳴き錦鱗清波に戯れ怪石苔むして千古の色あり紅塵の街を去る數歩にして立刻仙境に入しかと疑はる、北に並びて大宮御所あり、此は皇太後の住せ給ひし宮なり。

よきうせき

Ko Kyo (Imperial Palace).



● 皇宮 御苑の北部 中央に在り 現存の宮殿は安政災後 西紀千八百五十四年皇宮火の御造營にして外廓東は寺町通り西は烏丸通りを以て堺し南は丸太町通りに面し北は今出川通りに背し面積凡そ廿五萬餘坪四面めぐらすに石垣を以てす曩日は親王公家諸縉紳の邸第皇宮を回りて外廓内にありき明治遷都の後皇宮のみ遺りて餘はみな廢趾に歸せしを今は悉く芝生となし點々小松を植ゑ稀に柳櫻をまじへ皇宮南門の前に小丘あり丘下の泉水きよく湛へ丘上の老松銀杏の巨樹と相並て蔭涼しく夏夕尤も佳し 近年これを堺町門内の西手なる九條御邸の丘上に移し置 西には梅林あり百花に魁して春を告げ清香遠く市街に及ぶまた白雲神社と稱する小社の傍らに蓮池あり晚香風涼しく 圓青嫩紅に映 じて甚だ佳美なり南の方丸太町にそひて九條殿の舊庭あり泉石の趣なほ存し紅葉の頃にいたれば池頭燃るがごとく水底朱をそよぎて頗る麗はし 外廓石垣内を御苑と稱し皇宮はその中央に位し南門を正門



とし東門を日後門と呼び西門を公卿門と呼びその北に並べるを臺所
 御門と呼び正北に又一門ありて朔平門と呼ぶ正門の内にもた宮垣あ
 り之に承明正日華方東月華方の三門をそなへ紫宸殿は南面して承明門
 と相對せり紫宸殿の西に清涼殿東北に小御所及び常御殿また北方に
 准后御殿等あり明治維新前の宮城圖に
 玉葉集 雲の上こゝのかさねの宿の春 院 御 製

續古今 さらしもしらぬ花を長閑き 中務卿親王

◎同志社學校 相國寺の北 當校は基督教主義に基きて高等教育を授く
 る本邦嚆矢の學校なり嘗て新島襄氏海外に渡り多年苦學のち岩倉
 全權公使に陪從して歐米諸國を巡視し文明の本は教育にありて教育
 の要は智徳の並進にあることを悟り此兩者を兼有して我國に學校を

當寺の什寶見るべきもの少なからず其重なるものを擧れば○白衣の
 觀音兆殿 ○十六羅漢陸信 ○花鳥畫三十幅芍藥に蝶、茨紫陽花小鳥、松に鶉、牡丹孔雀、南天に鳥骨、梅に黃鳥、紫陽花に鶉、稻穂に雀、蓬に鴨、桃に小鳥、貝、牡丹、花、魚、盤し、向日葵に鷄、雪の山茶花、雞二羽、同十三羽、夕顔に諸蟲、蘇鐵、蓋に雁、紅葉に小鳥、松、桐、風、松に鶴、柳に鷄 ○鳳凰の畫一幅林真 ○世尊說相の圖日光大 ○釋迦文珠普賢の三幅對無落款にして ○山水の畫一幅元張師筆 ○墨畫の虎牧溪の落款あり ○牡丹に雉愈裕 ○花鳥の畫呂紀 ○陳南先生浮浪の淵明粟里の圖子昭 ○水晶の十三塔一基
 塔中の各寺にも亦名工の手に成れる珍藏品多し 光源院には淵明渡洒の圖吳小 養源院には慈惠大師の畫像寺無大師 長得院には花鳥の畫小栗宗 大通寺には芭蕉に鶴の畫來徳 地藏の圖二幅小野、蘆山莊の青絲畫、柳里、森 釋迦の木像彫刻者は寺傳に定朝と云ふ 慈照院には不動二天の圖妙澤、山水、明文、墨梅、朱克、二天の像、三幅、物の内宅、釋迦の畫像、寺傳、張等

あり
 ◎上御靈鞍馬口の南、寺町の西に在り 祭神その他の事みな下御靈の條下に詳かにす
 ◎妙覺寺新町通り、鞍馬口の西にあり 日蓮宗にして開基は日實上人なり、境内なる祖師堂は古へ博多の盧山寺に在し一堂にして飛騨匠の建築に係り諸堂を造る者これを摸範と爲すといふ、又當寺の境内には有名なる畫家狩野古法眼以下數代の墳墓あり、當寺の什寶には○花鳥の畫二幅狩野、永 ○惟摩龍、虎の三幅對舟 ○山水の畫常信 ○菊の畫益信 ○芙蓉の畫信安 ○職人盡しの小屏風直庵 ○仙人集會張英 ○涅槃の像長寸、幅一丈一尺、四寸五分、寺傳 ○山水の畫元信 ○源氏繪の屏風長寸、幅一丈一尺、四寸五分、寺傳 ○雲龍の彫刻一個寺傳、左甚 ○日蓮の肖像寺傳、日蓮等
 ◎妙顯寺小川通り、北詰、妙顯寺前町 日蓮宗にして開基は日像上人なり、後醍醐帝の勅願所にして古へは西洞院二條南に在しを天正年間西紀千五百に此地に